
七英雄冒険譚

風夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七英雄冒険譚

【Nコード】

N6457U

【作者名】

風夜

【あらすじ】

この物語は、なんでもあり（予定）の最強厨二主人公が、剣と魔法の異世界「エレフティア」に飛ばされ、まあべつにいいやと開き直って、聖女やら魔女やら王女やら巫女やら忍者やら奴隷やらと一緒に遊んだり、戯れたり、謀ったり、戦ったり、ひよっとしたら恋愛するかもしれない異世界冒険活劇です。

第01話 はじまりの夜（前書き）

本作品は風の向くまま、気の向くまま、筆の向くままに執筆しております。

俗に言う、ご都合主義とかもふんだんに使用しております。

追記：凡そ1ヶ月程、読み易い小説を目指して、ああでもないこうでもないと考えた結果。とりあえず分割してみようという、ありきたりな結論に（^| ^；

第01話 はじまりの夜

どこかで、そんな予感はしていた。

月の明るい夜だった。

時刻は深夜。死者の如き静寂に支配された暗い夜道を、一人の少年が歩いている。幽鬼のように、ただ淡々と。

周囲に人の気配はなく、喧騒は遙か遠い。故に、酷く退屈そうに携帯電話で会話を続ける少年の声以外には何も聞こえない。ろくに整備もされていない寂れた小道において、ほんの僅かな足音さえ立てず、無機質で小さな声だけを周囲に響かせている様は非常に幽霊的で、もはや怪談の類である。

だというのに、当の本人は至って涼しい顔で、今回の標的が潜む廃ビルを目指していた。

ふと、空を見上げ、地を見下ろす。昨日は大雨。今日は快晴。おかげで水溜りのひとつも見当たらず、綺麗な満月が綺麗な夜空に映

えている。

夜目を駆使して、少年は迷いのない足取りで幾度か道を曲がり……やがて、開けた場所に辿り着いた。より強く降り注ぐ白銀の月光。前方には、今回の目的地である大きな廃ビルが聳え立っている。時代を三世代ほど先取りしたような前衛的デザインなのだが、あまりにも先取りが過ぎたのか、建設途中で廃棄されてしまった未完の野心。

「——さて」

無感動な間投詞を虚空に投げ、少年は足を止める。

月光に淡く照らされた少年の容姿は、率直に云って「夜」そのものの。詰襟タイプの男子用学園制服は上下共に純黒。真新しい特製の安全靴や両腕に嵌められたリストバンドも真黒。^{まっくろ}無造作に短く切られた漆黒の髪や、奈落めいて深い闇色の瞳も合わせれば、彼を黒い少年と呼ぶ事に違和感の入り込む余地はない。

世の不公平、並びに理不尽を顕現したような美形の顔立ちは——然れど夜気の如く鋭い目付きと、機械的で温度の無い眼光が、およそ愛嬌や愛想といった類を根こそぎ綺麗に奪い去っていた。

肝心要の体付きは華奢に映るが、実際は休まず弛まず鋼の如く鍛えに鍛え抜かれている。少なくとも、尊き学び舎の体育授業において、全力で手を抜かなければならない程度には。そして、左右の腰に差された二振りの短刀^{ナイフ}を自在に扱う程度には。

銃刀法など歯牙にも掛けない物騒な立ち姿だが、少年は幾つかの理由に基づき、特に隠す必要性を感じていなかった。

先日新調した安全靴が完全に馴染み切った事を確認して、少年は携帯電話を左耳に当てたまま夜空を見上げた。相変わらず、真円を描いた満月が淡い光を放っている。このまま団子でも片手に悠悠月見と洒落込みたい欲求を抑え、前方の前衛ビルを気怠げに見据えたまま、億劫な動作で溜息を吐く。

……どう考えても、自称善良な一般学園生が平然と佇む場所と時間ではない。況してや、向かう先が連続殺人犯、それも異能者の潜伏先ともなれば尚更である。

——尤も。

短刀^{ナイフ}だけでなく、拳銃を始めとした様々な近代兵器を大量に【貯蔵】している人間など、それこそどう考えても一般学園生では有り得ないワケだが。

『オイ、聴いているのか？』

そのまま暫らく夜風を身に浴びていると、呆れたような男の声が耳朵に触れた。

『聴いているのか、ジャック。よもや夜風を浴びながら悠々月見と洒落込んで、善良な一般学園生である筈の自分が、なんでこんな面倒な事をしなきゃならんだ、などと一人虚しく黄昏れているワケではあるまいな？』

「理解の有る上官で嬉しいね。その調子で、天真爛漫な泡遊びの邪魔をしてくれなければ、もっと嬉しかったんだけど」

軽口を叩きながらも、少年の【眼】は前方の廃ビルを鋭く見据えている。

『たわけ、貴様が着信拒否など小賢しい真似をするから、わざわざ呼びに行かせたのだぞ。女遊びはまた今度にしろ。いや、そもそも善良な一般学園生がああいう所に行くな』

いつも通りの小言に対して、少年もまた、いつも通り涼しげに微笑んだ。

「ふむ——なるほど、ささやかな抵抗が仇になったか。次からは転送設定にしておこう。許せ、総理大臣」

『何故おまえが総理の携帯番号を知っているのかは、敢えて訊かないでおこう。それより、標的は視えているのか？』

「もちろん。今も『4F』で哀れな少女達を相手に盛ってる。リストに載っていた娘達だ。床に転がってる連中も以下同文」

当然のように訊かれる異常な質問に対して、当然のように答える異常な少年。

『それ等の処理は此方の仕事だ。おまえはおまえの仕事をよく頼む』

「わかった。それと、悪いが彼女達の命は保証出来ない」

『問題ない——が、珍しい事を言う。何か厭な予感でもしたか？』

「いつもしてる。おかげ様でな」

『はは、若い頃の苦勞は財産だ。では頼むぞ、ジャック・ザ・リッパ』

物騒な呼名に少年は顔を顰め、同時に通話が終了した。

黒い少年……コードネーム・名無しジャックは携帯電話の電源を切り、自身の【蔵】に収納する。傍目には突然電話が消えたように見受けられたが、もちろん本当に消えたワケではない上、そもそも傍目が存在しない。単に、異能による彼専用の特種な物置空間に入れただけの話。

相変わらず前を見据えたまま、ジャックは左眼の【貯蔵】を外して、代わりに【遠触】とおふれを装備した。右眼の【透視】は続投する。一度に装備可能な異能は二つまで。故に、装備する異能の選択には細心の注意を払う必要があった。

間もなく、異能者同士の殺し合いが始まる。故に、見張りをしていた組織の人間達は既に引き上げていた。此処は既に死地だ。居座る理由が無い。無論、暗殺とは一瞬で行なうのが最も理想的ではあるが……生憎と、そうは問屋が卸さない。

敵は自身が監視されている事など疾うに感付いており、そうとも知らずノコノコとやってくる襲撃者を今か今かと待ち構えてすらいる。あまりに待ち兼ねたのか、捕らえた少女達を退屈凌ぎに蹴っている様を視て、もっとマシな見張りは居なかったのかと溜息を吐きそうになったが、流石に今回は堪えた。愚痴を垂れ流すだけで現状が改善されるのならば、少年は一晚中延々と垂れ流す自信が有る。

襲撃ルートを見定め、左右の短刀ナイフを鞘から抜く。無反射加工の黒

い刀身が月夜に溶ける。柄も黒ければ鞘も黒い。どこまでも夜色の少年は逆手で短刀ナイフを握った。

かつて写し盗った【透視】を以って前衛的な廃ビルを見据えたまま、少年は頭の中に有るスイッチに形而上の手を伸ばす。自身を切り換え、作り変えるスイッチさえ、闇に愛された夜色。必要以上に抵抗感の有るソレを、握り拳で叩き押す。

途端、心身の一切合切が、一瞬も要さずに暗殺者と化した。気が付けば、体は既に一陣の黒き魔風。疾走を開始した瞬間など覚えていない。縮地。無拍子。無我の境地。耳に心地の良い言葉を選ぶなら、そんなところ。

悪夢の如き無音走行。その最中、唐突に。ジャックの懷から、ひとりでに小さな円筒形のスタングレネードが現れ、ひとりでにピンが抜かれ、ひとりでに飛翔を開始した。

夜空を裂き、弾丸めいた速度で青い円筒が標的目掛けて飛んでいく。その姿は、恰も自ら意志を持つ生き物であるかのようだった。モノを動かす異能。それが、先程左眼に装備した【遠触】とちふれである。

予め触れておかなければならない。生き物は動かせない等々。幾つか制限は存在するが、これまで幾度となくジャックの仕事を円滑に進めてくれた異能だった。

デタラメな自動投擲の直後、目にも留まらぬ風が廃ビルの壊れた入口に辿り着くや否や、罅割れた壁面を、やはり無音のまま垂直に駆け上がる。当然だ。風が律儀に玄関から訪ねてやる道理など有りはしない。

決して止まる事はなく、寧ろ更に加速した風は、短刀^{ナイフ}を握り締め
たまま両手で耳を塞ぐ。スタングレネードが一足先に『4F』へ突
入。そうして、炸裂した。組織に所属する悪魔的頭脳の研究者達が、
人道的な配慮など欠片も気にせず開発した成果が、惜しげもなく凶
悪な閃光と音響を撒き散らした。

躊躇いもせず、ジャック自身も『4F』へ侵入。彼は【透視】で
全て視ていた。よって、嬲られていた少女達が裸体のまま気絶して
いる事も、標的が未だに健在である事も、自身に対して攻撃態勢を
取っている事も、全て全て把握済み。

そう……【透視】とは、ただ単に壁の向こうを透かして視る事を
差すのではない。異能者本人にも視えていない力の流れさえ、全て
全て視透かすのだ。故に次の瞬間、巨大で強大な五つの水爪に襲わ
れても、何ひとつとして慌てる必要は無かった。

「――」

自身の空間把握能力を駆使して、どこをどう動けば躲せるかを瞬
時に判断。

判断通りに体を動かして、爪の間を擦り抜け、回避に成功する。
直後、軍事演習を彷彿とさせる轟音が廃ビルを揺らす。壁が吹き飛
び、柱は裂かれ、床で気絶していた少女達が宙を舞い、ゴロゴロと
硬い床を転がっていく。

全身を白く穢され、尊厳という尊厳を徹底的に辱められた女達を
一瞥もせず、ジャックは太く丸い柱の裏側に身を隠す。全ては一瞬
の出来事。ただそれだけで、『4F』の一部が、まるで紙切れのよ
うに容易く千切られていた。

その原因。獲物を仕留め損なつた水爪達は、そのまま床に零れ落ち、瞬く間に『4F』を水浸しにしていくな。

「――」

敵は水使い。それは最初から教えられていた。侵入した瞬間に自分で確認もした。

【透視】ではない。ジャック自身が生まれ持つ本来の異能によって、彼は、彼の視界内に居る者の異能が分かる。敵は、予想以上に凶悪な異能者だ。集団という圧倒的且つ理不尽な暴力を個で捻じ伏せてきた怪物。だからこそ、怪物が呼ばれた。

迷惑な、とジャックは思った。敵の全身は透明な水の障壁で包まれており、生半な攻撃は一切通用しない。実際、爪の回避と同時に標的目掛けて投擲した左の短刀は、いとも容易く防がれていた。あの様子では、直接斬撃を与えたところで結果は変わるまい。少なくとも、スタングレネード一発で気絶してくれるようなカワイイ人間では有り得ない。

……この時、ジャックは少女達の救出を断念した。

積極的に進んで見捨てるつもりはないが、同じく積極的に進んで助け出すつもりもない。繰り返すが、此处は既に死地である。一秒でも早く標的を処理して、一人でも多く生存者を捻出する以外に敵うことなどない。

——パシャリ、という濡れた靴音。

気配遮断を怠った覚えはない。

にも関わらず、水使いはジャックの位置を正確に把握していた。黒衣の暗殺者は特に焦る様子もなく、七つの並列思考を高速で回転させる。

予め与えられていた情報と、実物を見て得た情報を照合して複数修正。分解分析を繰り返して戦術を練り上げ、同時に情報収集も怠らない。

パシャリ、パシャリ……と、男は軽い足取りで歩を進めていく。

水使いは知らない。知る由もない。柱の裏で身を潜めている少年が、己を死に至らしめる手段を既に幾つも幾つも編み出している事など、どうして知れよう。

「」

五感は良好。一貫して無表情のまま、ジャックは右の短刀ナイフを握る。

その足下には、先の一撃で運悪く真つ二つにされてしまった一人の少女が転がっていた。体内のグロテスクなモノが溢れ、透明な水を赤黒く染めていく。どう見ても……どう視ても死んでいた。そして、異能【遠触とおふれ】は、生き物でなければ動かせる。

まともな神経の人間ならば、恥も外聞も身も蓋もなく胃の中身を

吐き散らす光景に対し、暗殺者は眉一つ動かさない。彼は……ジャックは、たかが死者の冒険程度で躊躇うような、躊躇わせてくれるような甘く優しい人生など送っていなかった。

回る回る思考が回る。高速の取捨選択を経て、戦術を採用。見るも無残な肢体に、そっと左手を触れた瞬間、パシヤリという足音が柱の裏まで辿り着いた。

「フン。やっと来たかと思えばアレか。組織流の挨拶は随分と過激だな」

欲望に満ちた、然れど容赦無き精悍な男の声。

ジャックは、殺意と皮肉を以って応じる事にした。

「お気に召したようで何より。遅れたが、はじめまして殺人鬼。月の綺麗な良い夜だね」

「ああ、思わず礼儀知らずの痴れ者を殺っちまうくらいにな」

「そいつは結構。で、めでたく失敗した記念に、とっとと死んでくれる気はあるかい？」

「おうとも」

ニヤリと嗤い、水使いは右の手刀を水平に構えた。

「ここでオマエを殺って、残りの人生を心地良く過ごして、それからせいぜい天寿とやらを全うしてやるさ——！」

いつも通りの日常「じょうじあい」を前に、名シヤックも無き断罪者もまた、いつも通りに動き出す。

第01話 はじまりの夜（後書き）

以上、主人公ジャックの壮絶に血塗れた自己紹介（前編）でした。
遅筆ですが、よろしくお願い致します。

第02話 転眼の断罪者（前書き）

1話につき、凡そ5000文字程度を目安に書いていきます。

第02話 転眼の断罪者

一閃。水刃による横一文字。

それは頑強な柱を無視して、その向こう側に居るであろう侵入者のみに脅威を振るう。

だが、そこにジャックは居ない。間髪入れず、水使いは自身の周囲にサッカーボール大の水球を無数に生み出した。その顔に浮かぶは酷薄な笑み。まるで雅な指揮者の如く、死角に回り込んだ襲撃者を指差す。それが、一斉掃射の合図だった。

弧を描き、宙を駆ける無数の水球。一つ一つが手榴弾の至近爆破に匹敵する殺傷力を誇る球体達。それが、放たれた矢の如く突進する。

だが、そこにジャックは居ない。当然の帰結として、またしても獲物を捉え損ねた水球がシャボン玉のように破裂した。圧縮に圧縮を重ねられていた大量の水が、爆弾じみた勢いを以って一斉に解放される。

故に。それはまさしく爆発めいた暴力の嵐だった。壁が、柱が、床が、天井が、人体が、何よりも水という水が、それぞれ凶悪な破壊力を孕んだ破片と化して無差別に周囲を襲う。

だが、そこにジャックは居ない。彼は今、先程から水使いが無駄に暴れているせいで増え続ける少女達の欠片に触れる作業で忙しい。足下が水で満たされた暗い廃墟。束の間訪れる探り合いの沈黙。殺意に淀んだ重苦しい空気は、然れど両者にとつて日常風景。今宵、未だ一度も振るわれていない右の短刀^{ナイフ}は、相も変わらず闇に溶けたまま。

一方。襲い来る破片の群れを障壁で難なく防ぎ、水使いは忌々しげに舌打ちした。

「あー、面倒な……いや、ここは流石と褒めておこうか、ジャック・ザ・リッパー」

自信と余裕に満ちた呼吸のリズム。

「……。おや、これはびっくり。まさかご存知だったとはね……」

障害物を悉く無視して、執拗に己だけを狙う水刃の大群を事も無げに避けて、ジャックは慎重に【遠触^{とおふれ}】を発動させた。

「フン、知っているとも有名な。これまで数多の異能者達を処刑してきた魔人。人呼んで、切り裂きジャック。ま、こんな所までやってくるほど仕事熱心とは知らなかったがな」

「生憎と上官がスパルタだね」

陰から陰へ移動を繰り返しつつ、ジャックは呆れたように言葉を続ける。

「そういうアンタは——これだけ女を喰い散らかしておいてまあ、随分と元気ハツラツじゃないか、殺人鬼。どうかな？ いい加減、こんな物騒なコトからは手を引いて、一緒にコーヒーでも飲まないか？」

「お、そりゃいいな。オマエの手から物騒な短刀ナイフが消えれば考えてやってもいいぜ」

「それは困ったな。これが無いと、アンタをバラバラに解体するのが些か面倒になる」

如何にも余裕有り気な口調とは裏腹に、ジャックは自身の演算能力を最大限に發揮して、常人ならば気が狂いそうな精密作業に没頭していた。

「気にすんな、俺の水なら一瞬で殺れるさ。つーわけで、そこを動くなよ、ジャック・ザ・リッパー。今度こそ仕留めてやる」

全ての準備を終えて、ジャックは行動を開始する。

「おおっと、こわいこわい。亭主閑白もここまでくれば独裁だ。そこらに転がってる臣下おんな達の苦勞が偲ばれるよ」

「アア……いい女達だったぜ。思わず犯り壊すくらいにな。お、そうだ。なんなら一匹紹介でもしてやろうか？」

「またの来世にご期待ください、ってオチでなければ考えようかな」

「そう遠慮するなよ、大人しくしてればすぐに済——ッ!？」

瞬間、水使いは左側頭部に尋常でない衝撃を感じた。

何事だ。視線を向ける。否、向けざるを得なかった。顔がある。女の顔。断末魔の表情。血塗れの生首に睨まれ、一瞬硬直する。何だ。何が起こっている。僅か、白く染まる思考。水の障壁に阻まれ、直撃こそしなかったが、殺戮と蹂躪に慣れ切った水使いを以ってして、ひとりでに生首が飛んでくるといふ異常事態には、流石に戦慄を禁じ得なかった。

何故ならば——如何に強大な異能者といえど、男は間違いなく人間なのだから。

ならばこそ、その生首を反射的に粉碎したのは紛うことなき必然。次いで、自分の四肢を驚掴みにせんと、悪霊のように迫り来る九本の千切れた腕に、喉笛を喰い千切らんと怨霊のように襲い来る五つの生首に、吐き気という吐き気を否応なく誘発する数多の内臓に、男が堪え切れないほどの嫌悪感を抱くのも、また必然だった。

だが、それも長くはない。水使いは狂気の笑みを顔に張り付け、狂喜する。ヤツも外道。目的の為に手段を選ばず、限度というモノを全く考慮しない邪道であり、利用出来るモノは何であろうと利用する非道の暗殺者。

混乱は僅か数秒。上等、それでこそだ。水使いは笑みを浮かべたまま、自身に襲い掛かる全てを水砲で撃ち払った。もはや原型さえ留められず、無残に砕け散った人体の欠片。その作業も、僅か数秒。混乱と迎撃。合わせても五秒程度。

……そう。それは、ほんの五秒程度ではあったのだが。

ジャック・ザ・リッパーの疾走を前にして、それはあまりにも致命的な空白だった。

――さて。

水を差すようではあるが。

水使いは未だ当たり前のように無傷であり、まだまだ多種多様な手札を持っていた。

それは、液体だけに留まらない。例えば、固体。氷の剣を両手に纏わせ、標的を斬る事も凍らせる事も出来る。例えば、気体。最終手段として、男は小規模ではあるものの、水蒸気爆発さえ起こす事が出来る。相手の水分を利用した体内攻撃さえ不可能ではない。

暗殺者は思う。これが漫画やアニメなら、主人公は律儀に全部付き合ってやるのだろう。敵の技を喰らい、傷を負い、ピンチに陥り、だが最後には咄嗟の機転で逆転劇を繰り広げて物語を彩るに違いない。観劇側としても、その方が確かに面白い。

しかし哀しきかな、ジャックは戦闘狂でも殺戮狂でもなく……暗

殺者だった。敵が全力を出す前に己の全力を先に叩き付けるのが正解である。故に、水使いは己の異能を完全に発揮する機会を永遠に奪われ、本当に文字通り八つ裂きとなって絶命した。

……彼が最後に見て、感じたのは。

吸い込まれそうな奈落色の瞳と、己を切り裂く二振りの黒い短刀^{ナイフ}。そして、自分の障壁が何故突破されてしまったのかという、非常に素朴な疑問だけだった。

「やれやれ。これではどっちが悪役か分からんな」

生首六つ。腕九本。その他諸々に加え、最後に短刀^{ナイフ}一振り。

【遠触^{とおふれ}】と【透視】を限界まで酷使した奇襲は成功。短刀^{ナイフ}に付着した血液を拭いもせず、ジャックは僅か数分前まで水使いだったモノを油断なく観察する。並行して、周囲の気配を慎重に探り、勝利直後の安堵を狙った第三者の奇襲が無い事を確認した。

異能には、傷を負う事を条件に発動するタイプも存在する。中に

は自身の死を以って発動する異能さえ実在する。基本的に、異能者が保有する異能は一つのみ。しかし、ジャックのような例外が他に存在しないとも限らない。

二十四時間、三百六十五日。その全てにおいて油断をせず生きる事は到底不可能である。だからこそ、決して油断をしてはならない時と場所を定め、厳守するのが現実的な対処法。暗殺者ジャックにとって、それがまさに今だった。

勝利を確信した時。勝利を獲得した時。

取り分け、ジャックが現在厳守しているルールが、その二つである。他にも、安全地帯に辿り着く前後。電話で片耳が塞がっている時……等々。己で定め、己で守る。それを必死に続けてきたからこそ、少年は最強の断罪者として組織に重宝されているのだ。

一頻り安全確認を行なった後、ジャックは新たに得て左眼に装備した【水術】で、短刀の血を綺麗サッパリ洗い流した。次いで、周囲に散らばった遺体の残りに目を向ける。謝罪はしない。ただ、少年は自問する。水使いの死を以って贖罪とするのは、果たして傲慢か。

そして、自答は程無く速やかに。その問いに答えられるのは、他ならぬ彼女達のみ。

「……機会が有れば、霊媒師でも呼んでみるか」

興味本位で呼ばれる彼女達にとっては、非常に災難且つ大迷惑である。

だがそれもまた、本当の意味で答えを返せるのは彼女達のみ。そういえば、と生き残りの可能性に思い至り、改めて周囲の気配を探るが……居る筈がない。今回の標的は、殺し合いというモノをまるで分かっていなかったが、その異能は反則級の性能だった。……元より、自然系の異能は、それだけで絶大だ。組織が長年手古摺^{ていず}っていたのも頷ける。

だが、殺し合いの駆け引きには疎かった。あまりにも絶大な異能故、一方的な殺戮に慣れ切ってしまった。敵の悪足掻きを愉しんでしまうほどに。だから、たかだか少々体術が優れているだけの人間風情に殺されたのだと、ジャックは酷く白けたような気分になった。最初から本気で襲い掛かっていれば、自分程度どうにでもなっただろうに、と。

短刀^{ナイフ}を鞘に仕舞い、少年は溜息を吐く。

「喋り過ぎなんだよ、もったいない……………」

その一言を以って、感傷的な時間消費を終え、ジャックは左眼に軽く手を当てた。

てんがん
転眼。

それが……ジャック自身の、生まれ持った異能である。

この世界に存在する数多の異能。必然として、その中には他者の

異能を利用するタイプが存在する。自分自身だけでは何の異能的価値も無いが、ひとたび他の異能者と接触すれば、恐るべき猛威を振るう特異な能力。

詰まる処、まさしくジャックがソレに該当する。

彼は、瞳を介して、他者の異能を自身に転写して保存する、所謂複製系コピーの異能者である。写し盗った異能を使用するには、左右どちらかの瞳に装備しなければならず、よって一度に使用可能な異能は二つまで——といった、幾つかの制限は無論存在するものの、ひとたび複製した異能は基本として自由自在に使用可能。

そんな、異能者次第で最弱にも最強にもなれる異能……それが【転眼】である。

尤も、タダで転写出来るほど世の中甘くはない。前述通り、異能を写し盗る為には、複製対象の瞳を間近で見詰めなければならない。勿論、自分の肉眼で。【透視】を使ってズルをする事は出来ない。以前実験してみた事もあるが……結果は推して知るべし。

睨むだけで対象を発火させる。目を合わせるだけで己の虜にする。心を読む。獣を操る。姿を偽り姿を消す。そんなデタラメな異能者達を相手に、瞳を合わせるなんて悠長な真似が如何に危険極まりないかは、改めて語るまでもないだろう。

事実、少年は裏社会で長年生き続けてきたが、現在保有している異能は先程の【水術】を含めても七つである。それを多いと讃えるか、少ないと蔑むかは個人の見解や価値観によるだろう。ひとつ云えるのは……少年の異能は、戦えば戦うほど、確実に鋭さを増していく。それこそ「ジャック・ザ・リッパー」という異名が広まるほ

どに。

ちなみに余談だが、瞳を発動条件にしている異能者は意外と多い。故に、組織に所属する異能者達も、当然何かしらの対策を取り、それが出来ない者は大抵目を合わせてくれない。【転眼】の存在は、ジャックが何よりも優先して秘匿している為、強引に瞳を合わせるワケにもいかないのである。

精神系異能者に頼んで、瞳を合わせた事を忘れてもらっ、といった強行策も考えないではなかったが……メリットとデメリットを天秤にかけ、異能だけに溺れて鍛練を怠らないよう自戒するという名目を以って、ジャックは無闇矢鱈に異能を収集する事はしなかった。

——閑話休題。

ここで話は戻るが、水使い最期の疑問。そう、常時自動展開していた障壁を、ジャックが突破出来た理由は簡単だ。まず、死体を囷に接近。用済みとなった【遠触^{とあふれ}】を外し、即座に【水術】を左眼に転写。後は障壁を上回る水刃を短刀^{ナイフ}に纏わせただけである。

そうして……ただでさえバケモノじみた切れ味を孕むジャック・ザ・リッパの斬撃は、事此処に来て更に飛躍してしまったのだ。

然り。最初の投擲が障壁を突破出来なかった時点で、ジャックは確実に水使いを殺す為、その強力な異能を写して利用する為だけに行動していた。バラバラ死体を弄び、会話により男の注意を惹き付けた。結果は単純。ジャックは生きて、水使いは死んだ。

だが……【転眼】の真価は別にあるとジャックは考える。他者の異能を転写して我がモノとする為には至近距離まで接近しなければ

ならない。しかし、単純に相手の異能を把握するだけならば、ただ視界に入れるだけでいいのだ。

敵の手の内が予め分かる。

その反則的な特権を、最大限に活かしてきた。

たからこそ、ジャック・ザ・リッパーは、今もこうして生きている。

第02話 転眼の断罪者（後書き）

以上、主人公ジャックの壮絶に血塗れた自己紹介（後編）でした。
次話から、徐々にファンタジーへ移ります。

第03話 導き誘う呼声（前書き）

相も変わらず拙い物語ですが、楽しんでいただければ幸いです。

第03話 導き誘う呼声

「―――」

恙無く仕事を終え、家路の第一歩を踏み出そうと踵を返す、その直前。

ふと、誰かに呼ばれたような気がして、ジャックは振り返った。当然だが、誰も居ない。その黒い瞳に映るのは、見るも無残な惨死体のみである。嗅ぎ慣れた血の匂いに、感慨など抱きようもなく。ただ、そこに死体が在るという事実を再確認する。

……仕事は終わった。面倒な後処理は組織に任せ、このまま帰宅して布団に入れば、またいつも通りの朝が待っている。明日は――いや、既に今日は、楽しみに待っていた小説の発売日だ。万全の状態で読み耽る為にも、今夜は早寝を心掛けておきたい。

しかし。少年は振り向いたまま、その場をジッと動かない。

夜天より降り注ぐ、白銀の淡い月光。吹き抜ける夜風が、少年の黒い髪をサラリと撫でて去ってゆく。つい先程行なわれた有り難い改装工事のおかげで、『4F』の壁は滅茶苦茶に切り裂かれており、日当たりも風通しも以前とは比較にならない。

故に。光も、風も、もはや遮られる事はなく、これ幸いとばかりに廃ビル内部を照らし、奥の奥まで吹き抜けていく。したがって、視界は非常に良好だった。水使いも、少女達も、間違いなく死亡している。人の死を見慣れた暗殺者に、死んだフリなど通用しない。

……実は、此処に倒れている少女の一人こそが本物の水使いで、先程まで戦っていた男は只の傀儡に過ぎなかった、という面白可笑しい設定はない。又、少女達の中に、未だ自覚の無い異能者が紛れ込んでおり、その異能は自身の死を以って発動する恐ろしい能力だった、という迷惑甚だしい展開も見受けられない。

——仕事は終わった。

冷めた理性が訴える。もはや、此処に居る理由はなく、意味もなく、価値もない。七つの並列思考が、揃いも揃って早く帰ろうと促してくる。躊躇う理由など欠片もない。疾く疾く家に戻ればいい。留まる必要など微塵もない。疾く疾く家に帰ればいい。その筈だった。

しかし、それでも。少年の黒い瞳は、暗闇の奥深くを真つ直ぐに見据えている。その鋭い眼光は、ようやく始まったのかと云わんばかり。

そう……彼にとっては、ここからが本番である。仕事という名の前座が終わり、名も無き本題が密やかに幕を開ける。

………夜は、まだまだ浅い。

凡百の人間達ならばいざ知らず、少年にとっては理由が有り、意味が有り、価値が有り、何よりも、予感があった。良い予感か、悪

い予感か。それさえも曖昧な——然れど今宵、確固として少年に根付いていた、あるひとつの予感。

夜色の少年は風に吹かれ、ただ静かに耳を澄ませていた。何か、使命感にも似た不可解なモノが、心の底から湧き上がってくる感覚。それは決して不快ではなく、寧ろ熱い昂揚すら覚えていた。柄ではないが、嫌いでもない心の温度。

「——」

また、声が聞こえた。

再び鞘から短刀^{ナイフ}を抜いて、目撃者の可能性を白々しく思案する。組織の人払い^{人払い}は執拗とも云えるほど徹底的だ。それでも、万が一という危険性は常に存在しており、彼等も重々承知している。事実、不運にも仕事を目撃されてしまった事例は幾つか在る。

然り、反省は教訓に。そして、教訓は実践してこそ始めて真価を発揮する。

況してや、此度の敵は自然系異能者。万が一を億が一に。億が一を兆が一にする勢いで、彼等は念入りに、可能性という可能性を片端から潰していた。更にジャック自身、突入前に「透視」を使用して、周辺の確認を注意深く行なっている。

兆が一の目撃者か、或いは死者達が早くも化けたのか、それとも……………。

熟考の末、ジャックは左眼の【水術】を外して、再度【遠触】を装備する。流石は最強と謳われる自然系、とでも云うべきか。ジャ

ツクというデタラメな大器を以ってしても、殆ど加減が効かない。尤も、おかげで水使いの障壁を難なく突破出来たのだが。

とはいえ、現段階の実戦投入は確実に時期尚早。あまりにも不安定が過ぎる。

無論、それを差し引いても充分に絶大な性能を誇る異能ではあるが、かつて異能の制御を誤った者達の末路を思えば、無理に使用する気も、必要もなかった。異能だけに頼り切り、溺れ切る。そんな愚か者に成り下がる事だけは、断じて避けなければならない。

かといって、このまま【水術】を封印してしまえば、宝の持ち腐れもいいところである。

実験や訓練を積み重ねる必要性を感じて、ジャックは暫らく学園を休校する心を固めた。液体。固体。気体。どれも応用範囲が広く、研究甲斐がある。出来ること、出来ないことを見極める為。水を知り、水と共に在る為。何事にも、準備というものは必要不可欠だった。

準備とは常に万端である事が望ましいが、人生においては、常に準備不足の連続である。出来る事を出来る内にやっておかなければ、後悔するのは己自身。ジャックは、過去の苦い経験から、それを厭になるほど知っていた。

「――」

取り留めのない思考に身を委ねていると、三度、みたひ声が聞こえた。

澄んだ女性の声。聞いているだけで心が癒され満たされる。ジャ

ツクは右眼の【透視】で改めて廃ビル内部を検索する。培ってきた経験が、幻術や洗脳といった類を警戒していた。だが、やはり誰も居ない。此処に居るのは、間違いなく自分のみ。

「……………」

しかし、妙に引っ掛かるモノが視えた。

此処『4F』ではなく『1F』の小部屋。丁度、この廃ビルの中
央となる位置に、秘密の扉と思しきモノが隠されている。勿論、扉
の存在自体は然程大した問題ではない。未だに、よく分からないデ
ザインのビルだ。隠し扉の一つや二つ、今更驚愕には値しない。

問題は。

扉の向こう側が全く視えない、その一点に尽きた。

【透視】とは、読んで字の如く透かして視る異能である。よって
隠し扉の発見はおろか、その先を視透かす事など造作もない。千里
眼の力をも併せ持つジャックの反則的【透視】に掛かれば、秘密の
部屋などいとも容易く視透かして、瞬く間に全てを暴き出せる筈だ
った。だというのに、まるで靄が掛かったかのように何も視えない。

……理性の主張は、尚も一貫して変わらない。そんなモノには構
うな。早く戻ろう。早く帰ろう。早く離れて、早く寝よう。早く、
一秒でも早く忘れてしまえ。そこには何も無い。そこには誰も居な

い。ならばわざわざ向かう理由はなく意味はなく価値はない。

普段ならば即座に採用して、即座に決行する魅力的な提案。だが今宵に限り、ジャックは喻えようもないほど興味を惹かれてしまっていた。声は、予感の源は、きつと其処に在る。全身の悪寒を上回る灼熱の昂揚が、このまま大人しく帰路に就く事を許さない。

「――ふむ」

こういった不可解な状況下において。

自身の直感や心臓の鼓動、そして全身の悪寒が常に正しいことをジャックは知っている。彼は、今の自分が正常な状態ではない事など百も千も承知していた。組織の精神系異能者によつて開発された並列思考や精神防壁は、決して伊達や酔狂の類ではない。

故に、ジャックは調査を決断する。そもそも、帰るつもりならば始めから短刀など抜いていない。ジャック・ザ・リッパーが得物を抜き放つ時。それは、命を懸けると決めた時だ。少年は、それこそ伊達や酔狂で血塗れの道を歩んでいるワケではなかった。

どのみち死体処理の為、いずれ組織の人間達が此処に来る。そういった意味でも、結論は変わらない。仮に危険なモノが潜んでいるのなら、それを予め排除しておくのも己の役割。事が起こってからでは遅い。死人が出てからでは、何もかもが遅過ぎる。

組織の調査員に頼る気はない。今、ジャックは感情で動いている。本気で催眠術を疑ってしまうくらいに、あの「声」が気になって気になって仕方がない。故に少年は、どうしても自らの目で予感の正体確かめなければ気が済まない。

——引き返す選択肢は、有り得ない。

となれば、話は実にシンプル。取るに足りない子供のワガママに他人を巻き込むワケにはいかない。これは、ただそれだけの話。元より単独で標的を処理してきた暗殺者にとって、他者との、集団との連携など調子を乱す厄介事に他ならない。

ならば、決断は速やかに実行へ。

命を懸けるからには、失敗など断じて許されない。

「」

一步、前に踏み出す。

それは奇しくも。家路とは、全く正反対の方向だった。

エントランスホールを經由して、倉庫らしき小部屋の前に辿り着く。

既に風音は遠く、月光は暗闇に喰われ、僅かばかりの恩恵を残すのみ。本能的に恐怖心を煽る黒き世界を、然れど黒尽くめの少年は意にも介さず調査に没頭していた。無表情のまま足下を観察する。

埃や塵に塗れており、足跡の一つも見当たらない。

此処に来る途中。通路や階段には、水使いの足跡や、人間を引き摺ったような跡が幾つか散見された。靴跡、歩幅、体格等から、該当する人物を推測する……までもなく、明らかに上で臨終を迎えた者達の痕跡と見て、まず間違いはない。

だが此処、倉庫部屋周辺では、人の痕跡が全く見当たらない。にも関わらず、ジャックの直感はこの処がアタリと告げている。思考を回転させながら、【遠触】で空中に浮かせている携帯電話型の諜報機^{アラーム}へ視線を移す。科学側は、沈黙を以って無害を主張していた。

改めて、周囲の気配を慎重に探る。無論、予め【透視】で確認は行なっているが、信用も度が過ぎれば妄信に堕ちてしまう。安全装置は、ひとつでも多いに越した事はない。やがて確認を終えたジャックは、短刀^{ナイフ}を握り締めたまま、扉の取っ手に軽く触れた。

扉には酷く錆び付いた南京錠が掛かっていたが、正味問題ない。【遠触】を装備しているジャックの前では、如何なる錠前も意味を成さない。少年の【遠触】は、モノを動かす異能であると同時に、モノの構造を把握する異能でもある。

後は、実に単純明快な話。彼が触れた物は、全て彼の支配下に置かれる。錠前の開錠など朝飯前だ。加えて、錠や扉だけに飽き足らず、倉庫部屋全体を見る見る侵食していく様は、宛ら超一流のハッキングに酷似していた。恐るべき演算能力。仮に、常人が同じ【遠触】を得たとしても、ここまで凶悪な異能行使は不可能だろう。

まるで敗北を認めるかのように、南京錠は一瞬で扉を離れ。

ようこそとても云わんばかりに、鋼の扉は一瞬で道を譲る。

もはや、便利で快適な自動扉と殆ど何も変わらない。五秒で部屋の構造を完全に把握したジャックは、更に肉眼で室内を具に観察する。^{くさや}

此処も例に漏れず、其処彼処に埃や塵が君臨する小汚い部屋だった。前以って【透視】で確認した光景と相違はなく、つい今し方【遠触】で把握した構造とも相違はない。諜報機も問題なく宙に浮いたまま。異常も正常に機能しており、体調や精神にも別段変化はない。

——だが。隠された扉の向こう側は、やはり視えないまま。

「……なんとまあ面妖な。こうなると、まるつきり肝試しだな」

他人の掌で踊るのは好まない。だが、ジャックの調査は止まらない。

右眼の【透視】を外して、代わりに【貯蔵】を再装備する。ここから先は【透視】が全く効かない。隠された秘密の扉を開けた途端にドカン、という実に間抜けな結末は用意されていないようだが、どうにもこうにも、不可解な思いは拭えない。

倉庫室内。如何にも意味有り気に配置された多数の木箱達を綺麗に無視して、ジャックは一切の迷いなく奥の壁へ……巧妙に隠された秘密の扉へ接近する。此処は既に自陣も同然。ならば、もはや触れるまでもない。【遠触】による無言の命令は、疾うに下されていた。

瞬間。本来の開錠手順なぞ知ったことではないと云わんばかりに、あっさりと壁の一部が自動で床に沈み込んだ。現れたのは、肝どころか心臓を試されるほどに不気味な下り階段。広がる闇は、更に深く、更に濃い。階段は、ひたすら地下へ向けて真っ直ぐに伸びている。下へ下へ。底へ底へ。ひたすらひたすら。ひたすらひたすらどこまでも。

ジャックは【蔵】から暗視眼鏡を取り出して装備する。見た目は只の黒縁眼鏡だが、右のレンズはスイッチひとつで暗視望遠鏡の機能を発揮する。更に、超小型の特製偵察カメラを手に取り、早速調査を続行するべく【遠触】を発動する――その、寸前

ジャックの保有する、身の危険を察する全機能が一齐に警鐘を鳴らした。

――曰く。此処から先で、異能を使つてはいけない。

「……………」

目が覚めるような全身の悪寒。派手に狂い鳴る警鐘。心臓が、ドクンと大きく鼓動する。

ジャックの【転眼】は、複製系常時展開型に分類される。そして、このタイプの異能者は基本的に力のオンオフが効かない。加えてジャックの場合は、瞳に異能を装備している状態そのものが、既に異能行使の一環である。異能者と瞳を合わせる事も厳禁だ。

故に、ジャックは直感に逆らうことなく、即行で両眼から【遠触】と【貯蔵】を外した。テレキネシスより解放され、すぐさま落ちてきた諜報機を回収。カメラは胸元に取り付け、撮影を開始。その性能たるや、売れば小さな家が買えるほど。

無論、こんなものが最善策では断じて有り得ないことなど承知している。よって、気分は宛ら、紛争地域に単身乗り込む無謀なりポーターといったところ。安全性も効率性もない。寧ろ危険性だけが増しに増している。

素直に組織の力を頼ればいいというのに、その選択肢は相変わらず「声」に奪われたまま頑なに戻らない。我ながら本気でどうかしているな……と、ジャックは声を出さず皮肉気に笑った。せめてメーイルで報告だけはしておこう、と再び諜報機を手に取り操作する。

『面白そうな声に誘惑されたので、幼き日の初な冒険心とか燃やしてみました。それなりにお世話になりましたとき。by 善良な一般学園生』

「これでよし、と」

にやりと笑い、ジャックは諜報機を懷に仕舞った。

余裕が有る訳でもなく、自信が有る訳でもない。ただただ、今でなければならぬという予感のみが全身を支配していた。

危険を冒す者が勝利する。虎穴に入らずんば、虎児を得ず。痛みなくして得られるモノはない……等々。自身に都合の良い言葉を羅列して、ジャックは闇に足を踏み入れた。

第03話 導き誘う呼声（後書き）

ご感想、ご意見等を頂ければ、作者が大変喜びます。

第04話 不思議な結晶（前書き）

危うく現代ファンタジーになるところでした（＾　＾　；）

第04話 不思議な結晶

一步一步、細心の注意を払いながら階段を下る。

完膚なきまでに殺された足音と気配。少年は、暗殺者として鍛え抜いた隠密技能の全てを費やして、自己の存在を掻き消していた。その足運びに迷いはない。こうして他者の領域へ侵入する事には慣れている。左の短刀^{ナイフ}を胸の前に構えて、ひたすらひたすら下っていく。

視界は良好。暗視眼鏡は正常に機能しているが、両眼とも異能を装備していない状態にはやや不安を覚えてしまう。手札が激減するという理由も勿論有る。だがそれ以上に、妙な異能を転写してしまわないか、という懸念の方が遥かに大きい。

物語でも、よく見掛ける話だ。ヒトと異なる能力を持つが故に、生来体が弱く、入退院を繰り返す。超人的な身体能力を持つが故に、他人から定期的に血液を採取しなければ生きていけない。そんな設定や背景を持つ者達の物語は枚挙に暇がない。

そして、繰り返すがジャックの【転眼】は常時展開型である。本人にその気が無くとも、間近で瞳を合わせれば異能は転写されてしまう。必要もない異能を得て、拳句、引き換えに体が弱ったり、血を欲したり———そのような致命的な欠点を抱えるなど、言語道断。

彼が常に異能を装備しているのは、そういった事故を防ぐ為でもある。逆に他者の異能を写し盗る為には、左右どちらかの瞳から、前以って異能を解除しておかなければならない。一長一短という言葉が実によく似合う転写条件と云えよう。

「――」

階段は長く暗く、まるで地獄に向かって落ちていくかのよう。

至極当然、こうして下りた階段は、また後で上らなければならぬ。ジャックは、自身が何段下りたのかを、きちんと記憶している。だからこそ、上る時の苦労が正確に把握出来てしまい、余計に気が滅入る。能力が高いというのも、一概に良い事ばかりではない。

今宵。日付としては昨日。ジャックは働き尽くめだった。標的の潜伏先まで、遠い道程を移動して、最強と謳われる自然系異能者と殺し合い、果ては意味不明で不可解な現象調査。如何に卓越した暗殺者といえども、無尽蔵の体力を持つワケではない。

……だというのに、人間離れ著しい体力と精神を保有する黒衣の少年は、疲労や焦燥など全く感じさせない涼しい顔で、暗い階段を一步一步攻略していく。下り始めて、既に相当な時間が経過していた。廃ビルの高さに換算すると、さて何個分だったろう。

右手で壁に軽く触れる。石造りの階段は、何処も彼処も酷く古い。少なくとも、廃ビルを構成する材質とは全く違う。推測の域を出ない仮説が多過ぎて、現段階では絞り込めない。頼みの綱である予感には相変わらず無口で、ただ奥へ進めと命じるのみ。

そうして一歩進む度に、予感は半ば確信となってジャックを突き動かしていく。こうまで好き勝手されてしまうと、天邪鬼な性根を發揮して逆に帰りたくなるほどだった。しかし、ここで踵を返すワケもいかない。ジャックは黙々と足を動かした。

やれやれ、と内心で盛大な溜息を吐く。自分が意外と無鉄砲であることを心底思い知り、黒衣の断罪者は形而上で頭を抱えた。組織の年長者達には若い若いと言われ続けてきたが、誠に仰る通りです……と自分でも呆れた、次の瞬間。

「――」

思わず口笛を吹きそうになり、流石に自重する。

光。これほど地下深くまで下りた先に、光。まだ随分と遠いが、階段の先に光が見える。人工的なモノではなく、故に益々有り得ない。無色透明の光が、早く来いと急かしてくる。異常だ。ジャックは微かに目を細めた。予感の源が、すぐそこに在る。

さて、如何なる厄介事が自分を待ち受けているのか。それが、暴力で解決出来るモノなら別に構わない。口先で解決出来るモノなら寧ろ喜ばしい。どうにもならないシロモノなら、即行で逃走しよう決めておく。どこかで、それが無意味である事を知りながら。

現状を楽しんでいる心を自覚しつつも、理性に忍び込む諦観を振り払う。ヤケになってはいけない。そういう時が最も危険であるとジャックは知っている。思考を放棄した結果、帰らぬ人となった同僚達が脳裡に浮かぶ。その教訓を、無駄にしてはならない。

ともかく、終着点は近い。少年は一度立ち止まり、遠くに見える

光を油断なく観察する。異能の輝きではない。【転眼】が否定する。人工の輝きでもない。肉眼が否定する。最後の候補は天然の輝き。だが、少年の記憶する膨大な知識と、並列思考による高速分析を以ってしても、一向に正体が掴めない。

戻ろう。理性が促す。

行こう。予感が促す。

危険の気配をビンビンに感じつつも、引き返す選択肢は奪われている。

尤も、何を以って危険と見做すのか、それ次第ではあるのだが。或いは最初から、危険を察する感覚が麻痺していたのか。いずれにせよ、本当に危険なモノが存在していた場合は、速やかなる調査並びに排除を遂行するのみ。

……………ま。こうなったら、精々冒険を楽しむとしようか。

ジャックは、再び階段を下り始めた。

辿り着いた先は、神聖な神殿だった。

基本は白く、石造りの広大な空間。幾何学的な模様が幾重にも刻

まれた床。到底地下とは思えぬほどに高い天井。等間隔にズラリと並んだ太く丸い石柱。どれもこれも見た事のない材質で、染みのひとつも見当たらず、とても清潔の一言では片付けられない。

—— 清色。清美。清逸。清雅。

空気は清気と清香に満ちており、空間は果てなく清楚で清絶。

血に塗れた暗殺者であるジャック・ザ・リッパーにとって、この清浄な世界はあまりにも恐れ多く、どこまでも居心地が悪かった。一瞬、ここで呼吸をしても許されるのか、真剣に検討してしまう。外の穢れを持ち込むことに、本気で躊躇を覚えてしまう。

とはいえ、いつまでも呆けているわけにはいかない。

まず、ジャックは暗視眼鏡を外す。この清光に満たされた空間では、もはや無用の長物。半ば意地になって、短刀ナイフを手に握り締めたまま、一步踏み込む。暗殺者の足音は響かない。一度、大きく息を吸って、吐く。とても好きにはなれそうもない味だった。

周囲を見渡して、神殿内を観察する。静かだった。寂寥感さえ齎すほどに。聖なる世界に邪なる自分が一人きりで取り残されたような錯覚を感じて、喻えようもない怖気が奔った。落ち着け。精神を制御して、圧倒された心を一瞬で立て直す。

「……見付けた」

敢えて声を出して、ジャックは自身を鼓舞する。

その鋭い視線は、一直線に神殿の最奥を貫いていた。ドクンドク

ンと心臓が大きく鼓動を打ち鳴らす。常に涼しげだった少年の顔が引き攣っている。無理もない。ソレは、イヤでも視界に飛び込んでくる。目を逸らすことさえ、許さずに。

短刀^{ナイフ}を強く握る。闇に溶け込む黒い刀身が、此処では酷く浮いていた。

神聖なる神殿の最奥。

廠かで清らかな白き祭壇の上。

そこに、ひとつの大きなクリスタルがあった。

無色透明の光を絶え間なく放ちながら、ソレは静かに浮いている。

縦長い五角柱の上下に、五角錐をピッタリと合わせたような、無色透明の結晶。大きさはジャックの身長よりも僅かに高く、両腕を回せば辛うじて抱き抱えられる程度。神聖世界の偉大なる主にして、ジャックを此処に導いた予感の源。

一目見て、理解した。自分には理解出来ない事を理解した。

況してや破壊など、夢のまた夢。たとえ核兵器を千発撃ち込んだ処で無駄だろう。アレは何か、特別なモノに守護されている。干渉する為には、それこそ何か特別なモノが必要だ。それは一体。分からない。額に汗が滲む。いつの間にか、思考が熱に犯されている。

「——っ!？」

マズイ、と直感した。

ふらふらと、覚束無い足取り。自分の意志ではない。クリスタルに引き寄せられている。ヤバイ。全力を以って背後を振り返り、ジャックは心の底から愕然とした。階段が、無い。上下左右前後、何処にも無い。莫迦な。何故。ドクドクドクドク。心臓が悲鳴を上げる。

一步。また一步。少年の足は、ひとりで奥へ向かう……!

「——!」

どんどん引き寄せられる。逆らえない。抗えない。逃げられない。

ジャックは打開策を求め、全速で思考を巡らせた。このままだとどうなる。彼の足は、美しいクリスタルに向かって歩いていく。辿り着けば、どうなる。不明。回避する方法は。上へ戻る為の階段は消失。再出現の手段は。不明。スイッチの類は見当たらない。

【水術】で神殿を破壊するか。却下。絶対に此処で異能を使うなと、全細胞が絶叫じみた激しさで警告してくる。何故だ。それも不明。体が熱い。両の眼が焼ける。弄られている。否、弄られているのは、保有している全ての異能。何が起こっている。やはり不明。

どうする。考えろ、頭を使え。ジャックは熱に浮かされた思考を回転させる。ふらふらと足が動く。よろよろと前へ進む。……そもそも、これはなんだ。催眠? 洗脳? 幻術? 【転眼】を以って

しても、この異常現象の正体が全く掴めない。

……………いや、待て。

【転眼】で識別が出来ない。

つまり、これは異能ではない、別の力……………？

「なら、これは——」

また、一歩進む。進む度に、心臓の鼓動は疾く速く、何より強く
呼応するように、無色透明のクリスタルから発せられる光が強くな
っていく。どうなる。取り込まれるのか。喰われるのか。吞ま
れるのか。どれも御免蒙りたい。

針で刺すような、強烈な頭痛。素手で体内を掻き回されるような
全身の激痛。ハハ、と嘲笑が漏れる。どうやら、直感麻痺説が正し
かったらしい、と思考の一つが形而上の溜息を撒き散らす。匙を投
げるな、と黒髪の少年は自分自身を叱咤する。

とはいうものの……拷問の訓練を受けたジャックをして、零れる
呻き声を抑え切れない。痛みに笑い、そんな自分の無様を嗤う。率
直に云って、本当に本気で気が狂いそうだった。異能は使えない。
短刀ではどうにもならない。都合の良い第三者の登場などたる筈も
ない。いっそ清々しいほどのないない尽くし。どうにもならないモ

ノはどうにもならない。

それでもジャックは逆らう。抗う。逃げる為ではなく、戦う為に行動する。

クリスタルを睨み付ける。元凶は間違いなく、あの結晶。よって、この状況の打開策は、あの結晶の消去以外に有り得ない。方法は未だ不明。しかし少なくとも、己が肉体の自由を取り戻す事が大前提であることは疑いようもなかった。

「チィ……ッ！ くそ、なんて間抜け——！」

後先も何もなく、正真正銘の全身全霊を賭して両足に力を込める。

生まれて以来、ずっとずっと付き合ってきた自分の足だ。結晶如きにくれてやる道理など有りはしない。汗だくになりながら、ようやく制御を取り戻す。しかし、既にクリスタルは目と鼻の先。光は、もはや太陽を彷彿とさせるレベルだった。

危険だ。本能に従い、全力全開で後ろへ跳ばうとした、まさにその瞬間。

「……………っ！？ ——ッ！」

頭に、得体の知れない知識が書き込まれていく。

知らない筈の言語。英語ではない。フランス語でもない。ドイツ語でもイタリア語でも、スペイン語でもロシア語でもラテン語でもギリシャ語でもアラビア語でも中国語でもない。だが、まるで母国語のように刷り込まれる未知の言語。

勿論。ジャックは、この地球上全ての言語を把握しているわけではない。だがそれでも、心のどこかで理解していた。恐らく、この言語は、地球上の何処を探しても、存在しない。莫迦な、とは言えなかった。有り得ない、とも言えなかった。

湧き上がる疑問の回答は一向に得られない。頭痛が酷い。常人なら疾うに気絶している。なまじ痛みにも耐性を持つが故に味わう地獄どうせなら閻魔を出せよ、とジャックは嗤う。全身の激痛が増す度に、何かよく分からないチカラが体内に流れ込んでくる。

既にクリスタルは見えない。目に映るのは、ただただ眩しい光のみ。

クリスタルが、更に一際強く輝く。

何が起ころのかは分からない。だが自由は取り戻した。許された行動時間は数秒足らず。ここで撤退など無意味である。故に、結局徹頭徹尾、少年の道は前にのみ開かれていた。ならば進もう。今にも潰されそうな光の奔流に抗い、ジャックは大胆不敵に笑った。

……不思議と、恐怖はなかった。嗚呼、やっぱりこうなったか、と内心頷く自分が居た。そう。どこかで、そんな予感はしていた。だから、誰も巻き込みたくはなかった。間もなく幕が上がる。少年の物語が、今始まるうとしている。

良い予感か、悪い予感か、それは今でも分からない。だが――

「――後悔するぜ。逃げ道を消しちまったことをな」

いつも通りの、涼しげで、どこか楽しそうな声。

黒衣の少年は、静かにクリスタルを見据えた。目は、もう何も映していない。それでも、ジャック・ザ・リッパーは、決して屈さぬ不退転の眼差しで前を見据え、呼吸を整え、己が最強の斬撃を以つて、今こそ全てを切り裂かんと両の短刀^{ナイフ}を振るつた。

その結果を確認する間もなく。

今日今宵――この日。この時。この瞬間。

ジャックと呼ばれていた少年の姿は、この世界から忽然と消え去った。

第04話 不思議な結晶（後書き）

これだけ書いておきながら、登場人物が殆ど主人公のみというのも
珍しい（――；）

第05話 はじまりの朝（前書き）

1ヶ月以上、何をやっていたのかといえば。

やっぱり後付けで色々と設定考えてました（「」；）

ちなみに。ある意味反則的な前書きなのですが。

純白の聖装束FF？・召喚士リディアの服の白Verで、露出を
少な目にした感じ。でもちよっぴり、ほのかにエロい。

服の描写って難しい……。

第05話 はじまりの朝

どこかで、そんな予感はしていた。

「紡げ水精、治癒の雫。清冽なる生命の息吹を此処に」
Mnngassao Moijvusoxki SaolamvhaonaoYbkoq kukuvvo

修道院の一室。医務室と呼ばれる小さな部屋に、少女の澄みやかな詠唱が響き渡る。

常時清潔に保たれた白の寝台。そこに、一人の青年冒険者が力なく横たわっていた。息は激しく荒れており、表情は苦痛一色だ。無理もない。彼は、思わず目を背けたくなるほどに酷い火傷を上半身に負っていた。無残で過酷な、敗北の味である。

己の無様を取り繕う余裕など欠片もない、見るに忍びない青年の姿。

それを、少女——コレット＝ソリトウス＝エリティアは、一瞬たりとも怯むことなく、真剣な表情で見据えていた。柔らかく包み

込むような神々しい光の生氣に満ち溢れ、純白の聖装束を自然に着こなす彼女の容姿は、率直に云って「朝」そのもの。

背中まで真っ直ぐに伸ばされた、さらさらの蒼銀髪。理性的で年不相応に落ち着き払ったサファイアの瞳。健康的な肌理きめ細かい肌は、ミルクを溶かし込んだかのように白い。どこかあどけない可憐な顔立ちは、人間離れの領域にある美しさ。

やや小柄で華奢な身体付きではあるが、それは無駄な贅肉が無いことの証明でもあった。長年に渡る修練によって引き締まった身体は、されど女性としての發育を忘れることなく、出る処は出て、引込む処は引込んで、まさに理想的な「少女」だった。献身的で、清楚な心も合わせれば、彼女を白い少女と呼ぶ事に違和感の入り込む余地はない。

「癒水」
J S O

呪文詠唱が終わり、治癒魔法が発動。

途端、青年の全身が蒼銀の癒水に覆われる。それは火傷だけに止まらず、全身に刻まれた無数の傷を余すことなく完治して、やがて溶け込むように消えてゆく。既に、跡形もない。火傷は無論、切り傷も、擦り傷も、打撲も捻挫も何もかもが癒えていた。

徐々に徐々に。苦痛だけに彩られていた青年の顔色が、安堵へと掘り替わる。

「――」

少女は、その様子を油断なく観察していた。

表情こそ怪我人を安心させる慈愛の微笑だが、その内心は騎士同士の真剣勝負にも劣らぬ気高い気迫で満たされていた。他者の命を預かり、その重圧に真正面から挑む朝色の少女。それを、青年はぐったりと仰臥したまま、ぼんやりと見詰めていた。

やがて、傷の治癒が成功した事を確認した蒼銀髪の少女は、ほつと安堵の息を吐く。

「もう大丈夫です。今日一日ゆっくり休めば、明日には体力も回復しますよ」

柔らかな微笑みを向けられ、青年は顔を赤くする。

此処フェガリ王国に止まらず、他国にもその名を知られた有名な治療師^{ヒーラー}。それも、絶世の美少女を前にすれば自然な反応だ。まだまだ女性に免疫のない初な青年ともなれば、尚更。だからこそ、先程までの醜態が、そして上半身だけとはいえ裸体でいることが、たまらなく彼の若い羞恥心を刺激する。

「あ、えと、ありがとうございます。その、助かりました、聖女様」

あたふたと身を起こして畏まる青年の姿に、少女は——聖女コレットは巧笑した。

「どういたしまして。でも、次からは気を付けてくださいね。次があるだけ、貴方はとても恵まれているのですから」

被害を未然に防ぐことも、彼女の役目。

それ故、コレットは精悍な治癒師^{ヒーラー}の顔で青年に注意を促した。上品な物腰は、育ってきた環境の良さを。隙無き仕草は、背負ってきた苦勞の深さを物語る。

「は、はいつ。いやもうホント、身に染みみましたので」

「そうみたいですな」

くすくすと、可笑しそうにコレットは笑った。

羞恥の所為か、あちこちを彷徨う青年の視線。それが時折、豊満で形も良い少女の美乳にチラチラと向けられるが、男性なら仕方のない事だと、いつものように聖女は割り切った。幸か不幸か、感情を隠すことには慣れている。

ふと。青年の仲間から、前以って彼の着替えを預かっていた事を思い出したコレットは、後方に控えている一人の神官侍女に、緩やかな動きで半身だけ振り返る。彼女は、コレット専属の世話役であり護衛役であり、半ば家族のような存在でもある。

ともすれば、本物の家族より。

「――。シャロン、彼の着替えをお願い」

僅かな硬直は、一瞬、自分で取りに行こうとした所為だった。

「かしこまりました」

先程のコレットとは違う種類の安堵を抱き、修道女は一礼する。

肩までサラリと伸びた、やや明るめの緑髪と、温かな琥珀色の瞳。この修道院で一、二を争う巨乳と、それを一生懸命に覆い隠す、紫の修道服と白のケープ。その洗練された優美な動作は、彼女の峻厳な姉による、悪夢じみた訓練の成果だった。

余談だが。シャロンの安堵は何かと問われれば、仕事が出来るという一点に集約される。

「あ、それって俺の服——」

「はい。お連れの方よりお預かりしております」

いつも通りの光景。

いつも通りの日常。

はじまりの朝は、いつも通りに幕を開けた。

早朝に担ぎ込まれてきた、多数の急患達。

その悉くを完治させ、丁寧に見送りまで済ませた後。コレットはシャロンを伴い、清美な廊下を歩いていった。修道女達が普段から綺麗に清掃している為、外観は勿論、内部も美しく保たれている。そも、この修道院は教会——即ち集会場も兼ねているので、居心地の良い景観は寧ろ大前提だった。人は、見た目でモノを判断する生き物である。

「――」

コツコツと、軽い靴音と共に歩きながら、蒼眼の聖女は現状に関して思案していた。

涼やかな微風に蒼銀の髪と純白の衣をふわりと靡かせ、向かう行き先は通い慣れた一室。幼馴染であり、聖騎士であり、そしてやはり家族とも云える少女、白夜^{はくや}捺菜^{なすな}の部屋である。聖騎士、などという大層な肩書きとは裏腹に、清々しいほど自由奔放な為人をしているが、剣の腕は超一流。彼女が居てくれないければ、魔物の被害は更に拡大していたに違いない。

頼りになる黒髪の剣士の顔を思い描きながらも、しかし彼女の表情は優れない。

「聖女様、どうかなさいましたか？」

浮かない顔をしているコレットに、シャロンは柔らかな口調で問い掛けた。

「え……？ あ、ごめんなさい」

聖女は、暗い顔をしてはならない。

コレットは、いつもの微笑^{かめん}を急いで顔に張り付けた。シャロンも、それを止めはしない。此処は廊下だ。信徒の目。平民の目。貴族の目。端的に云ってしまえば、世間の目が在る。だからこそ、それとなく注意を促したのだ。聖女に積み重なる疲労を知らながらも、侍女に他の選択肢はない。聖女の士気は、皆の士気に大きく影響することを知るが故。

……当然、コレット本人もソレは十二分に承知している。それにも関わらず、ほんの僅かとはいえ表情に陰を差してしまった。けれども、それを油断や怠慢と責めるのは酷だろう。彼女の消耗具合は、闘技場で辛くも最後まで勝ち抜いて、息も絶え絶えの戦士に等しい。

神妙な顔をして後方を歩くシャロンに振り返り、コレットは穏やかに微笑んだ。

「大丈夫。ここ最近、魔物の被害が増え過ぎている事とか、治癒に必要な寄付金の事とか、その辺りについて、ちよつといろいろ考え事をしていただけ。だから、心配しないで」

「——はい、かしこまりました」

複雑な思いを抱えた聖女に、これ以上気を遣わせまいとシャロンは頷いた。

……当然と云えば当然の話だが、修道院のみならず、公共機関の魔法措置は有料である。無料では経済が回転しない。然れども、もつと安値にしたいというのが聖女の本音だった。今回得た寄付金だけに絞っても、相当な値となっている。

それは同時に、修道会の運営に必要な額でもあった。魔物を討ち払い、人々を支え癒す。その為には、とにかく金が必要となるのだ。修道院側とて、なにも意地汚く高額の治療費を請求しているわけではない。更に付け加えておくと、常日頃から法外な寄付金を巻き上げているワケでもない。少なくとも、聖女が所属する、このノードウス修道院は。

——詰まる処、率直に云ってしまえば。

現在、王都セリノスは、非常時と確言しても差し支えない状況下に置かれていた。

「それにしても、寄付金ですか。また、頭と耳の痛い話が出て来ちゃいましたね」

微妙な空気を一掃する為、神官侍女は明るく笑いながら、主の言葉を持ち上げた。

「ふふ、そうね。もちろん、修道院も無駄に浪費しているワケではないけれど」
わたしたち

「はい。武具防具の新調や修繕、管理。より効果的で効率的な魔法の研究や実験……等々。必要な経費を一旦挙げ始めればキリがないくらいです」

誇張でも弁護でもなく、それ等が確かに必要である事は言を俟たない。

「そうよね……。お金は、大事なもの」

寄付金が必要不可欠であることは、聖女も否定出来ない。

そして。それはつまり、街中で負傷者を見付けたとしても、迂闊な行動が出来ないことを意味していた。一人治せば、後はもう雪崩を打つかの如く。そこで治癒を断つてしまえば、民の不満に「負傷者を放置した聖女」という実に分かり易い「餌」を与えてしまう。人は、特に追い詰められた者は、心地良く叩ける存在が好物である。

無論、生命に関わる場合は話も変わってくるが、多額の寄付金を支払えない負傷者達は、お話にならないほど数多い。安定的、或いは定期的な収入を得ている冒険者や商人達でさえおいそれと出せる額ではない。回復薬や魔法符等で、なんとか誤魔化しているのが実情だ。それも、長くは保つまい。いつの世も、どこの世も、物資の不足は為政者を悩ませる。

だからこそ。

聖女は自ら率先して、この苦境を打破する為に準備を進めていた。

「話を戻すけど」

前を見据えながら、コレットは落ち着いた声で話す。

「このまま放っておけば、被害者は更に増え続ける。それはもう、

間違いない」

「ここまで急激に増え続けているということは、やはり何か原因があるのでしょうか？」

「私にもわからない。だから、ナズナと調べに行こうと思うの」

「え——あの、聖女様？　もしかして、今からですか？」

思わず素の口調で問い掛けてしまったシャロンに、コレットは満面の笑みを向けた。

「はい、今から」

「じゅ、重傷者の方は？　まさか、仕事ほっぽり出す気ですか？」

「それなら平気。使い捨てだけど、治癒の魔法符を沢山沢山、もうこれでもかこれでもか、てやつ、てやつ、ってくらいに、たっくさん用意しておいたから。」

たとえば、後五秒で……って人が大勢担ぎ込まれてきても、あれなら大丈夫。聖騎士様にもお墨付きをもらった自信作です」

「………………。一応、義務なので申し上げますけど」

家族の顔となって発する声には、親愛と諦観の念が込められていた。

「少し、お休みになってはいかがでしょうか。」

ただでさえ、ここ最近はずっと治癒魔法を使いつぱなしでしたし。この上、魔物の調査に赴くのは非常に危険です。何より何より何より何より、それを知った時の姉が恐いです」

ぴきり、と聖女は笑みを引き攣らせた。

「で、でもその、私が担当していたのは重傷者の方とか、他は解毒や解呪だけだったから。比較的軽傷の方や、ご病気の患者さん方は、お医者様が進んで引き受けてくださいました。くださいました。くださったのです。本当です」

「ええ、まあ——わたしも、心情的には味方をして差し上げたいところなんですけど」

同じ台詞を、彼女の前で言えるのかといえば、答えは断じて否である。

「無理、かな？」

「自爆魔法を遅延させた状態で、魔物の群れに単騎で特攻するようなものです」

要するに、自殺行為である。

「そうよね、やっぱり……………」

頭の中で理論武装を進めつつ、コレットは確認するように言葉を紡ぐ。

「——ねえ、シャロン。私もしかして、すごく疲れているよう

に見える?」

「いいえ、まったく。聖女様は、そういうところばかり隠すのがお上手ですから」

「あはは……苦勞を掛けます。ええ、ホントはとても疲れてる。身体、ちょっと重たいな。でも、今回の件は早く調査しておかないと、もっと酷いことになりそうな気がするの」

コレット「ソリトウス」エリティアは聡明な少女である。

故に。仕事仕事で、自身の体調管理を怠る未熟な領域なぞ、疾うの昔に乗り越えていた。しかし、それを押してでも。自分の体調を犠牲にしても、速やかに事態を解決しなければならない。それが、自分達の置かれている現状だと聖女は考える。

さもないければ。負傷者だけではなく、死者の数が爆発的な勢いで増すだろう、とも。

「……聖女様の膨大な魔力は、しかし無限ではございません」

どうか無理だけは、と続ける従者に、コレットは再び笑顔で振り返る。

「もちろん。その辺りも含めて、ナズナと相談してみるね。」

誰かが怪我をして、それを治して、また魔物に襲われて、怪我をする。そんな悪循環は、なんとしても断ち切らないと」

金銭的な意味でも、と口に出すのは流石に憚られた。

「神聖オラノス教団としては、寄付金が減ってしまうのは悩ましいことですけどね」

肩を竦めるシャロンだが、裏を返せば、個人としては喜ばしいことである。

「そうね……でも、そこはほら、私達が魔物退治を頑張る方向で」

澄んだ瞳を真っ直ぐに前へ向けながら、聖女は力強く言い切った。

根本的な打開策は未だない。が、人々に仇成す凶悪な魔物さえ退ければ、ただそれだけで負傷者は激減するだろう。武器や防具、そして人員に余裕が出来れば、遠慮なく胸を張って寄付金を安くすることも可能となる。

元より。個人としても、聖女としても、怪我人など出ないに越したことはない。

「はあ……。ご存知でしょうけど、今でも時折お小言を頂くんですよ？ 聖女様の身に、万が一の事があつたらどうするんだーって」

「うう……。それはホントにごめんなさい。でも、せめて魔物の被害が落ち着くまでは、私の我儘に付き合っ。必ず原因を突き止めて、解決してみせるから」

「はい、仰せのままに」

リンゴーン、と。

風の刻を知らせる為、今日も教会の鐘が鳴る。聖女コレットは一度だけ視線を鐘に向け、それから心持ち足を速めた。神官侍女シャロンは、そんな主の背中をジッと見詰めていた。自身の心に過ぎる不安が、気の所為であることを願いながら。

第05話 はじまりの朝（後書き）

一度やってみたい事が出来たので、ヒロイン視点を追加致しました。用語の解説もしないままズンズン進んでますけど、話の進行と共に其方も行ないますので、今はとりあえず世界観の片鱗だけでも掴んでいただけたらな、と。

第06話 和の巫女剣士（前書き）

Web拍手ありがとうございます（――）
いただいた「エサ」は大変美味しく頂きました（ステーキウマー）
稚拙な物語ではございますが、これからもお付き合いいただければ幸いです。

第06話 和の巫女剣士

——少女は、退屈そうに頁ページを捲めくった。

本項では、修道会の起源や役割について触れていく。

はじまりは、神聖オラノス教の熱心な教信者達が、世俗を離れて、砂漠等で静かな生活を送り始めたこと……という説が一般的である。これを隠修士いんしゅうし、或いは隠遁者いんとんしゃと呼ぶ。孤独を愛好する隠修士いんしゅうし達は、それぞれがオラノスの心に合う生活を求めて始動した。

ところで。公にされた例は殆ど見ないが、誰にも行き先を告げずに姿を晦くもます隠修士いんしゅうしも、べつに珍しい存在ではない。当然、理由は在る。隠修士いんしゅうしとなる事を望む者は、非常に優秀な魔法師ウィザード（この場合、ヒーラーヒールアルケミスト）である場合が極めて多かったのだ。

行方不明者として取り扱い、大々的な搜索を提案する声も、全く無かったワケではない。しかし、強い権力フライドを持つ者ほど、それは躊躇ウイザードわれた。優秀な魔法師に愛想を尽かされたと、自ら大声で喧伝する。これを恥と云わずして他に何を恥じればいいのか。当時の権力者達にとって、それは最低の——城下町を裸体で踊り回るほどの致命的な醜態とされた。

——少女は、退屈そうに頁ページを捲めくった。

無論のこと、水面下では壮絶な暗闘が繰り広げられた。

その類稀な「力」を付け狙う者達は、笑えないほど枚挙に暇が無い。国家、宗教、傭兵、盗賊等。あらゆる組織にとって、隠修士達の蒸発は到底放置出来る話ではなかった。必然、酷烈な逃亡生活に嫌気が爆発した隠修士達は、集い、纏まり、守り合い、互いに協力関係を結んだ。それこそが、今日こんにちでいう処の修道士、或いは修道女と呼ばれる者達の原型である。

……やがて、時は流れ。

水面下の凄惨な争いなど知る由もなく、一般の敬虔な信徒達もまた、隠修士いんしゅうしと大同小異の活動を開始する。人々を教え導く。魔物を薙ぎ払う。貧困を救い、孤児を守る。それぞれの様々な目的を成すべく、信徒達は修道会という名の集団を作り、修道誓願しゅうどうせいがんを立て、かつての隠修士達いんしゅうしと同様に共同生活を送り始めた。

その為に建設された建物を、修道院という。

——少女は、退屈そうに頁ページを捲めくった。

修道院は、瞬く間に世界各地で建造されていった。

さて。重複するが、修道者達の目的は多種多様に渡る。祈祷や労

働に奮励することを目的とした観想修道会。人々……特に小さな子供の教育を目的とした教育修道会。神聖オラノス教団の為に戦うことを目的とした騎士修道会（現在でいう結晶騎士団に該当する）。他にも医療機関や宿泊施設を運営する会、といった具合に、一旦例を挙げ始めれば際限がない。

勿論、各修道会に共通する活動内容も数多く存在する。例えば、専門技術書の作成などがソレに当て嵌まる。原則、修道院で暮らす修道者達は、互いに役割を分担して、自給自足の生活を送っている。当然、それ等の経験及び知識は、日々確実に蓄積されていく。

貴重な、万金にも勝る数々の技術。それ等を捨て去る理由など、恐らくは世界を引つ繰り返しても見付かるまい。加えて、修道者達の殆どは読み書きが得意である。複雑な魔法陣を描く事も多々ある彼等彼女等にとって、情報の記録など容易い事だった。

……少女は、欠伸を堪えながら、それでも頁を捲つた。

様々な修道会による、様々な分野に関する、様々な専門技術書。

醸造。工業。農業。教育。外交。武術。魔法。修道者が、延いては神聖オラノス教団が、それ等の飛躍的進歩に貢献した役割は絶大である。こうして……世界を守り、世界を救う、神聖オラノス教団は、徐々に、確実に、その存在感と影響力を増していった。

——閑話休題。このまま教団について深く掘り下げていくと、脱線が著しい。

今や、世界各地に存在する多彩な修道会。断っておくと、各修道会は互いに対立しているワケではない。全ての修道会は、オラノス教義に従って活動する。あくまで、目指すものがそれぞれ異なるだけだ。修道者として、オラノス信徒である事に変わりはない。

よって、先に挙げたような修道会の区分は、実質的には無意味と云ってもいい。

教育修道会が剣を執って盗賊や魔物と戦うこともあれば、逆に騎士修道会が教鞭を振るうこともある。幾つかの修道会が共同で動くことも日常茶飯事だ。このような実情故、明確な区別に然して意味はない。中には、複数の目的を持つ大規模な修道会すら在るのだから。

そう、たとえば。

云わずと知れたノードウス修道院の修道者達は、その典型的な例であろう。

カマル大陸、フェガリ王国の王都セリノス。

そこを拠点として活動する、あまりにも有名な多目的修道院。

神聖オラノス教団において、教皇と唯一並び称される、代々の聖

女――

「——おや？ 思っていたよりも早いですね」

いつもの気配を察知して、はくや なすな白夜捺菜は退屈そうに読んでいた書物をパタンと閉じた。

そこに、未練など微塵もない。聖女を待つ間、退屈凌ぎで「幼少の頃より鳥籠又は箱庭で育ち、外の世界というモノを全く知らぬが故に、窓際で陽の光を浴びつつ唯一の娯楽である読書に没頭する深窓の令嬢ごっこ」に興じていたのだが、全く以って面白くなかった。

過日。あちこち飛び回ってばかりいないで、長閑な退屈を楽しむことも覚えると言われ、実際に試してみたのだが……これは合わない。自分には合わない。寧ろ合ってたまるかと抵抗するように、捺菜は椅子から勢い良く立ち上がり、大きく背伸びをした。

次いで。背中まで伸ばされた、艶やかで美しい黒髪を両の手に纏め、暫しの黙考を経て、今日はポニーテールで過ごすことに決める。ちなみに昨日はストレートで、一昨日はツインテールだった。特に法則性はない。強いて云えば、捺菜の気分次第である。どれもこれも、とてもよく似合っている辺り、彼女という素材が如何に端麗であるかが容易に窺えた。

扇形の髪留めヘアゴムで、手早く髪型を整える。巫女服、又は巫女装束と呼称される、純白の衣や緋色の袴とも相俟って、優艶な黒髪が鮮やかに映えていた。侍女シャロンに勝るとも劣らぬ巨乳は、相も変わらず此处から出せとばかりに白い衣を押し上げ、自己主張に余念がない。周囲の強い勧奨により最近付け始めた下着も、ようやく肌

馴染んできた処だった。

——来ましたか。

アンバー
紅茶色の瞳をドアに向けると同時に、コンコンとノックが鳴る。

いつも通りのノック音。それひとつだけを取っても、それぞれ独自の特徴が出る。それを証明するかのように、続いて聞こえてきたのは、擦菜がよく知る、耳に心地の良い鈴が鳴るような声だった。

「ナズナ、居る？」

「はい、居ますよコレット。鍵は開いていますから、シャロンもどうぞ」

木製のドアを開け、純白の聖装束を身に纏う蒼銀髪の聖女が、侍女と共に入室する。

主の後方に控え、気配を殺していた筈の神官侍女。それを事も無げに感知していた黒髪の少女に対して、しかしコレットもシャロンも特に驚いた様子などは見受けられない。彼女の力量からすれば、当然の事だと知っているからだ。

ふと。早速用件を切り出そうとした聖女の視線が、壁に立て掛けられている一振りの刀へ向けられる。ただそれだけで、自分のやろうとしている事など幼馴染の少女は疾うに察していたのだと知れた。だからこそ、こうして準備万端の状態で待ってくれていたのだ。

感謝と、若干の気恥ずかしさを感じつつ、朝色の少女はバツが悪そうに小さく笑う。

「もしかして、お見通し？」

「まあ、コレットが私^{わたし}のことを見通している程度には。確信したのは、何やら突然せつせと治癒の魔法符を作り始めた時ですが」

仕方ないなあ、と黒髪の巫女剣士は肩を竦めた。

むーむー、と唸る聖女を余所に。白夜捺菜は紅茶色^{アンバー}の瞳を悪戯っぽく輝かせ、愛嬌満載の笑みを浮かべながら、己が愛刀を手にとった。柄は新雪のような白。鞘は若葉のような翠^{みどり}。折れず、曲がらず、よく斬れる。実用特化であるが故の機能美を宿す刀身は、見る者全てを虜にして止まないほど魅力的だ。

——その刀銘を、風切^{かざきり}という。

太刀から伝わる靈驗^{れいけん}灼^あな凄^{あらた}み。白夜捺菜の反則的な実力と併せて考えれば、ただ見栄えがいいだけの、お飾りの太刀でない事は誰の目にも明らかだった。事実として、この刀は柄や鞘も含め、特殊な金属と製法で作られた有り難い霊刀である。更に付け加えれば、白夜家に代々受け継がれてきた宝刀でもあった。

左腰に、刃が下になるよう太刀を差す。

その流れるような一連の動作は、まるで神聖不可侵の儀式を見ているようだった。聖女が最も頼りにする巫女剣士の立ち姿は、ただただ凜々しく、どこまでも自然で、聖騎士の名に相応しい自信と余裕に満ち溢れていた。

聖女コレットは、当然のように深く頭を下げる。

「それではナズナ、今回もお願いします」

「はい、承知です。遠慮なく頼ってください。……私^{わたし}としても、これ以上コレットばかりに重荷を背負わせるのは、性に合わない以上に自分を許せそうもないので」

白夜捺菜は自由奔放な性格をしているが、決して傍若無人では有り得ない。

現在、王都セリノスは、ピリピリとした不穏な空気に包まれている。負傷者は増え続ける一方で、物資の不足も甚だしい限り。無論、担ぎ込まれた患者達は意地でも治癒している。腕を喰われ足を潰され、内臓を千切られていようと、死んでさえいなければ完治させた。だが、減らない。毎日毎日、何度も何度も、ひたすらひたすら、聖女コレットは、半死人を癒し尽くして生者に変えてみせた。

それでも、減らない。夢にまで見るほど、呻き声が無くなってくれない。少女の負担は、体力的にも精神的にも甚大だった。聖女としての矜持を以って、どうにかこうにか治癒師^{ヒーラー}の責務を果たしているに過ぎない。彼女の、一途で健気な責任感の成せる業だった。

それでも。聖女は、皆の為に笑っている。自分は元気。自分は平気。だから大丈夫だと、いつでも笑みを絶やさない。だが……それが虚勢だと分かる者にとっては、コレットという少女を深く知る者にとっては、逆に痛ましく映っていた。

そう。現状をなんとかしなければと思っていたのは、なにも聖女だけではないのだ。

「――」

見破られているからといって、聖女は空元気を放棄するワケにも
いかない。

彼女には責任がある。彼女には役目がある。彼女には使命がある。
それ故に何も言えず、更に、捺菜やシャロンが本気で自分を心配し
てくれていることが在り在りと伝わり、結果、とてつもなく申し訳
なさそうな顔となった朝色の少女に、黒髪の少女は優しく微笑んだ。

「ほら、そんな落ち込まなくても大丈夫ですから」

足下に置いておいた大きな道具袋を片手で持ち上げ、白夜捺菜は
自然に笑う。

「私個人^{わたし}としても、一応の聖騎士としても、街の、国の皆が一樣に
暗い顔をしているのは、あまり面白くありません。これは、貴女だ
けの問題ではないのです」

真剣そのものの眼光を受け、コレットは深く頷いた。

「ところで聖女様^{プリンセス}。陛下を始め、国も表裏それぞれ動いてくれてい
る筈ですよね？」

懐かしい呼名と、分かり易い話題転換を、白い少女は有り難く頂
戴する。

「ええ、それはもちろん。でも、相変わらず人手不足が深刻みたい」

「……いくら危ないからって、国の門を閉じるワケにもいかない、
ってところですか」

それでは外交も何も有ったものではない。

ちなみにコレットが王国の内部事情に多少なりとも通じているのは、第一王女シェリス「ドラグーン」フェガリと頻繁に情報交換を行なっているからである。逆に云えば、王女側も修道院の内部事情に些少なりとも通じている事になるが、それはまた別の余談。

当然の話だが——願わくば、未来永劫当然であって欲しい話だが、王国とて、これまで遊んでいたワケではない。寧ろ、寝る間も惜しんで事態と向き合っている。しかしながら、先の内乱で生まれ変わったばかりの国に、豊富な人材や迅速な対処など望むべくもない。

一難去って、また一難。

国の存亡を賭けた反逆だったとはいえ、なんとも皮肉な状況である。

「そつえば、コレットの荷物は何処ですか？」

「あ、実はまだ私の部屋に置いたままなの。先にナズナから同意を貰おうと思って」

「なるほど」

コレットの律儀な性格を知っている捺菜は、納得とばかりに頷いた。

「ではでは、すぐに取ってくるから——」

「いえあの、お待ちください聖女様。先日、姉に注意された事をお忘れですか？」

それまで黙って彼女達の話聴いていたシャロンが、若干の焦りと共に口を挟む。

「う……」

動揺を顔に出さないよう努めながら、コレットは先日の光景を回想する。

とある一人の神官侍女に、要約すると「貴女は聖女なのですから、それくらい私達侍女に命令してください……」というか命令しろ。これは命令だ」という、一体どちらが主なのか、よく分からなくなるような説教を受けた、摩訶不思議な記憶。

一応。自分で出来ることは、出来るだけ自分でやりたいのです、というささやかな主張を準備してはいたのだが、侍女達にも立場があるのだと言われてしまえば、コレットに反論の術など皆無であった。土台、自分の為に、わざわざ時間を割いてまで説いてくれる彼女を、無碍になど出来る筈はなかったのだ。

……うん、決して。そう、決して。A級ドラゴンでさえ思わず畏まって道を譲りそうな、あの極悪キレイな微笑みに屈したワケでは、決してないのです、ええもう断じて………たぶん、きつと、おそらくは（後日・匿名希望の聖女談）

とはいうものの、他の侍女達からも、再三に渡り口を酸っぱくして注意されていたという耳の痛い事実も加わり、なんでも自分でや

りたがる困った聖女様は、ようやく渋々と自重を決意したのであった。身の回りの世話をする為の侍女達としては、微笑ましくはあるものの流石に溜息を禁じ得ないエピソードである。

いそいそとコレットの部屋に向かう神官^{シャロン}侍女の姿を見詰めつつ、聖衣の少女は蒼色^{サファイア}の瞳をジト目にして、ほんのちよっぴり心の中で拗ねてみたが、とても嬉しそうに仕事に励む様を見せられれば、そんな気持ちも大して長生きはしなかった。

第06話 和の巫女剣士（後書き）

活動報告をやった方がよろしいかしら、と思いつつ実際は白紙状態
（^ - ^ ;）

気が向いたら、気が向いたら（大事なことなのでry）そのうち執筆話でも書こうかな、と思います。

第07話 武闘の冒険姫（前書き）

手術を受けたり、仕事が忙しかったり、世界を救ったり（！）
10月は、なかなか多忙な月でした。

今回も、登場人物の紹介回みたいなモノでございます。
イメージ的には、下記のような感じで。

ワンピースレオタード〓テ。ルズオブ。ーツのコ。クの衣装
蒼い宝玉付きの聖杖〓テイ。ズオブヴェ。ペリアのB。ロッド

第07話 武闘の冒険姫

王都の巨大な門を潜り、少女冒険者・アクラッドウクニウムは一息吐いた。

掃いて——もとい、吐いて捨てるほどの憂いを孕んだ溜息が、朝の青空に消えていく。直後、心持ち慰めるような微風が、肩口まで伸びた桃色の短髪をサラサラと優しく揺らす。雲一つ過ぎらぬ快晴の下、アクラは通行の邪魔にならないよう道の端に寄った。

強気で勝気な眼光を放つアメジストの瞳が、人々の往来を静かに眺めている。皆が皆……というワケでもないが、住民達の顔には、どこことなく陰が差していた。性質の悪い風邪でも流行っているのか否である。少女は、今し方潜った大きな門に視線を向けた。

——門の外。そこは、魔物が跋扈する世界。

故に、都市の外へ出掛ける者達は、その殆どが武装していた。当然だ。素人が徒手空拳で出来る事など、高が知れているのだから。護衛を雇うか、然もなくば、自ら武器を手取る以外に術はない。ふと、少女は己の身体を見下ろした。両手には真紅のドラゴングローブ。両足には白銀のミスリルシューズ。

何を隠そう。彼女こそは、その高が知れている筈の肉体を武器と

ファイター
する武闘士である。

一見細身の身体は、然れど、いざとなれば岩石をも蹴り碎く。透き通るような白い肌には染み一つなく、健康的な若い色気は無自覚に醸し出している。弛まぬ鍛錬を経て行き着いた地平に追い着ける者は、非常に非常に数少なく、王国や教団を始め、彼女は様々な組織から何度もスカウトを受けていた。全て、鰐^{にへ}膠も無く断っているが。

服装は、白を基調とした長袖のワンピースレオタード。少女のスレンダーな身体と豊かな美乳をピッタリと包み込んでおり、加えてふとももから下は完全に肌が露出している為、先程から、門番兵達は強大な精神力を要求されていた。主に、美少女の張りのある瑞々しい肢体（特に生脚）から、断腸の思いで目を逸らすべく。

そんな彼等の涙ぐましい自制に内心はにかみつ、それでも動き易いという理由で、毎度同様の服を着てしまう、ある意味で罪作りの少女は、殆ど中身の無くなった道具袋を片手に元氣良く歩き始めた。向かう方角は中央広場。目的地は冒険者ギルド。

都市には必ず広場が存在する。時には市場、時には布告場、そして時には処刑場となる、極めて重要な場所なのだ。特に中央広場は、都市で最も開けた場所である為、その周辺には街の代表的な建物が自然と集い、賑わう事となる。それは、ギルドとて例外ではない。

テクテクと。所々、内乱の爪痕が刻まれた石畳を歩いていたアクラだったが――

「あ、おはようございますアクラちゃん。お仕事帰りですか？」

見知った聖女に親しげな声を掛けられ、思わずコケた。

頭痛を堪えて振り向いた先には、案の定コレット「ソリトウス」エリティアと白夜捺菜が立っている。片や、蒼い宝玉付きの聖杖を背負っており、片や、風を操るという霊刀を腰に帯びていた。二人は、アクラと対等に渡り合える数少ない強者^{とも}である。

外出時、即ち危険に身を晒している聖女の護衛が、捺菜一人だけというのも頷ける話だ。下手な護衛を付けて無駄に人数を増やしても、却って二人の足を引っ張ってしまう。それをよく知っているからこそ、この場にシャロンの姿は無い。

聖女と巫女。その澄んだ瞳には静かな戦意が宿っていた。増え続ける魔物の被害に対し、遂に堪忍袋の緒が切れたらしい、と少女は即座に理解と納得を済ませる。だが、果てしなく目立っている純白の聖装束と紅白の巫女服には、最早何も言う気が起きなかった。元より、アクラも人の事は言えない。流石に、その程度の自覚は持っていた。

——それはそれとして。

まさに文字通り、三者三様。独特な格好の美少女達に集う視線という視線を綺麗サッパリ無視して、紫眼の冒険者は溜息混じりに、いつものツツコミを入れておくことにした。

「あのねえ聖女さん。お願いだから、ちゃんは止めて。ちゃんは」

「やっぱり駄目ですか？ 私は可愛らしくって好きなんですけど」

「うん、いいから。可愛くなくっていいから」

「残念です……」

しょんぼりするコレットは、言葉通り心底残念そうだった。

「あつ、そうだ。アクラちゃんが、聖女さんって呼ぶのを止めてくれたら、私も考えます」

しかし、コレットは転んでもタダでは起きない聖女だった。

「そ、そうきたか……くつ、相変わらず妙な処で頭が回るわね、この聖女」

「まあまあアクラ嬢、気にしたら負けですよ。なんと言っても、コレットですから」

「……ねえ巫女さん。出来ればアクラ嬢も止めて欲しいって言ったの、覚えてる？」

「あれま、そうでしたっけ？　なんでしたら、私もアクラちゃん——
——」

「是非アクラ嬢をお願いします。……そっちの方がまだマシだわ」

内心で盛大に頭を抱えたアクラは、話題転換による戦術的撤退を試みる。

「えーと、とりあえず、お察しの通り妾は仕事帰りよ。^{わたし}

知ってると思うけど、最近魔物が多いの強い何のって。不謹慎にも、仕事の依頼に全く困らない現状を喜ぶべきか嘆くべきか、ちよつと本気で分かんないくらい」

「あまり無理をしないでくださいね。働き過ぎて体調を崩しては、元も子もありません」

「.....」

その時。捺菜とアクラの心は、一瞬にして一つになった。

未だに過労死を迎えていないのが不思議なほど働き尽くめの少女が、他者の労働を戒めるといふ珍妙極まりない様は、コレットでなければ嫌味に聞こえる按配である。したがって、捺菜とアクラの視線に「おまえが言うな」的な意思が込められたのは必然だった。

突然黙り込んだ少女達の姿に、コレットはきょとんとした目で小首を傾げる。

「？ あの、どうかなさいましたか？」

「いいえ、どうもしないわ」

呆れた表情を隠そうともせず、アクラはアメジストの瞳をジト目にしたまま答えた。

「そういえば、二人はいよいよ魔物の調査つてどこかしら？」

「ええ。まだ始めたばかりですけど」

都市を漂う昏い思念が丸々乗り移ったかのような憂心を押し隠して、聖女は頷いた。

「そうなんだ。この方角に向かつてるってことは、まずは冒険者ギルドに行くの？」

「はい。出来得れば退治もしておきたいので、危険な魔物の情報を集めに」

互いに同じ目的地と知った途端、少女達は誰ともなく歩き出す。

聖女コレットと、巫女捺菜は、冒険者としてギルドに登録されている。自身の立場を利用されない為の実力を得る為、民や信徒達の実情に直接触れて世間に慣れる為、修道院に住む孤児達を養育教育する為、等々。

最早、両の手では数え切れないほどの理由を胸に秘め、コレットは身を粉にして皆の為に尽くしてきた。彼女が形だけの聖女では有り得ないということは、既に周知の事実である。とはいえ。コレットも捺菜も、本業は聖職者。活動には幾つかの制限が設けられていた。

アクラもそうだが、コレット達の活動内容は主に魔物退治である。他にも荷物の配達から要人の警護まで実に幅広く請け負っているが、あまり派手に動き過ぎて、他の冒険者達から仕事を奪うワケにもいかない。其方は人手が足りない時に限られる。

繰り返すが、コレットの戦闘能力は群を抜いて高く、捺菜との組み合わせも抜群に相性が良い。尤も、それ故に任される仕事が増え

続け、より負担も増していくというのは、皮肉もいいところである。常人ならば疾うに倒れている激務振りだった。

才能という一言で片付けられるほど、聖女の努力は断じて浅くない。だが、修道院で日々修練を重ねている修道騎士達よりも、疲れ切った少女一人の方が遥かに強いという現実、殺し合いというモノが如何にシビアであるかを物語っていた。

「——なるほど、ね」

休めと言い聞かせても、素直に休んでくれる娘ではない。

それを知るアクラは、友達として、一刻も早い事件解決を優先することにした。

「じゃあ、妾^{わたし}の知ってる情報^{こつ}も教えておくわね」

「おや、アクラ嬢。何かご存知なのですか？」

「んー、知ってるっていうか、殆ど忠告っていうか」

彼女にしては、珍しく煮え切らない言葉だった。

「構いません、教えてくださいアクラちゃん」

「だから、ちゃんは……まあ今はいいわ。最近、冒険者の被害が多に多いことは、知ってるでしょ？ もちろん、商人とか巡礼者達の被害規模も、割と洒落になってないけど」

「……。はい。なので、まずはその辺りから手を付けてみようと思

っています」

一瞬言い淀んだのは、アクラも冒険者だからだ。

無論、冒険者達は危険を承知の上で活動している。然れども、それを自業自得と放置するワケにはいかない。危険な遺跡の調査。街道を行く商人や旅芸人達の護衛。薬草の採取や鉱物の採掘。そして魔物から得られる、貴重で希少な素材や食材等々。

それ等を提供してくれるのが、他ならぬ冒険者達であることは世界の常識である。故に、冒険者達に多数の被害が出るということは、経済や治安を始めとした国力にも多大な損害が出ることを意味する。聖女コレットが、己自身の体調を無視してでも調査を強行する理由はそこに在る。為政者のみならず、善悪や身分をも問わず、誰もが早急な解決を望んでいた。

だからこそ、アクラはソレを実現可能な人物に、惜しみなく情報を提供する。

「正直、今回の件に関係あるかどうかは、妾にも分かんないけど。」

最近……魔物達が妙に賢くなってる気がするのよね。特にゴブリン。なんか連携が取れているっていうか、統率されているっていうか」

「……………それは、気になる話ですね」

情報咀嚼の為、思考の海へ沈み始めたコレットに代わり、捺菜が会話を進めていく。

「原因は判明しているのですか？」

「ごめん、そこまでは。」

ただ、これは本当に噂なんだけど、冒険者達の間では、突然変異^{ミュータント}体が指揮統率しているのではないかって言われてるわ。目撃情報が無いから、眉唾だって思いたいとこだけど」

瞬間。コレットと捺菜の瞳に、剣呑な輝きが宿った。

突然変異体^{ミュータント}。それは読んで字の如く、既存の魔物が突然に変異してしまった状態を指す。性格は異様に凶暴。性能は異常に強化。時には先天魔法さえ使い熟す真正正銘のバケモノ。その脅威たるや、凄腕の冒険者ですら、余程の事情が無い限り迷わず逃走を選択するほど。戦うにしても、入念な下準備が必要不可欠とされている。

故に。不幸にも戦う力の無い者達が遭遇してしまった時は、せめて楽に死ねますようにと祈る以外、特に出来る事はない。別段、祈ろうが祈るまいが、一瞬で逝けてしまうのだからあまり意味はないのだが。また、仮に殺されなかったとしても、それはそれで悲惨な末路が大口を開けて待っている。どちらにせよ、そこに救いはない。

しかし。突然変異体^{ミュータント}は、低頻度大規模自然災害並に出現確率の低い魔物である。アクラが酷く懐疑的であり、あくまで噂だと強調するのは道理であつたが――

「……噂の段階とはいえ」

想像を超えた厄介な事件になるかもしれないと、コレットは改めて気を引き締める。

彼女は以前、一人の女性冒険者の治癒を依頼された事があった。
ミコリタント
突然変異体に捕らわれていたという話だった。見るも無残。他に云い様がなかった。いつも通りに振る舞っていたか否か、コレットは今でも自信がない。唯一記憶しているのは、捺菜に背中を擦られながら、何かを吐き続ける己の無様だけだった。

他人事ではない、とコレットは強く思った。時として、聖女という聖なる肩書きは、ただそれだけで欲望の対象と成り得ることを彼女は知っていた。いろいろな意味で、コレットは強く成長する必要があったのだ。聖女は、清らかでなければならぬ。

忸怩たる気持ちで、過去を思い返す。

切った張ったの世界に足を踏み入れ、無残な末路を迎えた女性の話など、そう目新しくはない筈だった。だというのに、あの体たらく。如何に自分が世間知らずなのか、その一端を思い知らされた。聖女コレットが、冒険者となった理由の一つである。

顔を上げると、見慣れた大きな看板が視界に入る。

クリスタル
結晶を背景に、二つの大剣が交差した全国共通の絵柄。マーク ある者は名誉を求めて。ある者は巨富きふを求めて。ある者は労働を求めて。ある者は技能を求めて。そして……ある者は冒険を求めて。国家も、宗教も、種族さえ関係なく。いろいろなモノを求める、さまざまな者達が集う場所。発展に寄与して、進歩に貢献する、功労者達の牙城であり出城。

云わずと知れた『冒険者ギルド』と呼ばれる仕事幹旋所は、もう
指呼の間であつた。

第07話 武闘の冒険姫（後書き）

11月は結構時間が取れそうなので、可能な限り早めの更新を目指していきます。

それにしても5000字目安は非常に書き易い……が、早く主人公視点に戻しておきたいところ。すみません、あと1話だけヒロイン視点が続きます。

第08話 冒険者ギルド（前書き）

主人公が現れるまで、ヒロインサイドは結構暗めです。
しかし、そろそろ修羅場の予感。もちろん殺し合い的な意味で。

以下、ギルド職員の制服

男性職員〃Novel・Sol・Linkの中央士官学校予科

男子制服

女性職員〃Navol・Soul・Linkの中央士官学校予科

女子制服

服の、描写は、本気で、難しい……！

第08話 冒険者ギルド

透き通った川に囲まれた広大な敷地。

四方に架けられた幅広い石橋を挟み、直方体の特大建造物が聳え立っていた。階数にして五階建て。周辺区域に威圧感を与えぬよう、外観は酷くシンプルであり、建物周囲には風光明媚な庭園が広がっている。一見石造りだが、実際は違う。この建物は愚直なまでに頑強な合成素材によって造られていた。建設観念は、ベヒモスが乗っても大丈夫。

外部からの攻撃に備えるという目的は勿論だが、寧ろ内部からの攻撃に耐える為である。此処は、仕事の幹旋は無論、魔力判別所や職業訓練所等も兼ねているので、あらゆる攻撃を物ともしない、神懸った耐久性が求められるのは必然であった。

食堂兼居酒屋が併設されているのも、似たような理由である。冒険者と一口に云っても、ピンからキリまで存在するのは当たり前。そして、精神的に未成熟な者が、酒と力に酔った勢いのまま暴れ回った事件など、事例が多過ぎて最早世間話にもならない。率直に云って、修繕費が洒落になっっていなかった。それこそ、ギルドに苦情が殺到する程に。

……こうして、冒険者ギルドは、様々な意味で大きく成らざるを

得なくなつたのである。鍊金術師や建設職人達の、献身という名の悲鳴や怒号を経て、ひとまずは建物を大きくする事に成功したのはいいが、肝心要である冒険者の質については、未だに悩みの種だった。

「——さあ、行きましょう」

内開きの大きなドアを開けて、コレット達は仕事幹旋所ギルドに足を踏み入れる。

広闊な空間に、色取り取りの多忙な光景が繰り広げられていた。半円型の横広い受付には大勢の冒険者達が群がり、それを制服姿のギルド職員達が、鬼気迫る動作で対応している。休憩など要らぬ。一度腰を下ろせば二度と立ち上がれぬわ、とでも云わんばかりだ。

ギルド職員の制服は、基本的に緑色。上着は薄緑で、ズボンやスカート、短めのケープは濃緑。ネクタイは男性が紺色で女性が朱色。襟や袖は白く、それぞれに黄色のラインが二本入っている。見る者によっては、どこか軍を連想させる服装だった。

休憩用の椅子ソファには老若男女を問わず、多彩な依頼人が座っている。人族や獣人族、中には翼人族も居た。各自、番号の書かれた小札を持っており、依頼専用窓口にて、順次手続きを行なっている。脇に置かれた小さな本棚には、魔物図鑑や道具図鑑、修道院発行の絵本等が綺麗に収められており、順番を待つ間の退屈凌ぎに一役買っていた。

雑談相談。説明質問。苦情説得。ワイワイガヤガヤと騒がしい人

々の合間を縫い、聖女は仲間と共に懸賞区域に向かう。守るべき民に仇成す、危険な魔物を確認しておく為である。其処の壁には、所狭しと魔物の絵が貼っており、名前や出現区域は無論のこと、被害規模や懸賞金額、属性や戦闘法といった特徴、更に遭遇時の注意事項まで細かく記されていた。

「――」

突然変異体は居ないようだが、平時よりも明らかに枚数が多い。
ミュータント

それはつまり、それだけ多くの被害が発生したという事に他ならない。表情には出さず、密かに心を痛める聖女の後姿に、幾つもの視線が集まっていた。容姿、服装、実力、立場。どれを取っても、目立たぬ理由が無い。

とはいえ、聖女と聖騎士が冒険者として登録されている事は周知の事実であり、頻度こそ低いが、時折こうして足を運んでもいるので、然して珍しい光景というワケでもなかった。普段との相違点は、都市の状況。王都を余すことなく覆い尽くす暗雲の存在である。

この苦境を打破してくれという期待や懇願。逆に何故この苦境を放置しているのかという愚痴や不満。聖なる者に対する敬意も在れば、逆に聖なる者に対する邪欲も在った。本当にピンからキリまで。人手不足の深刻化により、冒険者の採用基準が低下した弊害である。

聖女コレットは、少なくとも表面上は毅然とした態度を貫き、彼女を守る聖騎士捺菜は、自らの身を以ってマイナスの視線を遮断して、友人のアクラは、マイナスの人物を一睨みで追い払う。随分と久し振りの『儀式』を執り行ない、少女達三人は『懸賞付き』と呼ばれる凶悪な魔物の情報収集に、改めて意識の大半を集中させる。

実戦において、情報の有無は非常に大きな影響を及ぼす。火を吐く。その一文だけでも、予め知っていることの価値は計り知れない未知であるからこそその脅威。既知の脅威など、幾らでも対処が可能となるのだ。陳腐な物言いではあるが、歴史が幾度も証明している。

……とはいうものの。原則として、物事には常に表裏が存在する。

事前情報として大層重宝されている手配書ではあるが、極稀に誤報が混在する事もある。故に、先入観に囚われ過ぎて、懸賞付きの討伐に失敗したという事例も過去にあった。だがそこはそれ。知識と経験を積み重ねて、情報の取り扱いを覚えていく以外に術はない。

「よし、と」

見るべきものは見た、という満足気な声。

アクラは、懸賞付きの情報を急いで頭に叩き込み、次いで、若干空いてきた受付に視線を向けた。ギルド職員の高い事務処理能力に感心しつつ、クルリと踵を返す。まずは、元々の用事を済ませておかなければならない。

「じゃあ、妾^{わたし}はちょっと依頼の報告に行ってくるから」

「あ、はい。お疲れ様でした、アクラちゃん」

名残惜しそうな顔をする白い少女に、武闘士^{ファイター}は呆れた顔を見せた。

「まったく、何言っただか。疲れるのはこれからでしょう?」

「え……？」

「なによ、その顔は。情報だけ渡して、ハイサヨウナラだと思った？」

短い桃色の髪を揺らして、紫眼の少女は心底可笑しそうに笑う。

「で、ですが、アクラちゃんはお仕事帰り——」

「殆ど不眠不休の聖女さんに言われたくないわ。とにかく、魔物の調査は妾も手伝うことにしたから、ちょっと此处で待ってなさい。勝手に رفتたら許さないわよ」

勝気な笑みを残して、アクラは受付まで歩いていった。

コレットの友達として、彼女は一刻も早い事件解決を優先すると心に決めている。故に、これは当然の行動だった。噂の段階とはいえ、突然変異体の話が出て来たとなれば、尚更。そうでなくとも、戦闘を彼女と巫女で請け負えば、聖女の負担は格段に軽減される。

「……………」

友人の颯爽とした背を見送りながら、聖女は思案する。

自分の為にも、彼女の為にも、ここで断るなど以ての外だ。アクラドゥクニウムという強大な戦力は純粹に有り難い。コレットは己の生存率を僅かでも高めなければならない。その身は、既に彼女だけのものではないのだから。実際、突然変異体が元凶であった場合、疲れ切った身では不覚を取る危険性が有る。改めて、断る選択肢など有り得なかった。

——
実を云えば。

聖女や巫女と同様に。アクラはアクラで、これまで事件を解決出来なかった事情が有る。

一言で云えば、それどころではなかったのだ。西で冒険者が窮地に陥っていると聞けば、その援護を依頼され。東で無辜の民が魔物に襲われたと聞けば、その退治を依頼され。北で行商人が重要な物資を運搬していると聞けば、その護衛を依頼され。南で国家或いは宗教の重要人物が懸賞付きに追われていると聞けば、その救出を依頼され。依頼され。依頼され。また依頼され。一つの依頼を処理する間に、三つの依頼が舞い込むという無茶苦茶な悪夢。

詰まる処。アクラに限らず、冒険者達は絶え間なく発生する事件の対処に手一杯であり、到底魔物の調査どころではなかったのだ。特にアクラは、その実力と信頼の高さも相俟って重大な仕事を任される事が多く、ここ最近、まさしく東奔西走の日々であった。

付け加えれば、それ等を……少女は、全て、一人で片付けなければならなかった。

何故ならば。

アクラッドウクニウムは、単独で活動する稀有な冒険者であるからだ。

通常、冒険者はパーティーと呼ばれるチームに所属する。統制された集団は戦闘に強い。就寝時に見張りを立てることも可能となり、戦略や戦術の幅も大いに広がる。各人の技能、更には魔法を始めとした特殊能力を共有出来ることも大きなメリットだ。

そも魔物という障害は、ご丁寧に一匹ずつ現れてくれるほど親切な存在では有り得ない。寧ろ、中には軍隊規模で街や村を襲撃する種族も確認されている。然り、敵が集団で襲つて来るならば、集団で襲い返すのは極々自然の成り行きだった。

しかし、ファイター武闘士の少女——アクラッドウクニウムには、その当たり前が適用されない。理由は単純。彼女は、集団を個で圧倒する強大な戦闘能力を保有している。端的に云えば、誰もアクラのレベルに付いて来る事が出来ないのだ。

……そういった意味でも、コレットや捺菜は、本当に数少ない例外もなのである。

無論。それだけならば、仲間達パーティーの成長を導くという選択肢も残っているのだが、アクラの優れ過ぎた容姿が、七面倒なトラブルを招き寄せる。底辺の冒険者には、野盗じみて下卑た連中も数多い。そういった者が冒険者に採用されてしまうのが、この国の現状であり過去。いっそ、汚点と云ってしまっても過言ではあるまい。

一度、女性のみで編成されたパーティーに所属した事もあったが、長続きはしなかった。実力差が有り過ぎて、どうしても浮いてしまうのだ。彼女達の心底申し訳なさそうな顔が、今でも少女に孤独を強いる。互いの為にも、アクラは単独を選択せざるを得なかった。

こうして。過去の苦い経験を経て、少女武闘士^{ファイター}は結局一人で活動する事になった。故に、本来ならば多人数で行なう仕事を、少女はたった一人で熟している。冒険の支度も、夜営の準備も、魔物の退治も何もかもを、たった一人で熟している。

コレットも捺菜も、アクラの素顔を知る友達である事に間違いはないが、彼女達は冒険者である前に聖職者である。冒険に出る機会など、そう多くない。コレットがアクラの同行を諒としたのは、そういった事情と決して無関係ではなかった。

同情ではない。聖女コレットもまた、彼女にしか理解出来ない孤独の持ち主であるが故、アクラの参戦を心から歓迎していたのだ。

——昨日も今日も、恐らくは明日も。

ずっとずっと単独で生計を立てていくのだと、アクラは半ば以上諦めている。

自分こそが最強だと自惚れるつもりは毛頭無いが……それでも寂寥感は拭えない。互いに助け合い、協力し合うパーティーを見掛ける度に、その思いは消えるどころか強まっていく一方だった。共同作業という言葉が持つ魅力に、どうしても抗えない。

そう。半ば以上諦めているということは、まだ心のどこかで、諦め切れない部分が残っているということ。少女は思う。いつか、どこかで、現れてくれるのだろうか。自分と同等の実力を持ち、自分と対等に会話を交わしてくれる、そんな都合の良い仲間が。

我ながら凄く自分本位よね、と内心自嘲しながら、アキラは受付嬢に話し掛けた。

「……………」

壁に貼られた沢山の手配書を見て、聖女は己が使命を再認識した。

自分の治癒魔法が人々の役に立っている。その事実はとても嬉しい。しかし、治癒魔法を受けたくても受けられない者達が居る事を知る以上、素直に喜ぶのは難しい。立場や感情が互いに闘ぎ合い、コレットは苦悩する。自分は治癒が出来るのに、自由に治癒が出来ない。それは何かが違っていると、彼女の心は叫んでいた。夢でも、現でも、幻でも。

然れど、その御蔭で莫大な寄付金が集まった事も確かな事実である。それは危険な魔物を退治する為に使用され、民の泣き顔を減らす為に貢献を果たす。金銭に余裕が生まれれば、自然と打つ手も増える。例えば、治癒の魔法符を大量に生産する、といった手が。

然り。今、聖女が此処に立っていられるのは、疑いようもなく寄付金の恩恵である。

それでも。それでもコレットは、苦悶に喘ぐ人々の顔を歓迎してしまうような治療師ヒーラーには成りなくなかった。衣食住が満たされた人間の、贅沢な在り方、ともすれば不謹慎な考え方かもしれないとは思いつつ……それでも、人として、そう願わずにはいられない。

ぎゅっと拳を握り、治療師ヒーラーの少女は決意を新たにして――

「コレット、見てください！ 今日の夕飯が居ました！」

直後、思いつ切り脱力させられた。

力の抜けたコレットの瞳には、それはもう活き活きと表情を輝かせて、白魚のような指で大型の魔物エッグベアの手配書を指し示す聖騎士様が映されていた。

思わず崩れ落ちそうになった両膝を奮い立たせて、コレットは弱々しく言葉を紡ぐ。

「ナ、ナズナ……私達、これから魔物の調査に行くのよ？」

「はい、もちろんです。あくまで、副次的に美味しい魔物の調査が進んだとしても、そこは喜びこそすれ、そんな呆れ返るほどの事ではないと思うんですが、どうでしょう？」

巫女は。

笑顔の裏で、言外に。

肩の力を抜けと、朗らかに語る。

「え、それは、その……」

「べつに修道院の食事に不満が有るワケではないのですよ、ちよつとしか。」

たまには新鮮なお肉をパクンパクンしたいとか、甘味な果物をはむんはむんしたいとか、そんなことは思っていないですよ、ちよつとしか。危険な魔物を一匹でも減らすべく、私は粉骨碎身^{わたし}の精神で日々仕事に励んでいます。夕飯^{エッグベア}楽しみですねっ！」

巫女は。

笑顔の表で、率直に。

一人で背負うなど、賑やかに語る。

「最後、本音が出てます……」

「む、気のせいです。やはり疲労が由々しいみたいですプリンセスね聖女様。

なら、やはりここはひとつ、皆で美味しい御馳走を食して、笑顔や余裕を取り戻すことも重要であると、不肖聖騎士は思う所存。いいから黙って肉を食わせ——もがっ！」

途端、コレットは慌てて捺菜の口を両手で塞ぎ、小声で器用に叫んだ。

「ナズナ、本音！ 本音抑えてっ！ ここギルド！ 修道院じゃないから！ 聞こえちゃうから！ 後で怒られちゃうから！ 主に私がっ！」

「もがもが……ぷはっ。なるほど、それはマズイですね。

すみません、私^{わたし}としたことが、ほんのちょっぴり我を忘れてしまったようです」

「はあ……。もう、ナズナったら。ホント、兵糧の重要性がよくわかります」

ちなみにエッグベアとは、討伐ランクEの魔物である。

力が強く知能も高い。普通の熊と違って卵を産み、それを雄雌交代で温めて孵す。一度の産卵で産まれる卵は一つのみ。その為、繁殖率は低いのだが、エッグベアの肉や卵はとても美味であり、栄養価も極めて高いことで有名である。グルメ達の間でも根強い人気を誇り、目玉が飛び出て大陸を一周して来そうなほどの高値で取引されている。

それ故に、というワケでもないのだが。

じとっとした目で見詰めてくる幼馴染の少女に対して、捺菜は必殺の切り札を切った。

「きっと、エッグベアの肉や卵は、子供達への良い土産となるでしょうね、^{プリンセス}聖女様」

「うっ……」

効果は拔群だ。^{こつが ばっぐん}

「——。……わ、わかりました。あくまでも、あくまでも副次的ですよ?」

「もちろんです。私^{わたし}とて、最優先事項は事件の解決に固定されていますから。それに——どの道、コレットも気付いているのでしょ
う?」

肩を竦めつつ、捺菜が手配書の群れに顔を向けると、心得たようにコレットは頷いた。

「ええ。ナズナがエッグベアの話を持ち出した理由も、ちゃんとわかってる」

適度に肩の力が抜けた聖女は、改めて思考を回転させる。

彼女の視線は、とある一つの手配書に向けられていた。その手配書には、複数の魔物達が描かれている。ゴ布林ソード。ゴ布林ガード。ゴ布林ファイター。ゴ布林メイジ。他にも、ゴ布林ボウやゴ布林ランスの姿も見受けられた。

——最近、魔物達が妙に賢くなってる気がするのよね。特にゴ布林。

コレットは、アクラの言葉を思い出していた。

懸賞付きの手配書には、簡潔ではあるが被害日時も記されている。時間と場所。それ等を重点的に全ての手配書を読み進めて整理していくと、ひとつの事実が浮上する。ゴブリンやエッグベアを始めとした懸賞付きの出現区域が、ある場所から徐々に拡大しているという、断じて見逃すワケにはいけない、重要極まりない情報。

そこは、未だ人の手を拒む天然の迷宮。

自然が、自然のままに生まれ育つ、霊妙な大森林。

あまりにも強い魔物が出現する為、実力的にも、法律的にも、冒険者が立ち入る為には、最低でもBランクを必要とする、超危険区域。魔性を祓い清め、聖性を与え給う『天水』が採取出来る、唯一無二の自然要塞。

その名を。

天水の大森林『デイルパラケルカ』という。

第08話 冒険者ギルド（後書き）

次回は主人公視点に戻ります。

見知らぬ土地どころか、見知らぬ世界に飛ばされた少年の現状把握
劇場。

第09話 奈落の追憶？（前書き）

ここから暫らく、主人公の現状把握劇場が繰り広げられます。
不可思議な現象に慣れ切った異能者であるが故の思考迷走っぷりを
お楽しみください。

第09話 奈落の追憶？

オレは、夢を見ていた。

遠い昔。まだ子供の頃。善良な一般人を目指して必死だった、天才と呼ばれる少年の話。【転眼】の事など露知らず、ただひたすらに「普通」で在ろうとしていた、あの頃。

自分にとつての「普通」が、世間にとっては「異常」なんだと知った時には、もう全てが手遅れで。それでも、諦められなくて。みんなに、認めて欲しくて。それなのに、頑張れば頑張るほど、求めているモノが離れていった、懐かしくも忌まわしい幼年期。

指先から零れ落ちたモノは二度と還らず、やがて孤独に身を委ねてしまう、滑稽な昔話。

神童。麒麟児。天才少年。

そんな呼名が、どこまでも果てしなく憎かった、幼い子供の夢だ。

オレは、父の顔を知らない。

一度だけ。ただ一度だけ、母に尋ねた事がある。母は、困ったように微笑んだ。それは、とてもとても悲哀に満ちた微笑みだった。オレの方が、悲しくて泣いてしまったくらいに。ごめんなさい、と母はオレを抱き締めた。オレが泣き止むまで、ずっと頭を撫でてくれた。どうして母が謝るのか、この時のオレには分からなかった。

……もう二度と、父のことを訊いてはいけない。

子供ですら——或いは子供だからこそ、そう悟った。どんな事情が有るにしろ、ここに父は居ない。それが現実だった。なら、父の代わりに、オレが母を守ろうと、出来もしない決意を胸に抱いた。御伽噺の騎士になったみたいで、堪らなく誇らしかった。

大切な人を、この手で守る。

その言葉が放つ魅惑的な魔力に、幼いオレは深く酔う。

だから、オレは今でも父の顔を知らない。でも、それでいいとオレは考える。母が何故、何も答えなかったのか。今なら分かる。胸が締め付けられるほどに、よく分かる。後戻りが出来なくなつて、引き返す道を失つて……ようやく、オレは母の深慮を知つたのだ。

母は、オレを大切に育てた。オレは、母を大切に支えたかった。

親族に疎まれていた母は、いつも敵意に晒されていた。でも、オレは母が泣いている処を一度も見たことがなかった。家は貧乏だったけど、母は無けなしの金でオレに菓子を与え、玩具を与え、知識を与え、一緒に遊んでくれた。母は、決してオレを独りにしなかつ

た。

もちろん、全く不満が無かったわけじゃない。ずっと不思議だった。母は、何故かオレと「目」を合わせてくれなかった。けど、ベツに気にするほどの事でもない。子供心に微かな違和感こそ覚えていたが、強いて不満を挙げるなら、といった程度だ。

オレは母が大好きで、世界で一番大切な家族だった。だから、そんな些細な事はどうでもよかった。痩せ細った体で、それでも尚、笑顔を絶やさずに内職を続ける母の姿は、今でもハッキリと思い描ける。ああ……………。ああ、本当に。心から、頭が下がる思いだよ。

なのに。

おかあさんは、つよいひとなんだ、って。

オレは、自分勝手に、どうしようもなく救えない勘違いをしてしまった。

母の誕生日が近付いてきた、ある日のこと。

オレは、母に贈るプレゼントが中々決まらず、一人思案に没頭していた。なんでもいい。とにかく母の喜ぶ顔が見たかった。幼心に、オレは一体何をすれば母が喜んでくれるのかを考えた。オリンピックで金メダルを取るか。又は、何か凄い発明でもするか。いつの間にかスケールが独り歩きをしている事に気が付いて、オレは内心で

首を横に振った。

母は、とても物静かな為人をしていた。よって、あまり周囲が賑やか過ぎるのは、却って困らせてしまう。もっとう、ささやかなブレゼントがいい。そんな風に頭を悩ませながら近所を歩いていると、立ち話をする主婦達の姿が見えた。井戸端会議、というヤツだ。

ウチの息子がどうか、何処どこ其処に嫁いだ娘がとか、そんな他愛もない話が、オレの足を地面に縫い付けた。ふと、思い出す。オレは、母の友人を一人も知らない。いつもいつも、内職に追われているか、オレの面倒を見ているか、二つに一つ。

それだけ。たったそれだけが、母にとっての日常だった。

オレは、世間話に興じる主婦達の顔を熱心に観察する。話題は取り留めがなくて、次から次へ飛んでいく。既に、最初の話題とは何の関連性も見受けられない。そんな、別段大して珍しくもない近所の井戸端会議を、夢中になって聴いていた。

いつにでも在る。どこにでも在る。

だからこそ。それはあくまで、有り触れた日常の一風景に過ぎなかったけど。なんだか、とても楽しそう。なんだか、とても嬉しそう。なんだか、とても幸せそうだった。

これだ、と。

幼いオレは、喜色満面に決意する。

特別な事は、何もしなくていい。

ただ普通に、家の近所で、同じ子を持つ母として。

ウチの息子は凄いんだって、胸を張って自慢出来たら、それはどんなに――

――そうして、オレは目を覚ました。

緩やかな闇の底に沈んでいた意識が、柔らかな陽の光に導かれて急速に浮上する。

その、刹那にも満たぬ一瞬間で直感した。ここは、よくない。まるで地獄の三丁目にでも迷い込んだような感覚。続いて五体五感が目覚め、自分が仰向けに倒れていることを知る。背中には草と土の感触。寝心地は、それほど悪くない。

視界を閉ざしたまま、オレは取り急ぎ左右の瞳に【遠触】と【貯蔵】を装備する。これをやらない内は、とても【眼】を開ける気になれない。既に、例の七面倒臭い異能禁止制限は解除されている。形而上の重たい枷が外れて、オレは心の底から清々していた。

とはいうものの。あの時の記憶は、凄く曖昧で断片的になっている。特に、最後の瞬間は何が起こったのか殆ど覚えていない。よって、オレは迅速且つ丁寧な自己診断と並行して、失われた記憶の復元を始め——そこでようやく、意識が完全に覚醒した。

横になったまま、薄く両目を開ける。眩さに備えて透かさず右腕を翳すが、一瞬も要さず視界は回復した。おや、と思いつつも、そのまま静かに真上を見上げる。形容が酷く困難な全身の違和感を自覚するまで、然程時間は必要なかった。

最初に、美しい緑葉が見えた。次に、遅い幹枝が見えた。

木々という木々が、それぞれ在るがままに生い茂り、穏やかな木漏れ日が、合間を縫って差し込んでくる。時折、思い出したかのように吹き抜ける涼風とも併せて、すぐさま別荘を建てたいくらいに心地が良い。実際、【蔵】には建物も幾つか入っている。

溢れ返る樹の匂い。身を包む草の匂い。巡り巡る土の匂い。そして、麗らかな風の匂い。疑いようもなく、此处は緑豊かな森林だ。自然が、自然のままに生きてきた命溢るる世界。だからこそ、と云うべきか。オレは本能に従い、警戒水準を段階的に引き上げていく。

陽光に照らされ、微風に吹かれて、涼やかに己身を躍らせる数多の枝葉。天をも貫かんとばかりに高く高く聳え立つ大樹は、一体ど

れだけの年月を耐えてきたのか。これだけ壮大な威容なのだ。さぞ高齡に違いない。

さわさわと、耳に優しい森の音色が周囲に吹き渡る。

まあ、それはいい。べつにいい。いや、本来なら心行くまで森林浴を堪能しつつ、迷わず二度寝に突入したいところだったが、今はいい。頭に浮かぶ多数の疑問点と無数の不明点を一秒でも早く片付ける方が、今のオレには何倍も重要だった。

現在位置。現在時刻。転移方法。転移理由。更には、現状や違和感の正体、等々。色々と疑問は尽きないが、まずは落ち着こう。推測は、それからでも遅くない。最大の問題である例の無色透明な結晶についても、早急に情報を掻き集めなければ。

そうだ、こんな所で犬死するワケにはいかない。ならば、やるべき事は決まっている。

さて、それでは。

ひとつずつ、じっくりと足場を固めていこう。

意識を思考に六割、警戒に四割配賦する。

並列思考を全起動。七つの思考それぞれに、健康管理、過去回想、情報収集、原因考察、現状把握、未来予測、行動方針を割り当てる。

労働基準法を完全無視して、超高速回転する冷血頭脳が、抜群の瞬発力を以って各自の担当分野を狂氣的な演算速度で処理していく。

同時に。感覚器官や知覚情報を新たな環境に馴染ませる為、オレは深呼吸を繰り返す。

肺に新鮮な空気が取り込まれ、全身に行き渡る。美味い。空気にも味が有るということを久しく忘れていた。あの白い神殿では忌避してしまっただが、やっぱり空気はこうでなければやってられない。これからは、オレもきちんと環境問題に取り組むとしよう。差し当たり、二酸化炭素を吸って酸素を吐き出す練習でもしてみようか。

自己診断の一環で、オレは右の掌を額に軽く当てる。あの無色透明な結晶と対峙した時の鬱陶しい頭痛は綺麗に消え去っており、僅かな残滓さえ皆無。寧ろ思考は明瞭明晰で、且つ妙に澄み切っている。オマケに、疲労やストレスといった類が、根刮ぎ取り払われていた。

慎重に、確かめるように上半身を起こす。あれほど邪魔だった激痛が、まるで嘘のよう。強引に剥き出された神経を鑢やすりでガリガリ削られるような地獄。気が狂いそうになったのは、本当に久し振りだった。発狂手当として命でも請求したい処だが、生憎と相手は無機物だ。授業料と割り切って、有り難く骨に刻んでおくとうとう。

と——背中を土を払いながら、オレは内心で首を傾げた。

何か変だ。いつもと違う。不思議な違和感が全身に染み付いている。でも、あの「声」と同様に厭な感覚は全くない。寧ろ絶好調と云ってもいいくらいに調子が良い。まるで自分の体じゃないような、そんな有り得ない錯覚さえ抱いてしまうほど。

オレは、結晶に好き勝手されてしまった事を思い出す。未だ立ち上がらず、慎重に慎重を重ねているのは、詰まる処そういうワケだ。何しろ得体の知れない知識を書き込まれた上、得体の知れない「力」を注がれ、更には得体の知れない場所に飛ばされたのだ。

我が身を案じるのは、至極尤もな話。

オレだって本音を云えば、さつさと立ち上がり、とつとと【千里眼】を行使したい。

逸る心を、時間の無駄と判断して即刻抑制。

考察を別の思考回路に任せて、今まで寝ていた場所に手を当てる。草と土の感触が左掌に伝わってきた。温かい。どうも、結構な時間を此処で呑気に寝過したらしい。折れた草叢の情報も併せれば、此処に、人間が、一人、長時間、横になっていたという情報がモロバシ。

仮に何かの間違いで、此処が実は閻宗教団体の絶対禁断聖域……とまではいかなくとも、何らかの理由により立入禁止区域だった場合、この有様を発見されれば、それはそれは豪く面倒な厄介事の種子と成り得る。此処が日本とは限らないのだから、当然の話だ。オレは、ある程度 of 状況を把握するまで、極力人目には付かない事を行動方針に加えた。

「……………」

徐々に冷えていく地面を見据えて、オレは更に考える。

熱を持っているという事は、一応オレは生きているのか、それとも死んでしまったのか。べつにどちらであろうと行動原理に変化はない。が、やはり生者の方が何かと都合は良い。死者の選択肢は、驚くほどに数少ない。事を成すのは、いつだって生きた息吹なのだ。

ぶるり、と。一度だけ体が寒気に震える。空気は美味いが、森の気温はやや低めだった。ただでさえ睡眠中は体温が低下するというのに、こんな場所で長時間に渡って睡眠乃至^{ないし}気絶なんかしていれば、体が冷えるのも当然か。外套を羽織ってもいいけれど、影が広がりたり風に靡いたりする服は、現状に適さない。

然り。森という名の野生世界を、決して甘く見てはいけない。

オレは再び目を閉じる。両手の血管が充分に拡張して、温かい血液が指の先まで行き渡る様子を鮮明に想像。同時に、温かくてドロリとした、オレンジ色の液体に両手を浸している様子を克明に想像。合気や気孔から取り入れられた、軍隊でも使用されている温度制御法。一、二分もすれば、火照る程度まで温められる。

目の前に両手を翳して、体温の調節機能を巧く制御出来た事を確認する。次いで、改めて森の木々を穿つように観察した。葉の照りが強い、典型的な照葉樹林。幹の一つ一つ。枝の一本一本。葉の一枚一枚。その色彩。その形状。その模様。その全てがクリアに映る。

もちろん、今は【透視】を使っていない。それにも関わらず、馬鹿みたいによく見える。真正正銘、オレという人間が持つ素の視力だというのに、まるで顕微鏡や望遠鏡の世界だ。オレの両目は、確かに常人よりも遥かに優れていたが、ここまで怪物じみてはいなか

った。目覚めた時、瞳の調節機能が異常な性能を発揮していた事も忘れていない。

クリアな視界。クリアな世界。どこまでもクリアな現実。

ちと暴論ではあるが、人間にとって、視界とは世界に等しい。ならば、世界が変わったと云い換えても罰は当たるまい。視力の低い者が初めて眼鏡を掛けた時、きっとこんな感想を味わうのだろう。或いは、レーシック手術を受けた者でも構わない。

——と、そうだ。手術といえば。

徐に、オレは若干の緊張を覚えながら右眼の【貯蔵】を発動した。

第09話 奈落の追憶？（後書き）

まだまだ。あと3話くらい並列思考が頑張ります。
ストーリーのテンポとかブチ壊しですが、お付き合いいただければ幸いです。

第10話 廻れ並列思考（前書き）

ある意味、異世界モノの醍醐味のひとつ——かもしれない、現状把握回その2。

第10話 廻れ並列思考

異能が暴走しないよう、細心の注意を払いつつ【貯蔵】を発動。

次の瞬間、上方十メートル地点に電子体温計型の精神鑑定機が出現する。【蔵】から物を取り出す際、半径十メートル以内であれば出現場所は原則として自由に指定可能。ついでに云えば、取り出してから十分以内であれば、わざわざ直に触れなくても回収可能。これ等の機能を巧く応用すると、恐ろしくえげつない事が出来てしまう。

然もありなん。それこそが、この【貯蔵】という異能が持つ、もうひとつの真価。

よって、普段は——より正確に云うと人前では、必ず手元で収納して、必ず手元で出現させるよう徹底している。暗殺者にとつてこの【貯蔵】という異能は非常に有用な手札。無闇矢鱈に知られるような真似は慎むべきだ。

……………いやはや、我ながら必須秘匿の多いこと多いこと。

設定説明的退屈な手続きは一旦終了して、確認事項は次の二つ。
一点目、オレの意志通り異能が機能すること。二点目、オレの体が通常通りの大きさであること。あくまでも、そうあくまでも可能性

の話として、小さくなったオレが、嘘みたいに精巧な森林のミニチュアに放り込まれたっていうオチを危惧してみた。

尤も、その危険性は撃滅されたと見て大丈夫だろう。仮にオレが例の結晶に小さくされてしまったとしても、【蔵】の中身まで小さくされたとは考え難い。それをやると、いろいろ矛盾が発生してしまう。流石の結晶様も、世界秩序を敵に回したくはないだろう。

上方を仰ぎ見る。特に何の問題もなく出現した精神鑑定機が、重力のままに落ちてきた。無駄に巨大な機器が真上に出現してしまう危険性に備え、回避の準備は整えていたのだが、どうやら取り越し苦労に終わってくれたようだ。

オレは左手で難なく機器を受け止める。なんで前方、或いは左方右方に出さなかった、と問われれば、いちいち取りに行くのが面倒だからだ、と迷わず即答する。もちろん、下手に動きたくなかったという理由の方が本命。少々、石橋を叩き過ぎな気もするけれど。

では、無事に機器を取り出せた処で、そろそろ本題に戻るとしよう。

精神手術を施された筈の人間に、行動を強要する。それを可能とする例の結晶を相手に、「たとえば体は操られても、心までは渡さない」なんて嘯いても虚しいだけだ。今のオレは、記憶や精神を改竄されている可能性を、否定する事が出来ない。

なので、こうして左脇に精神鑑定機を挟み、大人しく結果を待つことにする。

精神を操作する異能は、とてつもなく恐ろしい。オレは嘗て暗殺

した、ある一人の精神系異能者の所業を回想する。酷い事件だった。沢山の人が、自覚もないまま喜び勇んで不幸に堕ちた。ヒトの想いというモノが如何に脆く儚いか、鬱になるくらい思い知らされた。

やがて、オレという暗殺者が駆り出され、精神系異能者の死を以って事件は解決したが、後味は最悪だった。人が、まるつきり玩具だった。時を経た今でも結構なトラウマなので、詳細は割愛する。十八歳未満は購入禁止の催眠系凌辱ゲームでもやれば、まあ大凡の見当は付くだろう。当時、まだまだ子供だったオレにとって、相当に衝撃的だったことも。

——閑話休題。ツマラナイ回想はやめておこう。

何はともあれ、一刻も早く元の場所に戻り、組織の精神系異能者に診てもらわなければ。このくらいは二つ返事でやってもらわなければ、到底割に合わない。オレが「組織」なんて面倒なモノに所属している理由の一つが、まさしくソレなんだから。

「……しかしまいったね。アイツに借りを作るのは気が進まないんだが」

苦笑いを零しつつ、オレは左脇から精神鑑定機を回収する。

案の定、結果はシロ。あの時の「声」を脳裡に思い起こす。悪意や敵意等を感じられず、どこか放っておけない声だった。だからなんだと言われてしまえば返答に困るけど、あまり過剰に心配してストレスを溜め込むのも、それはそれで本末転倒だ。

それに、薬物の線が消えてくれただけでも、充分に有り難い。悲観的になり過ぎず、だが楽観的にもなり過ぎず、最適な緊張状態を保つことにしよう。適度な不安や緊張は、戦闘に必要なアドレナリンを分泌させる作用を持っている。

とはいえ、予想より動揺はしていない。なんだかんだで、知らない天井には慣れている。未知の場所に対する恐怖には耐性が付いていたらしい。日本人には「自分だけは大丈夫」と考えてしまう呆れた悪癖が有るけれど、オレの場合は、寧ろ「自分に限って危険だから」の人生を送ってきたので、そういった油断とは全くの無縁だった。

「――」

用事を終えた機器を【蔵】に戻して、オレは思案に没頭する。

組織の精神鑑定機に反応が無いという事は、少なくとも、異能や薬物による犯罪、悪戯、事故といった可能性は激減する。だがしかし、忘れてはいけない。例の無色透明な結晶は、明らかに異能以外の不可思議な「力」を持っていた。

即ち。仮に、ジャックという人格が改竄なり操作なりされていたとして、果たして素直に鑑定されてくれるのか……という問題が上がってくる。この鑑定機は、毎度お馴染み組織の精神系異能者と、同じく組織所属の研究者達によって製作された物だ。

必然として。異能でも薬物でもない、正体不明の不可思議な「力」なんてモノは想定外。こうなってくると、結局は例の「声」を信じるか否か、という実に単純な話が出来上がる。なら、ここは多少強引にでも楽観思考を適用しよう。どうせ、オレにはどうしようもない

い。進む道は、前にのみ。だったら、その方が精神衛生上において大変よろしい。

否。よろしい、筈だったのだが。

「……………」

昨夜の、一部失われていた記憶の復元を終えたオレは、早速泣きなくなつた。

感想は一言。アホかオレは。あまりにも無様な顛末に、我が事ながら心底呆れてしまう。この先、もしも過去に戻る機会を得たら、まず真つ先に自分を殴りに行こうと決意する。逃げ足の速さには多少なりとも自信を持っていたが、上には上が居たというワケか。悔恨の心は元より、羞恥の心を甚く刺激されてしまう。ああ、今なら顔から火が出せそうだ。

状況を【蔵】の片隅にでも放つて、白痴の如く奇声を上げたり、大地とゴロゴロ戯れたい衝動に強く駆られたが、鋼の精神で大人しく自制する。一見、それはそれは穏やかな森林。でも、騙されてはいけない。ここは……あまり、長居をしていい場所じゃない。

要するに。目に見えない危険つてのは、結構おつかないんだぞつて話。

……………不明点が多過ぎて、このままでは身動きが取り難い。

空間転移、幻想空間、記憶改竄、時間操作……等々。幾つもの可

能性が、脳裡を過ぎては保存されてゆく。際限なく膨らむ想像。どれも決定力に欠けるので、ここは一旦保留する。確かめなければならない事は、まだ他にも沢山有るのだ。

それに。いずれの理由にせよ、結局は例の結晶が原因で間違いない筈だ。

「……あの石コロめ。覚えてろよ」

悪態を吐きながら、オレは懷から例の携帯電話型諜報機を取り出す。

そして液晶画面を見た瞬間、オレの疑問は更に追加された。まず目に入ったのは、圏外の二文字。衛星を最大限に利用した、組織特製の最新諜報機が、圏外。たとえ、地中だろうが海中だろうが空中だろうが、一切合切お構いなしに平然と動作する仕様の諜報機が、圏外。

更に時刻。現在、午後10時06分。午前ではなく、午後。オレは思わず空を見上げた。柔らかな木漏れ日が、両の瞳を刺激する。人工物では有り得ない。よって、実は「森林」を表現する超巨大ジオラマセットに迷い込んだ、なんて素敵過ぎるオチは断じてない。

恐る恐る、もう一度だけ諜報機に視線を落とす。

現在、午後10時07分。時差か故障か……はたまた将又幻覚か。オレは諜報機の自己診断機能を起動する。異常無し。故障の可能性はグンと減ったが、益々圏外の理由が分からない。一応念の為にGPS機能を起動するが、即座にエラーメッセージが表示される。

是^{これみ}見よがしに強調される「圏外」と睨めっこをして、オレは溜息を吐いた。

適当な人里か動物を見付けて、それを足掛かりに現在位置を割り出す手段も有るのだが、耳に入ってくるのは虫の音か、草葉のさざめきくらいだ。そろそろ小動物の一匹二匹現れてくれてもよさそうなものだが、少なくともオレの感知領域には未だ気配すらない。

それに、なんというか、さつきから。

何やらこう、厭な予感がもつきゅもつきゅに膨れ上がっていく一方なのだが、さてはて。

——ホント、どうしたものかな。

背後の大樹に背中を預けて、オレは現状について考える。

幸い【水術】が有るので、水には一生困らない。風呂や洗濯だっ
て思いの儘だ。保存食も暫らくは保つ。こんな事もあるつかと、オ
レの【蔵】には無尽蔵の食糧が保管されている。場合によっては、
組織による補給も可能となるだろう。

……ちなみに、オレは料理をしない。出来るけど、やりたくない。

まあ、仮に。年単位で無補給状態が続いてしまうようならば。その
時は、正々堂々潔く。大陸規模の超絶盛大なダイニングメッセー
ジの製作に取り掛かることにしよう。それから、カツラ疑惑の有る
神様をボコボコにする準備もしなくてはなるまい。

「……………」

無防備になるので、あまり気は進まないが、やはり【千里眼】を使わざるを得ないか。

単純な空間転移だけならば問題はない。いや、もちろん此処が日本国外の場合は不法入国云々が地味に面倒だけど、今度こそ素直に組織様の有り難い御力を拝借すれば、どうとでも対処は可能。さつさと人里なり何なりを探して、現在位置を知る処から始めればいい。

——だが、しかし。

あれだけビンビンに悪寒を感じておきながら、果たして平穩無事に済むだろうか。

頭の中で事実だけを整列させた後、幾つもの仮説と推測を立て、慎重に考察を繰り返す。これから起こり得る、ありとあらゆる出来事を精緻に想像して、予め心の準備を済ませる。残酷な空想を一通り満喫して、オレは現状候補の一覧を脳内に表示させた。

幻術や精神操作系の可能性も視野に入れているので、早いとこ候補を減らしていかないと過労と心労で倒れそうだ。幻覚の場合は、脱出や解除の手掛かりも探さなければならぬ。やるべき事は多い。行動の前提条件と優先順位を定めて、テキパキとやっていこう。

「——？」

周辺の観察を進めていると、オレは半ば諦めていた最強の手掛かりを見付けた。

胸元に取り付けていた筈のカメラと、両手に握り締めていた筈の短刀^{ナイフ}だ。それが、草叢に紛れて落ちている。透かさず【転眼】で畏の有無を確認。異能に属する危険は無い。肉眼で改めて観察するも、やはり問題は認められない。

よって、あれ等が「餌」である可能性は低いと判断する――
が、回収は万全の状態で執り行なう。撮影されたモノも、今此処で確認はしない。貴重な情報源なので、やや逡巡を覚えるが、安全な場所まで辿り着いた後で、どっしりと腰を据えて視聴したい。

その為にも。まずは、精々冒険の続きと洒落込もう。

「――さて」

無感動な間投詞を虚空に投げ、オレは薄く笑った。

そろそろ出発しよう。自己診断を終えて、現状を理解して、ひとまずの方針も固まった。これ以上この場に居たところで、新たな情報^{情報}は得られない。それでは何一つ解決出来ない。なら、いつまでも座り込んではいられない。そういうことだ。

背後の幹から背を離して、最後に、もう一度だけ空を見上げた。

枝葉の合間。その向こう側に抜けるような青空が垣間見える。いい天気だ。背中に羽でも生やして、どこか遠くに飛んでいきたい。生憎と現状は真逆で、どこか遠くから飛んできたという線が濃厚だけど。つくづく、オレは厄介事と運命の黒い糸で結ばれているらしい。

事実は小説より奇なり。冗談じみた状況は、しかし殆ど意味不明。誰か此処に来て、一体どこで笑えばいいのか是非とも教えて欲しいくらいだ。薄く笑ったまま、オレはそんな事を考えた。ついでに本日購入予定だった小説も買ってきてくれると有り難い。もちろん報酬はたんまり弾むさ。部下の理解に定評のある、ウチのスパルタな上官がね。

薄い笑みを消そうともせず、オレは瑞々しい森林世界に視線を移す。

其処^{そこかしこ}彼処に撒き散らされた「危険」の二オイさえ無ければ、この緑溢るる舞台にも、さぞ好感を抱けただろうに。少なくとも、ゴミのポイ捨てを見掛けたら、即座にムーンサルトをお見舞いしてやる程度には。ホント、世の中は儘ならない事ばかりだ。

豊胸疑惑の有る女神様に内心呪詛を唱えつつ、オレは全身のバネに力を込めた。

第10話 廻れ並列思考（後書き）

誤字脱字等のチェックが終わり次第、隙を見て（？）残り2話も投稿させていただきます。

第11話 陰湿な誘蛾灯（前書き）

とあるFPSゲームにて、相棒のACRと共に戦場を駆け回っていたら、いつの間にか一ヶ月以上……。

皆様の拍手やメッセージが無ければ、果たして再び書く気になれたかどうか……本当にありがとうございます。

それから………こ、この物語は、その……フィクションです（ハ
ーハ；

第11話 陰湿な誘蛾灯

「――
Mood
告げる」

突き抜けるような快晴の下に、少女達は立っていた。

王都の外。比較的安全な街道から大きく離れた、一面の緑溢るる草原に、柔らかな微風が吹き抜けていく。麗らかに降り注ぐ陽光。涼やかに揺れ踊る草木。穏やかに舞い靡く純白の聖装束。壮麗な緑の地平線を差し置いて、朝色の聖少女が幻想的に映えていた。

僅かに距離を置いて、黒髪の巫女剣士が。その反対側には桃髪の少女拳士の姿が在った。片や聖女を見守り、片や周囲を見張り、それぞれの役割を油断なく果たしている。そこに、隙など有りはしない。たとえ空から千の魔物が降ろうとも、彼女達は平然と対処する。

さわさわ、と。温かく心地良い風を身に浴びて、白い少女は一心に呪文を紡ぐ。

Kaaoykiiwoohhgehhooovullooookuumhhaaq
Khxaafookhbbgaaooqiliao
「契約に従い、我が祈りに応えよ、風と光の大晶霊」

祈るように。願うように。詠うように。

目を閉じて、両の手を組み合わせて、少女は一語一語を大事に唱えていく。その表情は、その声色は、まるで御伽噺に登場する、慈悲深き女神のような神々しさで満ち満ちていた。全身を包む魔力の輝きは、彼女の髪と同様、綺麗な綺麗な蒼銀色。

残り少ない筈の魔力ソレを振り絞り、少女は——聖女コレットは魔法を行使する。

F o o b b o o k a i s s a o M d u a k u i s s a o C l a i h g e u m u w e h h a b b c s a
「響け風精、集え光精、我等が下に姿を現せ」

変化は、唐突にして鴻大こうだいだった。

聖女の魔力という魔力が喰われに喰われ、等価交換の原則に則り、術者であるコレットを中心として、複雑怪奇な円状魔法陣が、疾風はやての如き神懸った速度で描かれていく。蒼銀色をしたソレは、程なく虚空へと浮かび上がり、急速に拡大していった。

虚空に刻み込まれた、幾百幾千の幾何学的文様。都市の広場を丸ごと呑み込む程に広大な魔法陣が、凄まじい勢いで回転を始め、膨大な魔力を周囲に猛然と撒き散らし、間もなく、燦然さんぜんと淡い翠色に輝き始めた。常人ならば余波だけで吹き飛ばされそうな魔力の波動だが、聖騎士も冒険者も、特に反応を示すことなく、ただ己が役割に徹していた。

そして——

「来たれ、黄金の神鳥——
Koomhla Uigweydaemoqi
——チヨコボ！」
Moqokubu

召喚魔法が、発動する。

祈りに応え、願いに応じ、詠うような召喚師^{「レック」}の呪文に導かれて、空中に浮かぶ魔法陣が、一瞬で中心部に圧縮され凝縮され、眩い翠色の閃光を放つ。次の瞬間、見上げる程に巨大な召喚獣が降臨した。クエーっ、という、なんとも愛嬌の有る鳴き声と共に。

現れた神鳥チヨコボは、当然とばかりに聖女の許へ降り立ち、ジツと彼女を見下ろした。その外見を一言で云い表わすなら、馬のような鳥であり、鳥のような馬である。大きな頭、大きな嘴^{くちばし}、大きな翼。首は長く、黄金の体躯は、成人を軽く十人は乗せられる程の巨体だ。鳥と違う箇所は、二本の長い足を持つ処。馬と違う箇所は、前述通り幅広い翼を持つ処。

空を飛び、地を駆け、邪魔するモノは蹴散らす神鳥——それが、チヨコボである。

「相変わらず召喚魔法は派手よね！。

ま、それだけバカス力魔力を持っていけたら当然かって気もするけど」

呆れの混ざった微笑みを浮かべつつ、駆け戻ってきたアクラは道具袋を漁り始める。

次いで、有無を云わずに、魔力回復の効果を持つ魔法符^{サモ}を召喚^ナ

師の頬つぺたにペタリと貼った。符の冷たい感触に、少女が思わず首を竦めると、一瞬だけ蒼銀色に輝いた魔法符が彼女の魔力を回復して、直後、即座に徒^{ただ}の紙切れと化した。

「あ、魔力が……」

半ば習慣的に、コレットは右の頬に手を当て、役目を終えた符をペラリと剥がす。

「あんたの魔力量からすれば本気で気休め程度だけど、無いよりマシでしょう?」

どことなく楽しげに笑って、アクラは地を蹴り、チョコボの背に飛び乗った。

「ありがとうございます、アクラちゃ——ひゃんっ!」

頭を下げようとしたコレットの左頬に、今度は捺菜が魔法符を貼り付ける。

「ささ、可愛い声を出してないで、行きましようコレット。時間は常に有限ですから。それと、術式封印も忘れないでください」

「ううゝ……なんだか、いろいろと納得いかない……」

悪戯っぽく笑う巫女に続いて、少女は拗ねたような表情で自らの召喚獣に飛び乗る。

そして、掌の上に出現させた炎で、二枚の紙切れを灰にしつつ、思念を以ってチョコボに幾つかの指示を与えた。クエーっ、という

緊張感の無い鳴き声と共に両翼が広げられ、その巨躯が大地を離れ飛翔する。捺菜の愛刀が齎す恩恵により、振り落とされる事はない。

ヴオン、ブオンと迫力有る羽撃はばたきの音と共に、青い風景が次々と流れてゆく。高度は低めなので、羽毛を掴んで身を乗り出せば、地上の様子も見えないことはない。神鳥チヨコボの魔法により、風圧は全く感じられず、実に快適な乗り心地だった。

「やっぱり空の旅は気持ちいいわね。こう、目的地に向かって一直線な辺りが特に」

ある種、天然の羽毛布団に行儀悪く寝転がったアクラが、心地良さそうな溜息を吐く。

「そうですねー。私わたしとしては、これで美味しい緑茶と和菓子さえ有れば言うことなしです」

対照的に、行儀良く正座をしている捺菜が、心底残念そうな溜息を吐く。

「妾わたしは紅茶の方がいいけど、そこは両方用意すればいいだけの話よね」

「いずれにしても、今回は目的地が比較的近場ですから、のんびりとお茶する暇もなく到着してしまいそうなのが悩みどころですね。ああいえ、ここは喜ぶところでしたか」

「……………あの、二人とも。それ以前に、今回みたいな寸秒を争う事態でもない限り、滅多なことで召喚魔法は使わないつもりなのですが……………」

捺菜に倣って見様見真似の正座をしているコレットが、心持ち深めの溜息を吐く。

「「え」」

「え、じゃないです。まったくもう、食いしん坊なんだから」

「おや、フルーツに目が無いコレットに食いしん坊とか言われましてよ、アクラ嬢」

「あら、甘いものが大好きな聖女さんに食いしん坊とか言われちゃったわね、巫女さん」

「……ほ、ほら。二人とも、しっかりと周辺空域の警戒をお願いします。ストック 私は、Mojvusoxki 治癒魔法の術式封印に取り掛かりますので。Mngasosa 紡げ水精、o 治癒の雫——」

にこにこと笑う仲間達から、ぷいっと顔を逸らして、コレットは前を見据えた。

客観的に一見すれば、年頃の少女達による一風変わった旅行風景。どこか観光にでも遠出するのかと見紛うほどの和やかさであったが、そんなものは当然幻想に過ぎない。単純に、これが彼女達なりの緊張解消法なのだ。誤解無きよう付け加えておくと、そこに、無理矢理空元気を搾り出すような悲壮感などない。無縁、と断言しても差し支えはなかった。

——時刻は、間もなく正午を迎えようとしている。

目的地は、天水の大森林デイルパラケルカ。コレットの言葉通り、現在、彼女達は寸時を惜しんで行動している。今の聖女には少なからず負担の掛かる【召喚魔法】さえも躊躇なく用いたほどに。尤も、聖女が解決に向けて活動していることを、大衆に自然と広めることが出来るという副次的メリットが存在する為、一概に無駄とも悪手とも云えないワケだが。

それでは。何故、こうまで手段を選ばず、件の森へ急行しなければならぬのか。

治療魔法、解毒魔法、解呪魔法………果ては蘇生魔法の呪文詠唱を行ない、それ等を逐一封印しつつ、治療師であり召喚師でもある朝色の聖少女は、何とは無しに、冒険者ギルドで白夜捺菜やアクラⅡドゥクニウムと交わした会話を思い返していた。

風の刻。冒険者ギルドの懸賞区域。

報告を終え、報酬を貰い、再び混雑の兆候を見せる受付に背を向けて、聖女と巫女の許にスタスタと戻ってきたアクラの表情は、限りなく無表情に近かった。徒ならぬ重大事が発生或いは予測された

のだと見て取った二人は、より一層に気を引き締める。

一先ず、コレットは最寄の台上に地図を広げて、互いの認識と見解の摺り合わせを行なう舞台を整えた。風と地の精霊から力を借り受けた、聖女お手製の地図に三人の視線が集う。差し当たって、蒼眼の聖女は、魔物による被害位置、並びに被害時期から推測されたことをアクラにも伝えることにした。

説明に然程時間は要さず、紫眼の武闘士は、やや憂鬱ファイターそうな顔で頷いた。

「なるほど……ね。ということは、これから向かうのは当然——
——」

「はい。今日は、デイルパラケル力を調査します」

宣言と同時に聖女が目配せをすると、捺菜は一つ頷き、即座に受付へと向かった。

件の森のみならず、探索難易度の高い区域に赴く際は予め申請を行なう必要が有るのだ。探索資格の有無を確認する為。自力帰還が困難となった時の為。更に極端な話、実力や運が及ばず死亡してしまった時の為に備え、前以って行き先を告げておくのは当然の話だった。時として、『行方不明』というのは『死亡』よりも取り扱いが厄介なのだから。

とはいっても。申請、即許可。或いは申請、即却下と滑らかに話が進んでくれるほど、ギルドの管理体制は甘くない。況してや、相手が聖女ともなれば、尚更に時間を要するのは想像に難くない。寧ろ、冒険自体を止めて欲しいというのが教団上層部の本音だった。

したがって。本来なら、出発はまた後日となるのが道理である。何しろ、件の森へ行くと決めたのは、つい先程。齒痒くとも、ルーはルーだと割り切らなければならないのだ。コレットも捺菜も、勿論アクラも、予め申請など提出している筈がないのだから。

……………尤も。

意気揚々と受付に歩いて行った少女が、白夜捺菜でさえなければの話だが。

その、たおやかな外見を見事なまでに裏切り、非常に非常に強かな性格をした巫女剣士の手に掛かれば、道理の一つや二つ、恐るるに値しない。素晴らしき夕飯の為———もとい、素晴らしき平和の為、彼女の瞳には不退転の輝きが宿っていた。

素っ頓狂な声を発している受付嬢を気の毒そうに見遣りつつ、アクラは再び頷いた。

「ま、そうなるわよね。妾^{わたし}も賛成。考え様によっては、丁度良かったのかも」

「———？ どうしてですか？」

不思議そうに尋ねる蒼銀髪の少女に、桃髪の少女は面倒臭そうに答える。

「どうもね、今、王子さんが天水を取りに行っているらしいのよ」

「……………。……………そういえば、そろそろ採取の時期でした、ね」

頭を抱えなくなる衝動を抑えて、純白の聖女は呻くように呟いた。

「更に言うと、第二王女——リーザ姫の容態が、結構悪くなってるらしいわ」

「治癒薬の在庫は、まだ残っていると踏んでいましたけど……」

「巫女さん風に言えば、藁にも縋りたく、ってヤツじゃない？」

「そう、でしょうね……」

そもそも、天水とは何か。

大森林デイルパケルカの中心部に、それはそれは美しい泉が存在する。その泉の水は、強力無比な破邪効果を保有している為、天より齎された奇跡と恵愛の水……通称『天水』と呼称されており、治癒薬や解呪符等の原材料として、多大多様の需要を誇っている。

では——何故、それを王子が自ら取りに行くのか。

究極的に言えば自分の為であり、客観的に言えばフェガリ王国・第二王女であるリーザ「ドラグーン」フェガリの為である。聡明な姫として知られるリーザ王女は、生まれながらに酷く厄介な病を患っており、その治癒薬の生産には天水が絶対的に欠かせない。

然れども。くだいようだが、『天水』が唯一採取可能な大森林は、とても、とてもとても危険な場所である。それ故に、一流の冒険者でさえ、おいそれと気軽に足を踏み入れられる区域ではない。当然の成り行きとして、天水が含まれている治癒薬や魔法符等は、貴重

で、希少で、高価なモノとなった。リーザ王女が服用している治癒薬も例外ではない。

それを……王族が、私情で、民から預かった大切な税金で、定期的に買い求めようなど以ての外である。だが、それでも妹を見捨てることなんて絶対に出来ない、王に向かって激情のままに啖呵を切り、周囲の反対を悉く押し切り、自ら天水の採取を始めた者の名を、レグルスⅡドラグーンⅡフェガリという。肩書きは、フェガリ王国・第一王子。

王子の立場と、兄妹の親愛。それ等を天秤に掛けなければならず、加えて、万人に明瞭な正解が存在しないという残酷な問い。それに対して、レグルス王子は兄として妹を守る道を選択した。七日七晩の壮絶な親子喧嘩を経て、彼が考えを改めることはなかった……と、表向きには、そういう設定になっている。

実際は——装備、情報、訓練等、家族一丸で応援状態となっているのが真相だ。

当然ながら、立場を省みぬ王子の無鉄砲な行動に、王国、宗教共に、それぞれ物申したいことは山積みであった。実際、彼が都市の復興に多大な功績を挙げて見せなければ、決して認められることなど有り得なかった。家族を見捨てず、民衆も蔑ろにせず、彼は今日も彼方此方を駆けずり回っている。基本性能が飛び抜けて高い、竜人族ならではの業である。

……その行動を、コレットは、敢えて是非を問わずに静観していた。

聖女コレットとしては、下手をすれば国が傾くような真似は控え

て欲しかった。しかし、少女コレットとしては、その危うくも尊い心意気を尊重したかった。

それは、なにも彼女に限った感情ではない。立場と感情の板挟みにされていたのは、聖女だけではなかった。王国とて、なにも好き好んで第二王女を始末しようとしているワケではないのだ。この不安定な国情を鑑みれば尚更である。結果、こうしてレグルス王子の行動が黙認されていることから、それは容易に察することが可能だ。

コレット自身も、結局は何も発言しないという消極的且つ間接的な支援を行なっている。尤も彼女の場合、常日頃から似たような事柄で叱られている身としては、何も言えなかったという情けない事情が隠されていたりもするのだが、それは云わぬが花であろう。

しかし。そう、しかし。

正直に白状すれば……今は、今だけは止めて欲しかったというのが、コレットの偽らざる本音だった。あくまでも推測の段階とはいえ、ただでさえ危険極まりない大森林が、今は、更に凶悪化されているかも知れないのだ。

それで、一体何が問題なのかと云えば、件の森に単独で踏み込める力量の持ち主が消えてしまうことも大変だが、それ以上に、今でさえ混乱極まりない国情だというのに、万が一、第一王子……云い替えると有力な王位継承者が死亡してしまうというのは、よろしくない。途轍もなく、果てしなく、何が何でも、よろしくない。

よって。聖女コレットは、なんとしても王子を死なせるワケにはいかないのである。

.....ふと。

コレットは、厭な胸騒ぎを覚えた。

それは、今朝から根強く感じていた予感とはまた別種の、とてもとても厭な予感だった。凶暴な魔物の急激な増加。それに伴い増え続ける被害者。冒険者達に舞い込む多数の依頼。賄い切れず、補い切れず、深刻に不足していく人手と物資。準備不足による冒険者の負傷。それを、治して治して治し続けて、疲労困憊に追い込まれている自分自身。

「——これは」

定期的に行なわれていた、レグルス王子による天水採取。魔物による被害位置及び時期。突然変異体の噂。^{ミュータント}疑わしき、デイルパラケル力。現在、王子は天水採取中。聖女も巫女も、少女冒険者も、万全な体調とは、お世辞にも云い難い。聖女は治癒。巫女は警備。冒険者は依頼に専念していた。それでも尚、森へ行かざるを得ない心情と国情。

「——まるで」

始めから、誰かに、整えられ、誘導されているような、厭な厭な胸騒ぎ。

正直、気持ち悪い。この構図が、何者かによる陰謀だと仮定した場合、最も陰湿なのは、気付いても気付かなくても、どちらにせよ、デイルパラケル力に向かわないという選択肢が選べないという一点に尽きる。気のせいだと思いたい。気のせいで済んで欲しい。

それでも。朝色の少女は、目を背けたくなる悪い予感を静かに受け入れた。

「コレット？ 何やら焦りが透けて見えますが、どうかしましたか？」

さも当然の如く探索許可を掠め取ってきた捺菜が、自然体で問い掛ける。

「……ええ。殆ど被害妄想ですが、道すがらに一応お話します」

全速で思考を回転させながら、コレットは地図を片付け、出入口へ歩き出した。

悠長に考え込んでいる時間などない。この推理が正しければ、事は一刻を争う。疾く疾く王子を発見して、保護乃至協力を。魔物の調査は、この際その後も構わない。増加原因を突き止め、取り除くより先に、肝心要の国に傾かれては元も子もない。王子の能力と功績と人望厚い存在感は、それほどまでに必要で、重要なのだ。

故に、コレットは考える。

仮に、この状況が罠だとすれば、どんな罠で、どんな対策を取ればいいのか。

「ところで巫女さん。愚問だらうけど、ちゃんと許可は取れたのかしら？」

考え込むコレットを真剣に観察しながら、アクラは努めて明るい声を出した。

「もちろんです。冒険者ギルドには、これでもか、これでもか、わっはっはーってくらいに『貸し』が有りますからね。ある意味、ここでの私は、^{コレット}^{わたし}聖女以上に無敵なのです」

「わお、頼もしい。心倣しか受付の娘^こが涙目だったのは見なかったことにしとくわ」

「あら心外な。彼女に実害が及ばぬよう、その辺の処置も抜かりはありません」

「なら問題ないわね。後顧の憂いなく、ちゃちゃっと森に行つてきましょうか」

「ですね。ああ、コレットとの会話は聴いていましたから、説明は不要ですよ」

そんな背後の会話に、乾いた笑みを浮かべつつ、コレットは建物の外に出た。

「さて、と。聖女さん達は先に門へ行つて。妾^{わたし}もすぐに合流するから」

途端、言つや否や、返事を聴く間も惜しいとばかりに、アクラは一人駆け出した。

まるで手品のように人と人との合間を擦り抜け、アツという間に見えなくなった背中を、コレットは不意を突かれたように、捺菜は深く感謝しつつ、それぞれ見送った。きよとん、とした顔の幼馴染を促して、黒髪の少女は門を指指して歩き始める。

その後――。

友の為。現在、天水並に貴重で希少で高価な品と化している魔力回復の魔法符を、時間の許す限り掻き集めてきた武闘士^{ファイター}を待つていたのは、聖女から感謝感激されながら、巫女から時間の許す限り褒めちぎられるという、恐ろしく手強い羞恥の嵐であった。

第11話 陰湿な誘蛾灯（後書き）

クエーっ！
ε 〓
ε 〓
（ 〓
|
^
）

第12話 天空の乙女達（前書き）

ファンタジーを執筆する風夜に対して「この魔法ってどんな原理？」と訊くのは、

ボン。ーマンに対して「その爆弾ってどこから出したの？」と訊いてしまう事と同義である。

——— 2011年 カザヤ「キニスルナ
「コマカイコトハ？世

第12話 天空の乙女達

――そうして。

長い、長い一日の、第二幕が始まった。

神鳥で高速飛行する聖女達が、デイルパラケル力を指呼の間に捉えた時。恰も待ち構えていたようなタイミングで、森の浅部から数多くの敵意が噴出された。殺気、と云い替えてもいいだろう。単なる敵愾心では済まされない、粘つく無言の殺戮宣言。

次いで。虚勢虚言の類ではないと見せ付けるかの如く、それ等は耳障りな鳴き声唸り声を伴い、湧き出るように現れた。遠目では殆ど点だったシルエツトが、瞬く間に異形の怪物を象つていく。人類の敵。ヒトに仇成すモノ。魔物の、御出座おでましだった。

最早、目と鼻の先。黄金色に光り輝きながら優雅に飛行する神鳥目掛けて、魔物の群れが飛んでくる。それぞれが一定の間隔を保つ飛行陣形。広範囲攻性魔法を警戒した散兵隊形。敵ながら、教科書に載せたいほど見事な展開速度だった。

「――」

刹那の瞬間。敵に関する知識が、コレットの脳裏を急速に過ぎっていく。

ランダムホーネット。全長一メートルという、巨大な蜂の魔物。常に集団で行動する為、魔法による一掃が効果的だが、外見が全く同じにも関わらず各個体で弱点並びに耐性属性が異なるので注意。ランダム、という名はそこに由来する。

ライトニングイーグル。高速で飛行する鷲の魔物。雷属性。戦闘時は常に帯電しており、直接攻撃を行なう為には予め対応処置が必須。雷の攻性魔法や補性魔法を使用する。人間を焼いて食らう為、特に翼人族にとっては危険な巨鳥。

ウィンドエレメンタル。邪悪な意志に凝り固まった風の精霊。風属性。敵対者を弱らせ、取り憑き、見境なく悪意を撒き散らす魔物。憑依対象の精神が崩壊すると、風の攻性魔法で体内からバラバラに切り刻まれ、捨て去られる。

ゴブリンウィング。翼を持つゴブリン。装備は槍と盾。無属性。一匹一匹の戦闘力は然程高くないが、その異常なまでの繁殖力を以って、軍隊規模で襲い来る魔物の典型。雌が存在しない為、他種族の雌を巢に持ち帰り、強引に交尾する。

……………他にも、多種多様。

いっそ、このまま図鑑に閉じ込めてしまいたいほどに、数多の魔物が勢揃いしていた。

「――」

有り得ない、という驚愕を、然れど聖女は即座に受け入れた。

通常、魔物の出現区域は土地に左右される。火山には火属性の。海原には水属性の魔物が出現する。更に極端な例を挙げれば、空には空を飛ぶ魔物が出現する。進化の過程や生物の生態といった小難しい話を持ち出さずとも、それは容易に想像出来るだろう。

ならばこそ必然として、それ等の情報は冒険者の装備品にも著しく影響を及ぼす。火山に赴く際は、火に耐性の有る装備を。海原に赴く際は、水に耐性の有る装備を^{しっか}睨り用意する。それが基本であり、知恵であり、工夫でもある。

では……………天水の大森林デイルパケルカには、どういった属性の魔物が住まうのか。答えは全属性。無・火・水・風・雷・土・光・闇。そう、全ての属性が豪勢に揃っており、故に冒険者は全ての属性に備えなければならない。目前に広がる大森林が、危険区域に指定されている理由の一つである——が、聖女の驚愕原因はソレではない。

問題は。それほど多種類の魔物達が、互いを認め、連携を取っていることだった。

「
大いなる異常。そして、大いなる脅威。」

大勢の凶悪な魔物達が、親の仇を狙う人間のように、一斉突撃を開始。直後、森林の周辺空域が濃厚な霧に覆われた。まだ聖女達には届いていないが、それも時間の問題だ。原因は明確。迫り来る湿^{しむ}

霧を見据えた後、聖女は、一匹の魔物を見上げた。ミストワイバーンが、そこに居た。翼をはためかせ、神鳥よりも高い位置から彼女達を見下ろしている。

全長八メートル程の飛竜。水属性。炎の代わりに毒液を吐き、濃密な霧で獲物を惑わせ、捕食する。その体表は猛毒で守られており、他の竜種と異なり鱗が無い。竜種故の高い魔法耐性を持つ上、生半な武装など事も無げに溶かしてしまう厄介な難敵である。

ただし。他の魔物達と違い、ミストワイバーンは単体で行動していた。

「——なるほど、後方支援のつもりですか」

興味深そうに、聖騎士・白夜捺菜が笑う。

敵の目を眩ませ、味方の突撃を支援する基本戦術。いろいろと気になる点はあるものの、のんびり考察している場合ではない。今この瞬間も、凶暴な魔物の群れが、霧に紛れて肉薄しているのだ。無論、それを見す見すと許してやるほど、彼女達の戦闘経験は浅くない。

指揮者として、聖女・コレット「ソリトウス」エリティアは頭を使う。道中、頼れる前衛二人によって、戦闘行為は禁止されていた。しかしそれは、ただ黙って見ているという意味では断じてない。戦場全体を冷静に俯瞰して、的確な指示を、正確に伝達するというのは、非常に非常に難しい。聖女の責任は、いつでもどこでも重大だ。

然ればこそ。今此处でも変わらずに。

凜冽たる気概を以って、清冽なる澄みやかな声で、朝色の聖少女は開戦を告げる。

「ナズナ、霧と元を断ってください」

まずやるべきは、視界の確保。

一瞬後、捺菜の姿は神鳥頭部に。視認すら許さぬ、神速の一足飛び。腰に帯びるは、かざきり霊刀風切。鯉口を切り、その白い柄に手を掛ける。とはいえ、霧は未だしも——上空に陣取るミストワイバーンは高く遠く、刀剣類の届く距離では到底有り得ない筈だった。

——そう。

得物が、かざきり霊刀風切ではなく、剣士が、白夜捺菜でさえなければ。

「ふっ——！」

抜刀一閃。一刀両断。うんさんむしやう雲散霧消。

解き放たれた一撃は縦一文字。伴う烈風は豪快奔放。それは小癩な霧を散らして散らして消し去って……否、それだけでは飽き足らず、ついだと云わんばかりにミストワイバーンを両断すると同時に、まだまだ飽き足らず、前方空域の魔物達を混乱状態に陥れた。当然だ。余波とはいえ、この暴君じみた風刃を受けて、まともに飛べる方がどうかしている。

後は、まさに台風一過。

たった一太刀で、空は清々しい青を取り戻す。

「集え火精、焼き払え」
Mduakhsao Ykofhlha

その隙を見逃してやるほど、冒険者・アクラッドウクニウムは甘くない。

まともでない武闘士は、^{ファイター}聖騎士の技を追い風に、既に単身敵陣へ突撃していた。羽も翼も無く、然れど、彼女の顔に恐怖の色など欠片もない。そう、有る筈がない。彼女の後ろには聖女が居て、巫女が居て、神鳥まで居るのだ。寧ろ、これで何を恐れるというのだろう。

落下先に待つのは、必死に体勢を立て直すライトニングイーグルの群れ。真紅のドラゴングローブと、白銀のミスリルシューズが、アクラの魔力を受け、紅い光を帯びている。両手両足。たった一度の呪文詠唱で、彼女は四発の魔法を装填していた。

ある種、爽快な空中落下。少女は姿勢制御を怠らず、容赦も遠慮も躊躇もなく――

「――炎の戦斧！」
Fire axe of battle

縦にグルンと一回転して、落雷めいた左踵落としを叩き込んだ。

宛ら、戦乙女の炎槌。燃え盛る紅蓮の踵^{ほのお}を前に為す術などなく、頭部をゴツソリ抉られ、真っ逆様に焼け落ちていく怪鳥。その肉体

には、巨人族でも一発で気絶させてしまう電流が流れていたのだが、そんなものはアクラには通用しない。ミスリル。それ自体が、既に対応処置。加えて、彼女自身の魔法防御力も、常人とは桁が違う。

間髪入れずに、炎の少女は右の手刀で虚空を薙いだ。連動、アクラの右手から発せられた極太の炎斧が、手刀の軌跡通りに右方の魔物達を一撃で焼き払う。切れ味抜群。伊達に斧の名を冠していない。故に、断末魔は聞こえない。首が無ければ、声は出ない。

逆に、アクラの瑞々しい肌は当然無傷である。仮に深手を負ったとしても、心配は無用。神鳥を使役する者。聖女コレット。その、世界に通用する治癒師の聖杖は、始めから絶えずアクラに向けられている。捺菜と同様、これもまた、有り得ない射程距離だった。

——だが、それでも。

魔物達は、それぞれ狩猟本能、略奪本能、殺戮本能に従い、決して攻撃を止めはしない。同胞が何匹殺されようとも、一切合財お構いなしに、引つ切りなしに、何度でも襲い来る。故に軍隊。狩り、奪い、殺し尽くすまで、魔物達は止まらない。

「上等。焼き鳥に成りたい奴から掛かって来なさい」

静かなる裂帛の気合と共に、アクラは魔物を屠り続ける。

更に一閃。また一閃。少女武闘士が虚空を薙ぐ度に、魔物達が次々と焼き払われていく。そこに、隙など無い。回り込もう、狙い撃とう、押し切ろう。そんな姑息な策は、しかし、デタラメな距離から飛来する風の刃によって、その悉くが一掃されていた。

然りとて、極論すれば戦は数である。炎を抜け、風を抜け、神鳥に迫る者達もポツポツと現れていた。高い魔法耐性を持つ、ランダムホーネット。鉄の鎧さえ紙のように貫く凶悪な針を、今こそ突き刺さんと前進する蜂達であったが、哀れ、本当に文字通りの意味で神鳥に一蹴されていた。クエーっ！と勇ましく叫ぶチョコボを、いい子いい子、とコレットが笑顔で褒めている。戦場に似つかわしくない、純真可憐な少女の笑み。

大いなる異常、大いなる脅威を前にしても尚、百戦錬磨の乙女達は余裕綽々だった。

「ちよっ！ ム力つくくらい微笑ましいわね、あの聖女……っ！」

「全く以って同感ですが、ほらほら、次が来ましたよ、火娘さん？」
ひむすめ

「そこ！ 変な渾名はやめなさいっ！
あだな 集え火精、Mduakhsao 焼き払えYk of h1ha——

——！」

風に乗せて届けられた巫女の声に叫び返して、アキラは魔物を踏み台に跳躍する。

捺菜が斬り捨て、アキラが薙ぎ払う。百。二百。三百。四百。五百。抵抗さえ許されず、墜落を強制された魔物は数知れず。右往左往する間もなく、ただただ無造作に刈り取られ、蹂躪されていく。物凄い数だと、神鳥の上から戦いを観察しているコレットは、改めてそう思った。ともすれば、森中の魔物達が此処に集結しているのでは、と危惧するほどに。

ちなみに。魔物に分類されない、普通の野生動物達の姿は見えない。疾うの昔に、所謂、野生の勘を発揮して、遙か彼方へ避難を済

ませていた。おかげさまで、とある一人の少年が首を傾げる羽目となるのだが、彼女達には当然知る由もなかった。

と——刺され、穿たれ、焼き焦がされる異音が、美しい青空に響き渡る。炎槍弾雨。真つ赤に燃える炎の槍が、怒涛の勢いで降り注ぎ、一気に五十匹のライトニングイーグルを即刻焼き鳥にしてみせた。周囲の足場達^{まもの}が根こそぎ焼死してしまった為、自由落下を始めた少女武闘士^{ファイター}を、神鳥チヨコボが華麗に回収する。

戦いは始まったばかり。聖女は、次の行動を指示していく。

「ナズナ、優先順位を風楔、援護、護衛に変更します。引き続き、所定の場所に打ち込んでください。もう、あまり時間が有りません」

「承知しました」

即答。戦闘中に、いちいち真意を問い質すなど、白夜捺菜の役割ではない。

当然、この指示には理由が有る。聖女一行の目を眩ませるだけならば、わざわざ彼女達の到着など待たず、最初から森の周辺空域を霧で覆い尽くしておけばよかった。何故ならば、コレット達は、否が応でもデイルパラケルカに向かわなければならないのだから。

それにも関わらず——恰も待ち構えていたようなタイミングで、ミストワイバーンは、単体で、わざわざ目立つ位置で、見せ付けるかのように霧を噴き出していた。どうぞ斬ってくださいと云わんばかりである。若しくは、前方にのみ意識を向けてください、と。たとえば考え過ぎだったとしても、問題はない。それならそれで、前方の敵を殲滅するのみ。

——この時、既に。

コレットは、今の状況が罠であるという疑念を、ほぼ確信に変えつつあった。

「アクラちゃん。チョコボで前方の敵を集めますから、纏めて炙ってください」

「了解。次で決めるわよ」

即答。忠実な精兵の如く、アクラは再び魔物の群れに飛び込んだ。

途端、今度こそ八つ裂きにせんと群がる異形の怪物達。同時に、大気を震わせ、原始的な恐怖を煽る野生の咆哮が、神鳥の後背から放たれた。然れど、聖女も巫女も全く怯まない。アクラも一切気に留めず、何食わぬ顔でゴブリンウィングの顔を思い切り踏み付けた。

無残。元から醜い緑色の顔が、より酷いことになっていた。しかし、やはりアクラは全く気にする素振りを見せない。若く、美しく、活発な女の姿に、涎を垂らして欲情する小鬼を見ても、全く動じなかった。アクラは今、武闘士^{ファイター}として此処に居る。

ゴオゴオに燃え盛る右フックでゴブリンウィングを焼き殴り、ふんだんに遠心力を乗せた回し蹴りをウィンドエレメンタルにお見舞いする。蹴り飛ばされ、悪しき風霊の思念が怒り心頭となった、その直後。暴発した風の攻性魔法が、自身を含めた周囲の魔物達を細切れに切り刻み、力尽きた邪霊は、そのまま跡形もなく消滅した。勿論、アクラの仕業である。

先程までとは異なり、風刃による援護は無い。とはいえ、それでアクラが容易に囲まれるかといえば、答えは断じて否。元より単独で切り抜ける実力を保有する上、今回は今回で、神鳥チョコボの援護が有った。無論、聖女の指示である。

大きな嘴の先に生まれる、翠色の巨大な魔光球。その名はチョコボール。コレット命名。そのまんまじゃないかという過去のツッコミ（捺菜やシャロンを含む修道院一同による）を置き去りに、可愛げの欠片もない威力を持つ光球が、突風の如く放たれる。

突風は、敵兵に命中するや否や、途端に爆風へと姿を変えて、幾多の魔物を弾き飛ばす。爆ぜ飛ばす、と云い替えても構わない。それは、魔物達の進撃を妨げると同時に、徐々に、そして確実に、アクラにとって都合の良い場所へと誘い込む。常に数手先まで見通すほどの観察力と思考力が無ければ、到底為し得ない芸当である。

「——おやまあ」

一方。後方より現れた伏兵空軍を見据え、黒髪の巫女剣士は風切かざきりを下段に構えた。

本来彼女は剣闘士。セイバーつまりは前衛。だが、それ以前に白夜捺菜はコレットコレットソリトウスソリトウスエリティアの護衛である。アクラのように敵陣へ突撃せず魔法師の真似事をしているのは、単衣ひとえに大切な幼馴染を守る為。それを……重たい枷と見るか、力強い翼と見るかは、個人の見解や価値観によるだろう。捺菜自身の答えは、敢えて語るまでもない。

相も変わらず、微塵の迷もない太刀捌きが、彼女の心を何より雄弁に表していた。

「
巧く不意を突けたと踏んで、魔物達は非常に勢い付いている。」

神鳥前方の敵軍と同様、後方の敵軍も多種多様な魔物達で構成されていた。異常である。脅威である。だがそれは、あくまでも一般人を基準とした話。異常は、より強い異常の前に駆逐される。脅威は、より強い脅威の前に侵食される。それが、全世界共通の理だ。

「
」

^{アンバー}紅茶色の瞳を微かに細め、風の少女は頃合を見計らう。

アクラと違い、白夜捺菜は魔法が使えない。「生憎と不器用者故。然れど、ご心配なく。私^{わたし}には、この一振りさえ有れば充分なのですよ」とは、本人の言葉である。実際、使えないというよりは、必要ないという表現の方が、剣士である彼女には合っていた。

したがって。剣闘士^{セイバー}は剣闘士^{セイバー}らしく、己が剣を以って役割を全うする。

「
……………風よ」

瞬間。少女の囁きに呼応して、虚空に打ち込んだ全ての風楔が始動した。

肉眼では視認出来ない、無色透明な風の楔。合計八つ。いつの間

に、という問いは無意味だろう。白夜捺菜ともあるう者が、単なる援護役に収まるワケがない。加えて、コレット「ソリトウス」エリティアともあるう者が、来ると分かっている狼藉者に対して、何の対策も取らぬワケがない。神鳥の移動一つを取っても、綿密な計算の上に成り立っていた。

そして――全ての楔を線で繋ぐと、大きな、大きな大きな直方体となる。

率直に効果を云えば、それは風の檻だ。間抜けにも纏めて捕らえられた魔物達が、懸命に脱出を試みるものの、当然、叶いはしない。壁は無い。それでも出られない。天井も無い。それでも抜け出せない。床も無い。それでも逃げられない。白夜捺菜が、逃がさない。

嘗て、故郷で習得した風の霊刀術。巫女剣士という呼び名は、単に巫女装束を身に付けているから、という戯けた理由では断じてない。風切に限らず、ありとあらゆる霊刀を扱える器となる。意志有る刀を従え、己が力とする。故に、少女は巫女であり、剣士なのだ。

次の瞬間。巫女の本領を発揮した捺菜は、喜々として剣士の本領をも発揮する。

それ即ち、斬撃。故に、まずは斬る。次に斬る。更に斬る。もつと斬る。とことん斬る。寄らば斬る。寄らずとも斬る。もう何が何でも斬る。斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る………！

閉じ込められた魔物達に向かって、黒髪の巫女剣士は何度も何度も刀を振るう。此処からでは届かない、なんていう常識は、つい先程覆したばかりだ。風刃の威力に至っては、最早説明するまでもな

い。ザンザンザン、と絶え間なく両断される魔物の姿で充分だろ。檻から逃れる方法は唯一つ。死ねばいい。屍だけが、あらゆる意味で、解放を許される。

斬る斬る斬る斬る、剣士が斬る。止まらない止まらない。白夜擦菜は止まらない。風刃が止まらない。暴風が止まらない。竜巻が止まらない。止まるべきは魔物の命。止めるべきは魔物の生。直方体の外には一切影響を与えずに、ただ箱の中でのみ制裁の刃が飛び通う。

「……うわあ。派手にやってるわねー」

突き出された鉄の槍を宙返りの要領で回避して、アクラは呆れたように呟いた。

直後、攻撃を仕掛けてきたゴブリンウィングの脳天に、無慈悲な踏み付けが決められる。一瞬で骨まで蒸散した小鬼になど見向きもせず、彼女もまた、大技の準備に取り掛かった。自身が保有する最大範囲の攻性魔法を以って、前方の敵軍を完膚無きまでに焼き尽くす。

その為に。少女は、意識の大半を呪文詠唱に集中させる。

「Mduakkhsaoo Laee&ukkfuuuu
集え火精、煉獄の焰」

途端、そうはさせじと、まだまだ多い魔物達が迫り、群がり、牙を剥き、爪を振り翳す。

しかし、届かない。どう足掻いても、アクラには敵わない。近付いた魔物から順に、半ば脊髄反射的に、殴り飛ばして、蹴り飛ばして、更に自滅を誘い、同士討ちを促す。程無く、少女の全身が、目も眩むほどの真っ赤な光に包まれる。

次いで。然程の時間を要さず、その光は彼女の右拳に集結された。

Fhsola Kilha Mukifhxaq Sufpuiisooqkkuui
「奔れ、喰らえ、疾く爆ぜよ。其は暴食の爆轟」

その時。実に都合良く、目の前に手頃な標的ゴブリンが現れた。

即行で。これまでにないほど、紅く、赤く、朱く、どこまでもアカイ右のストレートを、ゴブリンウィングの土手っ腹に焼き込む。すると、人間大のアカイ光球と化した元魔物が、聖女と神鳥によって集められ、固められた魔物達の中心へと無造作に飛び込み――

Hblafuvukqisao
「炙れ炎の狂星！！」

瞬間、世界から音が消えた。

正確には、あまりにも凄まじい爆音が、少女達魔物達の知覚能力を凌駕した。捺菜の技が箱なら、アクラの技は球。アカイ、どこまでもアカイ球。炎の球。直径数百メートル以上も有る巨大な球が、次から次に魔物達を吸い込み、焼き炙り、喰らい尽くす。巫女の風技とはまた別の理由で、何人たりとも逃げられない。なんびと

まさに暴食。仇成す者を炙り尽くす、最高位の炎術。

忙しなく羽撃くチョコボ。その強力強大な余波を防ぐ為には、神鳥の魔力を以ってしても意識の大部分を集中させなければならなかった。もしも、この魔法が地上で使用されていたならば、恐ろしく凶悪なクレーターが広がっていたに違いない。

落ちる、落ちる、落ちていく。風に斬られて落ちていく。

消える、消える、消えていく。炎に焼かれて消えていく。

強い魔物も、弱い魔物も、須らく平等に、落ちて、消えて、死んでいく。

……こうして。

風と炎。二つの力が荒れ狂い、暫らくの時間が経過した後。

「……………捺菜やアクラちゃんの方が、よっぽど派手だと思います」

ゴブリンの一匹さえ居ない綺麗な青空を見渡して、召喚師サモナーの少女は溜息混じりに呟いた。

第12話 天空の乙女達（後書き）

戦闘シーンが、ここまで長くなるとは誤算でした。

ところで。割り込み投稿は新着に反映されないの、お気に入りに入れてくださっている方々に対して、どうやって更新をお伝えしたのかと頭を悩ませる今日この頃。

まあ、おとなしく次話を投稿するのが、一番でしょう。たぶん。

第13話 臆な先行投資（前書き）

異世界といえは、チート。

チートといえは、異世界。

そんな訳で、現状把握回その3。

第13話 臆な先行投資

穏やかな森の涼風が、緩やかに頬を撫でてゆく。

束の間。思索と整調に献げた森林浴は終わりを告げる。危険と災厄で満ち満ちた場所に、尽きる名残など有ろう筈もなく。オレは両掌を地面に置き、全身のバネを活かして勢いよく立ち上がり――
―そのまま勢い余って、無様につんのめってしまった。

刹那。蹴躓いて転倒する醜態だけは避けようと、意識を姿勢制御に集中する。

瞬間。この身に宿された膨大な「力」が、まるで行動を補強支援するかの如く放出される未知の感覚を、オレは確かに感じ取っていた。

想定を遥かに超越した、爆発的な推進力に驚愕する間もなく。オレは前方に傾いた姿勢を脊髄反射で制御して、ズザザザザザザザ、と盛大に大地を抉りながら急停止を掛ける。その有様を。多少強引にでも何かに喩えるならば、至近距離で爆風に煽られた風だった。

「――」

呼吸を止めて、代わりに気合いを入れる。

地を滑る風は、豪く斬新なスケートでもあった。靴跡という名の、言い逃れの酷く面倒な新たな痕跡が刻まれていく様が目に映る。【遠触】や【貯蔵】の使用は禁止した。この上異能にまで暴走されたら、もはや手が……もとい、足が付けられない。

——そうして。

結局。オレは軽く二十メートルほどアーススケートに励む結果となった。率直に云って、勢い余り過ぎにも程がある。目の前の自販機まで行く為に、わざわざ1000ccバイクに跨るような、掛け値なしの無駄さ加減。

「――」

遠くに見えていた筈の樹木が、瞬間的に迫ってくる様は地味に迫力満点だった。

オレは安堵の息を吐く。あと、ほんの僅かでも停止が遅れていれば、眼前の樹木と焼けるくらい熱い抱擁を交わす羽目となったに違いない。お断りだね、とオレは思わず後退った。合成系異能者によつて製作された、血肉を喰らう食人植物達に囲まれた過去が脳裡に甦る。多感な子供時代に、幾度も殺し合いを繰り返してきた弊害^{ツケ}。そのひとつだった。

呑み込まれ、無残に溶かされてしまった被害者達は、今頃あの世で茶でも飲んでいる最中だろうか。オレは落ち着いて、目の前の樹木を見据える。ただの植物が、当たり前のように生えているだけだ。そこには何の問題もない。我ながら、トラウマの多い暗殺者だった。

そして、オレは閃き悟る。我が身に染み付いた妙な違和感の正体。これだけあからさまなヒントを与えられれば、嫌でも悟らざるを得ない。強化だ。オレの身体能力が、有り得ないくらいに強化されている。五感も。五体も。恐らくは、第六感さえ例外なく。

「……………」

自己に埋没して、これまでに写し盗った異能の一覧を脳内に表示する。

合計七つ。やはり違う。異能の力じゃない。あの結晶を見過ぎて、何か妙な異能でも転写されてしまったかと心配したけど、どうやら杞憂に終わってくれたらしい。いやそもそも、既に【遠触】と【貯蔵】を装備しているにも関わらず、先程の現象だ。^{アレ}【転眼】の異常動作という線も有り得なくはないが、それはどうもしっくりこない。

この時。

オレは、極めて真剣に。

自分が、既に「人間とは云えないモノ」と化してしまった可能性を視野に入れ直した。

「」

暫らく。体の各部位を細やかに動かして、認識との誤差を精密に検査する。

やや出力を上げ、手刀や足刀を繰り出す。ビュオンビュオンとかギュオンギュオンとか、割と洒落にならない風切り音が、大気を痛烈に震わせる。以前が微風だとすれば、今はもう竜巻の領域に到達していた。もはや、風圧だけで人を殺せるレベルだ。

……………これは、マズイな。

世界記録を片手間で塗り替えられそうなハイスpek具合に、オレは内心戦慄する。

強化。まあ確かに聞こえはいい。実際、強大無比な戦力となるだろう。単純、故に最強。だが、ありとあらゆる行動の基盤となる「身体能力」を持て余すという一種の暴走状態は、正直云って、これっぽっちも歓迎出来ない。

自分では「1」の力を入力したつもりが、しかし「10」の力が出力されてしまう。己の思い通りに動かせない体なんて、それはもう欠陥品以外の何物でもない。精密機械顔負けの正確さを「武器」の一つとして生きてきた「暗殺者」にとっては尚更だ。

銃に喩えてみよう。口径の大きな銃と小さな銃。威力は確かに前者が圧倒的だけど、その取り扱いには非常に難しい。狙いを定めるなんて以ての外。どんなに強大な火力を誇ろうと、当たらなければ何の意味も成さない。時として、大は小に劣るのだ。

「――」

右足。左足。右足。左足。

一步一步。慎重に、亀の如き鈍さで元居た場所まで歩きながら、オレは思考を巡らせる。身体能力を強化されるのは、不気味さ不思議さ不可解さ等に目を瞑れば、べつに構わない。あの地獄めいた激痛に耐えた甲斐は有ったと、多少報われる想いだ。制御を取り戻すのも、それほど時間は必要ない。既に、さっきの不本意なアーススケットで、大凡コツは掴んだ。

問題は……この強化状態に慣れ切った後で、突然元に戻された時、果たして平然と対処が出来るのかという話。所詮は得体の知れない仮初の力。長い時間を捧げて修練を積み重ね、その果てに得た自分だけの力じゃない。敢えて触れずにいる、何処の国のモノとも知れない未知なる言語にも、同様の事が云えてしまう。

詰まる処。この胸奥から湧き上がる鬱々とした感情を、一言で言い表すならば。

「あー、いみわかんねー」

体の赴くままに虚空を見上げ、オレは心の底から思いつ切り嘆いた。

無数のクエスチョンマークがオレの頭を取り囲み、盆踊りに興じている光景を幻視する。いい加減に、オレの仕事人モードというか、真面目な思考を保つのも限界が来そうだった。オレはブルブルと首を振ってクエスチョン達を追い払い、海底にすら届きそうな、深い深い溜息を吐いた。注意一秒、怪我一生。痛みを伴わない教訓には

意義が無い。

とはいうものの、そこはそれ。メインの思考回路が匙を投げて、サブの思考達が挙ってサポートを買って出るカラクリになっているので、オレは遺憾ながらも火急の勢いで復活。のんびりと現実逃避もさせてくれない並列思考に甚く感激しつつ、冷却された思考を澁々と再回転させる。無事を掴み取る為に、有事を薙ぎ払う準備を怠ってはならない。

……実は。後出しジャンケンみたいで、まるつきり説得力皆無だが、身体能力の強化は、一応予想の範囲内ではあった。視界が妙に鮮明だった時点で、有り得る可能性の一つとして想像はしていた。普通に斜め上を行かれてしまったので、あまり威張れる事もないが。

ともあれ。それならそれで、早い内に対応する必要が有る。

オレは早速、脳裡に「強化」という二文字を付け足した。途端に投入された新情報を、推理という名のミキサーが切り刻み、分解していく。やがてソレは各思考回路に配布され、各々の仮説や推論に修正を加えていく。料理には材料が必要。当たり前の話だ。

結果。試食品として浮上してきたのは、必然として次なる疑問だった。

——世の中、タダより高いモノは無い。

空間転移だけなら、百歩……山をも跨ぐ巨人の大足で百歩譲れば、

まだ理解は出来る。

だが。実際には、五体五感が飛躍的に強化され、更に衛星を以つてして「圏外」という、花丸を贈呈したいくらいに妖しい森林で寝かされていた。

やはり分らない。あの「声」は、あの結晶は、オレにこんなデタラメな「力」を与えて何がしたいのか。オレ個人を狙ったのか、若しくは誰でもよかったのか。殺意説。娯楽説。復讐説。隷属説。使役説。依頼説。事故説——エトセトラ、エトセトラ。

あまりに胡乱な状況は、故に幾多の可能性を提議する。

他にも幾つかの仮説を用意してはいるが……どれも今一論理が弱い。目的、或いは対象がオレだと仮定する。すると、殺意説は、手口が迂遠過ぎる。娯楽説は、特に観賞されている気配を感じない。そんな風に、どれもこれも腑に落ちないモノばかりだ。

……天文学的確率で何かに巻き込まれてしまった、という事故説だけは勘弁して欲しい。それは、なんか、すごく悲しい。一生懸命あれこれ考えている自分が、本気で莫迦みたいに思えてしまう。べつに確率論がどうのと云いたいワケじゃなくて、あくまで気持ちの問題。似たような理由で、出来れば愉快犯のケースも遠慮したい。

「……………」

思案の末。オレは、この得体の知れない「力」を暫定的に受け入れた。

グダグダ云った処で、生憎と元に戻す方法の持ち合わせなんてな

い。ならば、とりあえず頼り過ぎない程度には慣れておく必要性がある。どうせ、暫らくは【水術】の実験や研究、そして訓練に時間を費やす予定だったのだ。多少項目が追加された処で特に支障はない。

……それでも強いて問題を挙げるとすれば、訓練を行なう頃合と場所だろうか。

しかし、その問題さえ、このオレにとっては問題^た為り得ない。ふと、自分が裏世間から、甚だ不本意ながらも、魔人だの断罪者だのジャック・ザ・リッパーだのと呼ばれている事を思い出す。なんたる不条理。オレは善良な一般人だと、何度言えば分かるのやら。

ま、べつにどうでもいいや。

オレは、やれやれと苦笑混じりで草叢に屈み、小型カメラと暗視眼鏡を【蔵】に収めて、左右の短刀^{ナイフ}を鞘に戻す。並行して、これから行なう制御訓練に関して頭を働かせた。

念頭には隠密方針。基本的には人目を避けるが、新情報を得る為の接触は許可する。何も隠れ潜むばかりが隠密ではない。寧ろ情報収集という観点においては、積極的に、尚且つ、さり気なく、現地並びに住民達から情報を引き出さなければならぬのだ。

その為にも、人里か若しくは安全な拠点が必要。探索する為には身体能力の制御が必要。訓練する為には邪魔されず集中出来る場所が必要。探索する為には身体能力の制御が必要。思考が行き詰まる。訓練する為に訓練が必要という、袋小路の如き珍妙な矛盾。

——先に結論を云うと、今此処で制御する以外に道はない。

オレは、自分が倒れていた森の広場を見回す。

ヒトの手が一切入らず、ただただ自然のままに繁栄を続けた緑の世界。瑞々しく、生气に満ち溢れ、心地の良い息吹を戦がせる一種の楽園。

だというのに。幸運の女神様でさえ一目散に逃げ出すくらいの不吉な空気が、其処彼処に撒き散らされ、然れど未だに生き物の気配を察知出来ないという摩訶不思議な矛盾。或いは場所自体が意志を持つ類かとも疑ったが、そんな気配はなく、益々以って訳が分からない。

故に。そもそも、そんな所から、果たして本当に、何事もなく御暇させてもらえるのか、まずそこからして非常に疑わしいと云わざるを得ない。端的に云えば、何の出来事イベントもなく、穩便に森を抜ける事は激しく困難だと、オレの直感が心持ち申し訳なさそうに告げていた。したがって、オレは襲い来る脅威に対処する為、予め準備を整えておかねばならない。

詰まる処。逃走は疎か、移動さえ儘ならない状態なんて放置出来るワケないだろって話。元の場所に戻る為の隠密方針。敵性障害を排す為の対処能力。他の誰でもない自分の為に、最低でも訓練が終わるまでは、この二つを両立させる。

……その後は。オレのストレス発散も兼ねて、好き勝手にやらせてもらおうしよう。

命の遣り取り。その土壇場で頼りになるのは、いつだって自分自身。それにも関わらず、この状況で、この状態は、相当本気でヤバイ。可及的速やかに自らの身体性能を把握して、一刻も早く、贅沢を云えば誰にも気付かれることなく、制御を取り戻さなければならぬ。なんて煩瑣^{はんさ}。恐らくオレでなければ、かなりの難易度を強いられたに違いない。

そういう訳で。異能者は異能者らしく、異端の術を惜しみなく振る舞おう。

「――」

オレは左眼の【遠触】を外して、代わりに【幻燈^{げんとう}】を装備した。

気配はない。機械もない。だからといって、誰にも監視されていないという結論には到底至れない。世の中には、場の過去を読み取る情報系異能者さえ存在する。世界中の刑事達が干物と化すまで血涙を垂れ流しそうな、トンデモナイ異能だ。

然れど。情報を読み取る方法が在るなら、情報を隠蔽する方法、妨害する方法、防御する方法等も在るのは道理。それはどこか、ウイルスとワクチンの関係に酷似している。誰かに情報を読ませぬ方法を、更に無効化する方法さえ存在する様は、恰もイタチごっこのよう。予定調和、と云い換えてもいいだろう。

ウイルスは、より強いワクチンに駆逐されて。

ワクチンは、より強いウイルスに侵食される。

要は、より強い意志力チカラを持つ者が勝利するという、全世界共通の極めて明快な理。

それ故に。オレは全力で左眼の【幻燈げんとう】を発動する。【擬態】の効果をも併せ持つ異能の真価を遺憾なく発揮して、森の広場を幻術結界で覆い、擬似的で暫時的な安全を確保する。【透視】が【遠視】の効果をも併せ持つように、属性の似通った異能同士は【転眼】内部で合成可能。敵が何をしてくるか分からないのは、お互い様というワケだ。

第13話 臃な先行投資（後書き）

どのくらいハイスpekになったのかは、次回にて。

第14話 メンテナンス（前書き）

端的に云えば、俺Tuee準備回であり、現状把握回ひとまずラスト。

やり過ぎかしらと思わなくもないですが、とある対城宝具工。スカリバーとかに比べれば、まだ微笑ましいレベルかな、と。

第14話 メンテナンス

全知覚機能を用いて、【幻燈^{げんとう}】が正常に発動した事を確認する。

この結界によって、広場の内部から外部を認識出来ても、外部から内部を認識することは出来ない。此処周辺は既にオレの支配下だ。余程の事でもない限り、多少騒いだ処で何かに目撃される事はないだろう。然り。安全な領域が無ければ、自分で作ればいいだけの話。

その過程で、オレは改めて確信を得た。予想通り、身体能力だけではなく、【転眼】まで格段に強化されている。無論、転写された異能も例外では有り得ない。そうになると【水術】だけではなく、他の異能も一通り確認する必要性が出てくる。なんとという多忙さ。おちおち飯を食う暇もない。それは困る。一秒でも早く終わらせてくれよう。

……そうさ。邪魔する奴は容赦しない。いつだって、オレはそうして生きてきた。

それでも尚、このオレの領域に無断侵入でも企もうものなら、恐怖満載絶望万歳、素敵で愉快な幻術フルコースを以って、それはそれは手厚く持て成してやる。暗殺者ジャックの、心胆を極寒の極致に凍て墮とすトラウマバリエーションは半端じゃないぞ。なんかいろいろ失ったモノは数有れど、それで得たモノも決して少なくはな

いのだから。

——嫌な事を思い出さない内に、閑話休題。

オレは右眼の【貯蔵】と【透視】を入れ替える。

訓練を始める前に、此処周辺の地形等を把握しておきたい。万が一、何者かに此処が発見されてしまった場合に備える為だ。仮に徒労で終わるうとも一向に構わない。それは寧ろ、実に喜ばしいことだ。何しろ、オレが無事なのだから。

結局の処、どこまでいつても人は人。それは異能者さえも例外ではなく、故に、異能とは断じて万能の力なんかじゃない。いや、異能に限らずとも物事に絶対はない。少なくとも、オレはそう信じている。信じてきたから、今もこうして生きている。

よって、オレは異能を過信しない。【幻燈^{げんとう}】で幻術結界を張ったから安心だ、なんていう油断大敵な落とし穴は、疾うの昔に飛び越えている。世の中……何が裏目に出るかなんて、神ならぬ人の身に分かる筈もない。万が一は、常に起こり得るのだ。

たとえば、そう。実際問題、もしも場の異変に敏感な者が近くに居た場合は、折角張った幻術結界が、逆に仇となってしまう。ここで人に見られては困ることをやっていきますよ、と自分から声高に宣伝しているようなものだ。繰り返すが、異能に絶対はない。更に云えば、意志力^{チカラ}は、より強い意志力^{チカラ}に呑み込まれる。そう、ウィルスとワクチンの関係だ。

尤も。オレの狂気めいた意志力^{チカラ}を吞ませてやる気など、微塵も湧きはないのだが。

ただまあ——有り得ないことなんて、世の中には沢山在る。有り得ない、なんてことは有り得ないのだ。有り得ないことが有り得ないならば、有り得ないことが有り得ないなんて有り得ないとか、そういう無駄な言葉遊びは要らない。要は心構えの問題。

だからこそ。オレは常に情報を集め、思考を回転させる。

失敗は成功の母だが、世の中には取り返せない失敗も存在する。しかし物事は常に成功と失敗に枝分かれしているワケではない。たとえ事態がどう転ぼうとも、最後には己が笑い、得をして、ついでに周囲も美味しい思いをする。それこそが、理想的な論理の組み立て方。生きる為、殺す為、絶えず試行錯誤や苦心^{くしんさんたん}惨憺を繰り返してきた、オレの処世術でもある。

総括すると。

セカイに完全な安全地帯なんて在るワケねえだろ。ウダウダと長ったらしく文句を垂れる暇が有ったら、さっさと殺る準備やつとけよって話。

それでは早速。焦らず弛まず、出来るだけ急いで、確実に制御を取り戻そう。

まずは五感五体の性能を把握する。優先順位を、大雑把に分かり

易い言葉で喻えるなら、防御力、回復力、機動力、攻撃力……といった処か。戦闘において、最も重要な要素は誰が何と言おうとも絶対的に防御力だとオレは考えている。それ故の最優遇措置だった。

そうと決まれば、善は急げ。

さてさて、どうやって実験しようかな……と。オレは若干開き直りの境地で、ちよっぴりワクワクしながら思考を巡らせた。

「よっ——」

これで何度目か。草と土に塗れた制服姿で、オレは緑溢るる大地を蹴り付ける。

途端、周囲の風景が強引に引き剥がされる。それは、まさしく翔ぶが如く。高速も高速、超が幾つも付くほどの高速さ。平たく云えば常時縮地状態。瞬間加速は電光石火の領域に。端的に云って、常識や限界といった言葉に喧嘩の大安売りを敢行していた。

訓練当初こそ自らの身体能力に振り回され、随分と肝を冷やした

が、なんかもう慣れた。薙ぎ倒された樹木。大きく抉られた地面。無秩序に撒き散らされた幹枝や緑葉。酔っ払った巨人が千鳥足で通って行ったような、なんとも凄惨な迷惑振りだった。

オレの環境保護精神なんぞ僅か数分すら保たず、既に森林の露と消えている。痕跡という痕跡が彼方あちこち此方に刻み込まれているが、それも別段気にする必要はない。どうせ後で此処等一帯は全て爆破する予定なのだから。シロでもなくクロでもなく、オレは原因不明の大爆発という灰色の領域を選択した。許せ大森林。例の石コロが全部悪い。

せめて火災にだけはならないよう最大限に気を使ったので、それで贖罪としておこう。

強化され、加速された高速思考が、凄まじい速度で回転を続けている。並の思考速度では身体能力に頭脳が全く追い付いて来れない。そうやって力加減を誤る度、植物達と何度熱い抱擁を交わしたのか。オレには、禁断の樹木プレイなんて、そんな非生産的且つ変態的な趣味の持ち合わせはない。無いモノは無い。無いと云ったら無い。

森の広場をグルグル駆け回りながら、オレは周辺に意識を向けた。

取り分け、無残に弾け飛んだ大樹達に注目する。急停止が間に合わず、無様に何度も激突してしまった結果だった。しかし、森の木々には大変申し訳ないが、肝要はそこではない。それ程の勢いで正面衝突を繰り返したにも関わらず、ぜんぜん、まったく、これっぽちも痛くなかったのだ。どこか血が滲んでいたり、皮を擦り剥いたりすることもない。

けれど、自分で手の甲を抓れば普通に痛い。然もありなん。べつにオレの痛覚が麻痺してしまったワケではなく、単純にダメージが無かったのだ。もはや、頑強なんて言葉が陳腐に聞こえてしまう人外の領域。メタルスラ。ムにでもなった気分だ。俄然調子に乗ったオレはノリノリで呪文^マとか唱えてみたが、当然何も起きなかった。果てしなく虚しかった。

今のはメラ。ーマではない、メ。だ……って一度は言ってみたいのだが、無念。

「———と」

土埃の一つも立てず、ピタリと停止する。

運動能力を完全に制御出来ている事を確認して、オレは北叟^{ほくそ}笑んだ。今なら攻性異能者がダースで襲って来ても即行で返り討ちにする自信が有る。おかわりだって不可能ではない。少しばかり好戦的に染まった心を宥めつつ、オレは並列思考を通常^{デフォルト}状態に戻した。

「ふむ———」

実験は、予想を遥かに超えて順調だ。

防御力は怪物。大樹の天辺から飛び降り、地面で背中を強打しても無傷。回復力は化物。短刀^{ナイフ}で深く傷付けた筈の腕には、既に跡すら残らず。機動力は悪魔。身体機能を自由自在に制御可能となった今、文句の付けようなんて一片たりとも有りはしない。

残るは、敵性を排除する攻撃力の実験。

べつにオレは殺傷能力というモノを蔑ろにしているワケではない。ただ防御を固めているだけでは勝利が覚束無いのも、また現実。優先順位の基準は、あくまでも「生存」に焦点を当てており、しかし、それだけでは暗殺者など到底務まらない。

ここで目覚めてから、結構な時間が経過している。もうちょっとくらい遊んでいたかった気もするけれど、手早く素早く済ませるでしょう。時間さえ有れば「あゝあゝゝ！」とかリズムカルに叫びながらターザンごっこに興じたかったのだが、致し方ない。

――ほぼ制御を取り戻した今、もはや長居は無用。

右眼の【透視】と【遠触】を入れ替え、滞りなく準備完了。

オレは薄く笑いつつ右肩をグルンと回転させて、手近な標的を物色。これから、いよいよ結界の外部に干渉する。見付からなければ良し。見付かったとしても、それはそれで良し。【幻燈^{げんとう}】を使えば、透明人間になるくらいは造作もない。現地住民の特徴を把握出来れば、別人に【擬態】して紛れ込む事も可能。くだいようだが、今はとにかく情報が欲しい。

だから。これは、とてもとても傍迷惑な釣りだった。虫を潰す為に、わざわざ1000tハンマーを持ち出すような、極め付けの大人気なさ。べつに構うことはない。誰に遠慮する必要もない。旅の恥は掻き捨て。もちろん苦情の類は受け付けよう。ただし宛先は偉大なる先輩釣り師である例の結晶様までヨロシク。寧ろオレが送りたい。黒い封筒と血文字で。

復讐の黒き焰をメラメラと燃やしながら、オレは、広場で最も巨大な樹木に目を付けた。威風堂々と聳え立つ大樹の、太く硬い幹を

無表情に見据える。まずは最大値の把握。次いで入力と出力の誤差修正を急ぎたい。

その為に。オレは、即断即決をモットーに、ゆらりと重心を落と

し――

「……………メガトンパンチ」

ぼそつ、と呟いて、全力全開の右ストレートを撃ち込んだ。

直後。ドゴオオオオオン！ という冗談みたいな轟音が、恐らくは森全体に響き渡った。たとえば高速道路で、超重量級のトラックが、限界速度を遥かに超えた自爆上等な勢いで、無防備な子供とか轢いてみたら、果たして似たような現象が起きるだろうか。

ドガンバガンベゴンガゴン、と。

罪無き木々を次から次に薙ぎ払い、尚も現在進行形でブイブイ云わせている弾丸を呆然と見送りながら、一方で、オレは名探偵ホームズばりの冷静沈着さで眼前の光景を分析する。僥倖だ。まだまだ大雑把ではあるが、これで大凡の最大値は把握出来た。

――尤も。

一撃で把握出来たこと自体が、やはり強化の恩恵と云える辺り、なんとも皮肉な話だが。

それはさておき、あの単騎暴走族をこのまま放つておけば、瞬く

間に異能の射程圏外まで幅を利かせてしまふ。オレは逸早く【遠触】を発動させ、恰も私刑を受けた浮浪者のようにズタボロとなった力ワイソウな大樹を、ゆっくりと地面に着陸させた。大方【遠触】も例に洩れず強化され、射程距離も伸びたとは思うが、念には念を入れておく。

ちなみに、前方に誰も居ない事は流石に確認済みだ。今のトンデモパンチで被害者が発生していたら、それはもう後味が悪いどころの話じゃない。最悪【癒血^{ゆけつ}】を使つてでも事態を最速で收拾せねばなるまい。御免だ。わざわざ「吸血鬼」を生み出すなんて、絶対に。

「……困ったな。来年の餅つき大会はどうしよう」

右拳を突き出したまま、オレは至つて冷静に前方を凝視する。

盛大に撒き上げられた土煙。耳がイカれるかと思うほどの倒木音。全てを碎き割る勢いで揺れる大地。枝と葉による局地的な集中豪雨。眼下に佇む、酷く歪な形をした大きな残骸。無理矢理にでも名称を与えるとするば、やはり切り株だろうか。

深海に住む貝の如く頑なに沈黙していた筈の森は、数秒間ではあるものの、戦場最前線に掘られた塹壕並の騒音に支配されていた。前方は酷い有様だ。まるで落雷と噴火を足して、更に津波と地震を混ぜ合わせた終末的大災害にでも見舞われたかのよう。

——まあ、率直に云つて。

言い訳無用、弁解の余地なんて欠片もない、トンデモナイ環境破壊だった。

「……………は」

まるで漫画だ。オレは我知らず、乾いた笑みを零していた。

なんなんだろうね、この——場外ホームランを打って拍手喝采を浴びていたら、打球が高級車両に命中。破壊。炎上。これがホントのサヨナラホームランだぜ、とか宣いつつ即刻逃げ出したい情念を抑えに抑え、なんていうか正直マジごめん——的な居た堪れなさは。

特に意味もなく右肩を回転させながら、オレは込み上げてくる笑いを懸命に噛み殺す。

まあ笑いたくもなるさ。なんと、自分はメタ。スライムどころか、はぐれメ。ルだった。それも攻撃力最大値。普通に反則だった。どれくらい反則なのかと云えば、マラソン大会でランナーがヘリコプターを使うくらい反則だ。既に冒涇の領域に片足を突っ込んでいる。

いやそれよりも、今は力の微調整が先だと判断した、その時。

ゾクリ、と。

突如、背筋が凍て付いた。

脊髄を引き抜かれ、代わりに氷柱をゴリゴリと刺し込まれるような悍ましい悪寒。

「
フィッシュ
釣れた」

オレは、ニタリと邪悪に嗤う。

第14話 メンテナンス（後書き）

元からハイスpekだった主人公が、より厨二的に。

通常、最強モノとは即ち、立ちはだかるモノを一方的にしばきたおす俺Tuee物語なのですが（身も蓋も無い）

なんとかマンネリ化だけはしないよう心掛けたいところですね。

ともあれ、これでストック（？）は使い切りましたので、次回の更新は少々時間が掛かります。どうぞ、気長にお待ちくださいませ。

第15話 天水の大森林（前書き）

難産、ここに極まれり。

12月の14日と28日に割り込み投稿させていただきました、第11話と第12話をまだご覧になっていない方は、是非、そちらから先にお読みください（でないと話が結構飛んでますのでw）

第15話 天水の大森林

「私が先に降ります。ちょっと待っててくださいな」
わたし

神鳥の背を離れ、白夜捺菜は森の入口に降り立った。

その動きは惚れ惚れするほど軽やかだ。まるで重さが感じられない、柔らかな身の熟しこな。右手には抜き身の風切。節操という言葉を、どこか遠くに置き忘れてきたような混成空軍を綺麗に片付けた後も、彼女は刀を抜いたまま。然もありなん。まだ、何も終わっていない。いや、王子の保護という観点で云えば、始まってすらいらない。

「……………」

周囲に、馬車や移動系魔導具といった乗り物の類は見当たらない。

尤も……魔導具ならば未だしも、この付近で馬車を止める者など居はしない。御者諸共、魔物の餌となるのが関の山だ。此処は天水の大森林デイルパラケルカ。その美しい景観とは裏腹に、全属性の屈強な魔物達が跋扈する魔境である。

当然の話として。神鳥を使役する聖女一行は、天水の湧く泉に、上空から直接赴くことが可能である。だが、その選択肢は聖女によって棄却された。泉に近付けば近付くほど強力な魔物が出現するこ

とも理由の一つだが、レグルス王子の目的が天水の採取だからといって、彼の現在位置が泉である保証など何処にも無い。

同様の理由で、彼が此処まで辿り着いているという保証も無かった。ふと思い直して城に帰った可能性が有れば、道中で何かしらのトラブルに巻き込まれ、身動きが取れなくなっただけの可能性も捨て切れない。最悪、不覚を取って魔物に喰われた可能性さえも。

それでも尚。コレット達は、畏れつつ此処まで一直線にやってきた。

保証も確証もなく。然れど……今、彼女達には確信が有った。聖女は精霊、巫女は空気、冒険者は熱源で、それぞれが自分なりの確信を胸に抱いていた。真に残念ながら、レグルス王子は間違いなく此処に來ている。そして、既に森の中へ足を踏み入れている、と。

「――」

森林を静かに見据えながら、コレットは思考を回転させる。

緊急事態という名目に託けて、神鳥の巨軀特権を存分に發揮して、森の木々という木々を蹴散らしながら王子を探し回るといふ手段も、使えないことはない。懸念されるのは誤って王子を蹴り殺してしまうことだが、彼女達ならば下手は打つまい。当然、森に住む魔物達はさぞかし怒り狂うだろうが、後先さえ考えなければ、それも特に障害とはなり得ない。

しかし。現実問題として、それを実行に移すわけにはいかない。

やらない、やりたくない……という理由ではなく（もちろん聖女

コレット

はやりたくない）本当に出来なかった。神鳥に限らず、召喚獣を現世に繋ぎ止めておく為には、尋常ならざる莫大な魔力を常に必要とする。端的に云って、コレット「ソリトウス」エリティアの魔力は、既に底を突く数歩手前なのである。

……とはいえ。

仮に出来たとしても、やはり真剣に後先を考慮すれば、疑いようもなく下策だった。

「――」

再びアクラに魔法符を貼られつつ、コレットは心身の倦怠感を意識的に振り払う。

多少ならば、召喚獣自身の魔力で誤魔化せるものの、流石に全くの無消費という虫のいい話はない。【召喚魔法】の使い手が極端に数少ない理由の一つである。その代わり、効果、威力、利便性などは絶大の一言。実際――こうして、デイルパラケルカまで一直線に急行出来たのは、紛れもなく神鳥チョコボの功績だ。

故に出た結論は、急がば回れ。たとえ時間が掛かるうとも、入口から王子の痕跡を確実に追跡する手段をコレットは選択した。チョコボを送り還す手順を進めつつ、白い少女は心を落ち着け、一度だけ深呼吸をする。既に、神鳥の肉体は半透明と化していた。

その間にも。黒髪の巫女剣士は、入口周辺や森林内部の気配を探っていく。殊更慎重に、注意深く。威圧的で攻撃的な気配が多数。一瞬、搜索に支障は無いと考えるが、即座に油断大敵と思ひ直す。ともあれ、一度森に入れば、確実に戦闘は避けられない。

再度入念に。入口付近には何も居ないことを確認して、捺菜は神鳥を見上げた。

「コレット、アクラ嬢。ひとまずは大丈夫です。降りて来てくださ
い」

次いで、自身の囁き声を風に乗せて二人を呼ぶ。

神鳥で威風堂々と着陸しておいて、今更隠密行動が取れる筈はない。だが、ここで大声を上げるような間抜けに、聖女の護衛は務まらない。出来る事を、出来る内に、出来るだけ。努力とは必ずしも成功に結び付くモノではないが、成功者は殆ど例外なく努力をしている。況してや、護衛の失敗とは、即ち聖女や仲間の死。白夜捺菜という少女にとって、それは、断じて認められる未来ではなかった。

そんな彼女に揺ぎ無き信を置いている少女二人は、欠片も躊躇わず神鳥から飛び降りる。デイルパラケルカに先回りをして、レグルス王子に天水の採取を止めさせるという最善策がご破算となった今、やるべきことは決まっていた。

アクラを伴い、静かに降り立ったコレットは、真っ直ぐに神鳥チヨコボを見上げる。目が合う。穏やかな光を湛えた、黄金の瞳。一瞬の間を経て、半ば以上透明化していた神鳥は、この世界に留まる意志を緩やかに手放して、疾く速やかに消え去った。

そうして。聖女はクルリと振り返り、深々と頭を下げる。

「ごめんなさい、帰りは陸路になります」

「あらら、やっぱり魔力が保ちませんでしたか」

「ええ……。本当は、此处で待つて欲しかったのですけれど……」

「気にしない気にしない。ちゃんと一通りの旅支度は整えてきたから」

ひらひらと手を振り、アクラは朗らかに笑ってみせた。

ちなみに荷物持ちはコレットが担当している。教団信者が見れば「痴れ者め！ 聖女様に何をやらせているのだッ！」と、大きな雷いかすちを落とす光景だったが、当の本人は全く気にした様子もなく、剩あまつさえ自ら進んで雑用を買って出る始末である。

勿論、言い訳は準備済みだ。そう、前衛の手を荷物で塞ぐわけにはいかないという、非の打ち所がない正論様が、聖女の脳裏に神々しく降臨していた。尤も、正論が常に正論であるとは限らないのだが、それはまた別の余談。

「あは。シャロンが見たら、なんて言うでしょうね」

「……えつと……その、内緒の方向でお願いします」

視線を明後日の方角へ向ける幼馴染に、捺菜は小さく笑って頷いた。

「はい、承知しました。」

………それでプリンスは聖女様、ご指示をどうぞ」

束の間の休息は終了。

コレットは、再び聖女の顔で指示を出す。

「最優先目標はレグルス殿下の保護。次に、天水の採取を行ないます」

聖女と王子が同時に動いてしまった以上、手ぶらでは帰れない。

「ん？ 魔物の調査はどうするの？」

「この森で何かしら異変が起きている事は、もう確定的だと考えます。」

それに、私だけでなく、先程の戦闘で、捺菜もアクラちゃんも少なからず魔力を消費していますから。ここは変に欲を出さず、用事を済ませたら一目散に撤収しましょう」

「異議なし」

「右に同じ」

周囲の警戒を絶やさぬまま、セイバー 剣闘士とファイター 武闘士は揃って頷いた。

白夜捺菜とアクラッドウクニウム。頼もしい前衛二人に、別段疲労の色は見受けられず、まだまだ余裕に満ち満ちている。しかし、だからこそと云うべきか。コレットは想定される様々な危機を見据え、思考を巡らせ、打開策を練り続けていた。まだ、皆に余裕が残されている今の内に、彼女は、然るべき手を抜かりなく打たなければ

ばならない。

「それでは――」

――
押し掛かる疲労を押し殺して、聖女が森の入口に身体を向けた――
――その瞬間。

再度。少女達は、夥しい殺意の奔流を身に浴びた。発生源など問うまでもない。煩わしい魔物達の鳴き声が、否応なく耳朶に触れる。

油断という油断を徹底的に削ぎ落として、聖女コレットは素早く荷物を持ち直す。聖杖は背負ったままだが、正味問題ない。手や杖を翳さずとも、魔法の行使に何ら支障はない。

「――行きましょう。」

道順は私が示します。ナズナは先頭を。アクラちゃんは背後を」

互いに頷き合って、少女達は進攻を開始した。

――駆ける。

疾風の如く、決して止まらず森林を駆け抜ける。

緑溢るる天然の迷宮を相手に、しかし少女達は迷わない。森の精霊を味方に付けた聖女^{なつ}の道案内は迅速で確実だ。走り難い獣道も、生い茂る草木も何の其^その。目標を発見するまで、彼女達の疾走は止まらない、止められない。

瞬間。性懲りもなく、前方、巨樹の陰より大猿の魔物達が出現。斬る。両断された数多の死骸を踏み越え、先へ進む。右方、ズシンズシンと重たい足音。襲撃の気配。巨大な巨大な象の魔物が出現。蹴る。こんがりと焼け焦げた死骸を飛び越え、奥へ進む。

聖女は、戦闘を完全に剣闘士^{セイバー}と武闘士^{ファイター}へ委ねていた。こと気配察知や近接戦闘に関して、コレットは両者に劣っており、本人もソレを自覚している。それでも十二分に一線級の実力ではあるのだが、餅は餅屋。彼女は道順を示しつつ、一心に先のことを考えていた。

「――おや」

先頭を走る巫女剣士が、多数の屍を発見する。

ヘルタイガー。縦横無尽に大地を駆け回り、地獄の業火を吐き出す、精強な白き大虎達。それが、揃いも揃って無様に地べたを舐めていた。苦悶、憤怒、悔恨と、死に顔は様々だ。押し折れた大樹や燃え尽きた枝葉が、勃発した戦闘の苛烈さを雄弁に物語る。

疾走を止めず、警戒を止めず、少女達は一瞬の内に觀察を済ませた。

白虎達の死因は、剣による殺傷。なんとも分かり易く、見紛うことなど有り得ない。その剣筋、対集団戦における立ち回り、空気に含まれた聖なる気配。いずれも、覚えが有った。第一王子レグルス。彼の聖剣使いの仕業と見て、まず間違いはない。

黒髪の少女は、足を止めぬまま周囲を見回す。先に、奥に、魔物達の亡骸が沢山転がっている。それは、聖女コレットが示す進攻ルートと完全に一致していた。襲われた側である王子にとっては兎も角、追跡する少女達にとっては非常に有り難い道標だった。

そして少なくとも、戦闘終了時点において、王子は間違いなく健在である。更に云えば、この戦闘が行なわれたのは、つい先刻。死後硬直や切断面の真新しさといったグロテスクな話を持ち出さずとも、人間離れ著しい少女達には一目瞭然だった。

接触の時は近い。

然れど、天水の泉までは、まだまだ遠い。

したがって、あくまで結果論ではあるものの、聖女の判断は正しかったのだ。

僅かな安堵感も束の間。突如、地中からドロドロとした流動系の魔物が七匹出現。ぬかに釘という言葉を体現する沼そのものの怪物。物理攻撃が通用せず、敵対者の足下を泥と沼で埋め尽くし、じわじわと呑み込んでしまう厄介な難敵である。が、微かな危機感も束の

間。事も無げに七匹纏めて吹き飛ばす幼馴染を見遣りつつ、コレットは苦笑いを零す。

「適材適所。役割分担の効率性や重要性は理解しているつもりですが……………」

すぐさま。苦笑を微笑に変えて、朝色の少女は真直しんちよくに前を見据えた。

自分だけ楽をしているようで気が引ける、という台詞だけは、聖女の矜持で呑み込んだ。それは、白夜捺菜やアクラッドウクニウムの護衛に、不安や不満が有ると宣言するも同然。故にコレットは聖杖を背負ったまま、案内役兼荷物係に専念している。聖女は、言葉一つ、仕草一つ取っても、細心の注意を払わなければならない。

尤も——実際、不安や不満など、一片たりとも有りはしないのだが。

「……………それにしても。」

レグルス王子は、予想よりも遥かに奥深くまで踏み込んでいるようですね」

上方から襲い来るライトエレメンタルを斬り払い、捺菜は適当な話題を振った。

「らしいわね。なんかもう面倒になってきたから、森ごと焼き払ってもいいかしら？」

「なるほど、名案ですね」

「いいえ、いろいろ待ってください」

頭痛を堪えるような少女の声に対して、アキラは遠い目と棒読み
「プレゼント」
を進呈する。

「王子さんは、最期まで勇敢だったわ」

「なるほど、妙案ですね」

「大却下ですっ！ 焼いちゃ駄目です、名案じゃないです、妙案でもないですっ。それに、この森には水属性の魔物も沢山生息しますから、どのみち無理ですよ」

「それもそつか。しょうがない、地道が近道と信じましょう」

込み上げてくる本物の笑いを抑えて、アキラは雑談を一旦中断した。

ぶんすかと火計絶対反対を唱える可憐な少女の姿は、傍目から見
て、酷く無防備である。それを嘲笑うかのように、左方より、人間
を丸呑みする闇属性の大蛇達が六匹出現。ニョロニョロと凄まじい
速度で地を滑り肉薄したソレ等は、次いで、その毒々しい大牙と禍
々しい殺気を突き立てんと、聖女目掛けて一斉に突撃するものの。

「邪魔」

一蹴。

巨象をも瞬殺した灼熱の烈蹴撃。歯が立たないとはまさにこうい

うことか。一匹残らず、不埒な蛇共を遠慮会釈なく蹴散らして、炎ファイターの武闘士は再び適当な話題を振る。

「なんていうか、流石は聖女さん。随分と熱烈に歓迎されてるわね」

「ウチの聖女様プリンセスは人気者ですから」

くすりと微笑み、捺菜は死んだ振りをしていたオークメイジの頭を風槌で叩き潰す。

「……お二人とも、私が爬虫類を苦手としている事はご存知ですよ
ね？」

「だから急いで蹴っ飛ばしてあげたでしょう？」

おどろおどろしい人面樹を炎槍で焼き穿ち、アクラは悪戯っぽく笑った。

「それは、はい。ありがとうございます、アクラちゃん」

「ん、どういたしまして。」

でもまあ……自分で催促しておいて何だけど、お互い、もう疾っくに貸した借りたの間柄じゃないでしょ？ いつぞやみたいに、礼の言い合いになるのは勘弁だわ」

「ふふ、そうですね。私も、あの時は随分とムキになってしまいました」

くすくす、と。

聖女コレットは、不自然に見えないよう、小さく、淑やかに笑ってみせたが――

「――うゝん、乗ってきませんね」

直後。巫女剣士の冷静な言葉を受け、意図的に晒していた隙を消去した。

進攻初期から少女達を監視していた一つの気配。それが、徐々に距離を取り始めていた。自身の存在が少女達に看破されている事を知ったのか。或いは、単に少女達の速度に付いて来れなくなったのか。若しくは――最早、監視する必要が無くなったのか。

此方から積極的に攻め込むことは避け、監視者を襲撃者に変えるべく敢えて隙を作ってはみたものの……雑談という名の即席三文芝居は、敢え無く失敗。常日頃から隙を無くすよう心掛けている自分達に、敵地で呑気に談笑する愚者の演技は無理があったかも知れないと、コレットは内心で反省した。あと、地味に羞恥心を刺激され、同じく内心で身悶えた。

しかし、収穫が全く無かったワケでもない。

森を駆け抜けながら、聖女は思考を深く巡らせる。一瞬、離脱した監視者を追う選択肢が脳裏に浮上するも、即却下。とつおいつ推測を進めていくと、やはり早急にレグルス王子を保護する必要性に駆られてしまう。最悪、敵軍の真っ只中で気絶する事になるうとも。

「――」

どくん、と。

心臓が、一際大きく鼓動する。

森に入ってからというもの、それどころではないというのに、朝方から絶えず感じていた予感が、どんどん際限なく膨らんでいく。それは、とてもとても穏やかなモノで、胸に渦巻く不安感を取り払うのに一役も二役も買っていた。

どこか、焦がれるように思いを馳せる。今日この日、この森で、何かが起こる。何かとは何なのか。この事件に関係有るのか無いのか。自分に関係有るのか無いのか。何一つとして判然とせず、然れど今朝、確固として少女に根付いていた、あるひとつの予感。

「……………」

胸に灯る温かな期待を、少女は意識の隅に追い払う。

考えなければならぬ事が他にも山ほど溜まっているというのに、曖昧な予感一つに心を奪われている場合ではない。精霊達の声に耳を傾けながら、聖女コレットは一生懸命に足を動かし、前を見据え、頭を働かせ、目的の達成だけに全力で集中する。

熾烈な剣戟の音が聞こえてきたのは、丁度そんな時だった。

第15話 天水の大森林（後書き）

半年以上執筆しても出逢えない少年少女達へ（＾０＾；）ノ
私、第01章を完成させたら、積みゲーを消化するんだ……（おっ
と誰か来たようだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6457u/>

七英雄冒険譚

2012年1月14日20時50分発行